

原遺跡第5次調査概要報告書

例　　言

- 1 本書は、宮城県岩沼市南長谷字上原・北上に所在する原遺跡の第5次調査概要報告書である。
- 2 本調査は、原遺跡の範囲・内容確認のために国庫補助事業として実施したものである。
- 3 現地調査は、岩沼市教育委員会生涯学習課が令和2年(2020)7月14日～11月30日にかけて実施した。調査面積は904m²である。
- 4 調査に際しては地権者である鈴木 清一氏、農事組合法人原生産組合及び近隣住民の方々からご理解・ご協力をいただいた。また川島 秀義氏には現地調査の際に多大なご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。
- 5 出土品整理及び報告書作成については、令和2年(2020)12月1日から2月20日にかけて、岩沼市文化財整理室にて行なった。
- 6 本書の遺構ならびにトレンチ番号は、現地調査時に付したものを使用した。また検出遺構の略号は以下のとおりである。
S A : 柱跡、S B : 掘立柱建物跡、S D : 溝跡、S E : 井戸跡、S I : 壺穴建物跡、
S K : 大型土坑・土坑、P : 柱穴跡
- 7 本書の執筆・編集は、生涯学習課内での協議の上、川又・武田が担当した。なお、作業・執筆分担については下記の通りである。
作業：遺物実測・トレース 兼田、遺構図作成 川又、遺物写真撮影 渡辺・塙谷・斎藤・菅原
執筆：第Ⅰ章、第Ⅲ章、第Ⅳ章、第Ⅴ章 川又、第Ⅱ章 武田
- 8 発掘調査の実施、及び整理作業にあたっては次の諸氏・機関よりご協力・ご教示を賜った。記して感謝申し上げます(五十音順・敬称略)。
相沢 清利、安達 調仁、阿部 明彦、及川 健作、近江 俊秀、太田 昭夫、小川 淳一、恵美 昌之、
大泉 和弘、菊地 照彦、熊谷 篤、小泉 博明、斎野 翔彦、佐久間 光平、佐藤 敏幸、佐藤 憲幸、
白鳥 良一、菅原 祥夫、鈴木 朋子、鈴木 雅、閑根 章義、高橋 栄一、高橋 千晶、千葉 宗久、
徳竹 亜紀子、長島 栄一、永田 英明、丹羽 茂、播磨 由佳、藤沼 邦彦、古田 和誠、村上 裕次、
村田 晃一、吉野 武
文化庁、宮城県教育庁文化財課、多賀城跡調査研究所、原遺跡調査検討委員会
- 9 本報告書における遺構・遺構挿図等の指示は以下のとおりである。
 - (1) 遺構の用語及び略称については、文化庁文化財部記念物課『発掘調査のてびき』に準拠した。
 - (2) 遺構実測図の水系高は海拔を示す。
 - (3) 缩尺は図に示すとおりである。
 - (4) 土層及び土器の色調は「新版標準土色帖」(小川・竹原:1973)に拠る。
- 10 第5次調査の成果については、令和2年度宮城県遺跡調査成果資料集で内容の一部を報告しているが、これと本書の内容が異なる場合は本書が優先する。
- 11 発掘調査の記録や整理した資料、出土遺物は岩沼市教育委員会が保管している。

目 次

例 言

調査要項

| | | |
|-----|-----------------|----|
| 第Ⅰ章 | 調査に至る経緯・経過と調査方法 | 1 |
| 1. | 調査に至る経緯と経過 | 1 |
| 2. | 調査方法 | 2 |
| 第Ⅱ章 | 遺跡の位置と環境 | 3 |
| 1. | 地理的環境 | 3 |
| 2. | 歴史的環境 | 4 |
| 第Ⅲ章 | 調査成果 | 7 |
| 1. | 基本層序 | 7 |
| 2. | 発見された遺構と遺物 | 7 |
| a. | 掘立柱建物跡 | 10 |
| b. | 柱列跡 | 17 |
| c. | 堅穴建物跡 | 18 |
| d. | 井戸跡 | 46 |
| e. | 大型土坑 | 48 |
| f. | 溝跡 | 56 |
| g. | 土坑 | 62 |
| h. | 小溝状遺構群 | 63 |
| i. | その他の出土遺物 | 63 |
| 第Ⅳ章 | 考察 | 65 |
| 1. | 遺物について | 65 |
| 2. | 遺構について | 68 |
| 第Ⅴ章 | 総括 | 73 |
| | 引用参考文献 | 74 |
| | 写真図版 | 75 |

挿 図 目 次

| | | | |
|---------------------|----|----------------------|----|
| 第1図 原遺跡第5次調査地の位置 | 1 | 第34図 SI16出土遺物(1) | 36 |
| 第2図 第5次調査調査区位置図 | 2 | 第35図 SI16出土遺物(2) | 37 |
| 第3図 岩沼市域の地形分類 | 3 | 第36図 SI17 | 38 |
| 第4図 岩沼市域の遺跡分布図 | 5 | 第37図 SI17出土遺物 | 40 |
| 第5図 基本層序図 | 7 | 第38図 SI18 | 41 |
| 第6図 第5次調査I区全体図 | 8 | 第39図 SI18出土遺物 | 42 |
| 第7図 第5次調査II区全体図 | 9 | 第40図 SI19 | 43 |
| 第8図 SB01 | 11 | 第41図 SI19出土遺物 | 44 |
| 第9図 SB01柱穴土層断面図 | 12 | 第42図 SE01・02 | 46 |
| 第10図 SB01(P137)出土遺物 | 13 | 第43図 SE01・02土層断面図 | 47 |
| 第11図 SB02 | 14 | 第44図 SE01出土遺物 | 48 |
| 第12図 SB03・04(1) | 14 | 第45図 SE02出土遺物 | 48 |
| 第13図 SB03・04(2) | 15 | 第46図 SK01 | 49 |
| 第14図 SB05 | 15 | 第47図 SK02 | 50 |
| 第15図 SB06 | 16 | 第48図 SK01出土遺物 | 51 |
| 第16図 SA01柱列跡土層断面図 | 18 | 第49図 SK02出土遺物 | 51 |
| 第17図 SI01 | 19 | 第50図 SK05土層断面図 | 52 |
| 第18図 SI01出土遺物 | 21 | 第51図 SK09 | 53 |
| 第19図 SI02 | 22 | 第52図 SK05出土遺物 | 54 |
| 第20図 SI02出土遺物 | 24 | 第53図 SK09出土遺物 | 55 |
| 第21図 SI04 | 26 | 第54図 溝跡土層断面図 | 57 |
| 第22図 SI04出土遺物 | 27 | 第55図 SD01・04・09出土遺物 | 59 |
| 第23図 SI07(1) | 28 | 第56図 SK10土層断面図 | 62 |
| 第24図 SI07(2) | 29 | 第57図 SK10出土遺物 | 62 |
| 第25図 SI07出土遺物 | 30 | 第58図 小溝状遺構群土層断面図 | 63 |
| 第26図 SI09土層断面図 | 30 | 第59図 その他の遺物 | 64 |
| 第27図 SI10 | 31 | 第60図 5次調査出土の主要な土器 | 66 |
| 第28図 SI10出土遺物 | 32 | 第61図 原遺跡と各横穴墓群の位置関係 | 67 |
| 第29図 SI11 | 33 | 第62図 第5次調査主要遺構の重複関係図 | 68 |
| 第30図 SI11出土遺物 | 33 | 第63図 I期遺構群 | 69 |
| 第31図 SI13出土遺物 | 33 | 第64図 II期遺構群 | 70 |
| 第32図 SI15出土遺物 | 34 | 第65図 III期遺構群 | 71 |
| 第33図 SI16 | 35 | | |

写真図版目次

| | | | |
|--------|----|---------|----|
| 写真図版 1 | 75 | 写真図版 6 | 80 |
| 写真図版 2 | 76 | 写真図版 7 | 81 |
| 写真図版 3 | 77 | 写真図版 8 | 82 |
| 写真図版 4 | 78 | 写真図版 9 | 83 |
| 写真図版 5 | 79 | 写真図版 10 | 84 |

表目次

| | |
|----------------|----|
| 第1表 岩沼市域の遺跡一覧表 | 5 |
| 第2表 据立柱建物跡属性表 | 17 |
| 第3表 柱列跡属性表 | 17 |
| 第4表 壁穴建物跡属性表 | 45 |
| 第5表 井戸跡属性表 | 48 |
| 第6表 大型土坑属性表 | 55 |
| 第7表 溝跡属性表 | 61 |
| 第8表 土坑属性表 | 62 |

【調査要項】

- 所在地 宮城県岩沼市南長谷字上原・北上 地内
- 調査原因 遺跡範囲・内容確認
- 調査主体 岩沼市教育委員会
- 調査期間 令和2年7月14日～11月30日
- 調査面積 906 m²
- 調査指導 文化庁、宮城県教育委員会、原遺跡調査検討委員会（委員長：白鳥 良一）
- 調査担当 岩沼市教育委員会生涯学習課（川又 隆央、武田 裕光、兼田 芳宏）
- 現地調査参加者 川島 秀義（日本考古学協会会員）
塙谷 信幸、斎藤 新彌、渡辺 幹雄
浅川 俊夫、近江 幸次、小野 一志、平信弘、高橋 鳥市、玉山 俊彦、永沼 秋雄、
新田 豊記、早坂 忠正、森 公利
- 整理作業専従者 菅原 健

第Ⅰ章 調査に至る経緯・経過と調査方法

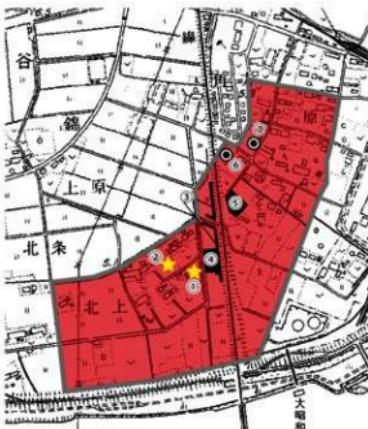
1. 調査に至る経緯と経過

原遺跡の発掘調査は、平成 28 年度の圃場整備事業に伴う第 1 次調査（第 1 図③）において古墳時代中期から平安時代にかけての遺構・遺物が多数発見されたことに端を発する。この調査は排水路敷設に伴う調査のために調査区幅は約 2 m と狭いながら、一辺が 1 m ほどで方形の掘方を有する柱穴群や、美濃地方で生産されたと考えられる須恵器円面鏡が発見されたことから、これまで場所の特定が課題となっていた「玉前駅家」、あるいは「玉前割（閑）」に関する遺跡である可能性が浮上した（岩沼市教委 2021）。この成果を受けて岩沼市では、遺構・遺物の広がりをさらに把握することを目的として、柱穴群が確認された地点の西側水田において平成 29 年度に第 2 次調査を実施し、柱穴や堅穴建物を中心とする遺構群が西側へも展開すること

を明らかにした。しかしながら、第 2 次調査は調査目的を範囲確認に主眼を置いたことからトレチによる調査手法を選択しており、発見した個々の遺構が時期別に、どのような空間を形成していたのか、という点では不明な点が多く残った。平成 30 年度に実施した第 3 次調査（第 1 図④）は、前年度調査の課題の解明に取り組むために調査区を拡大するかたちで実施した。その結果、8 世紀前半から後半の時期には建物の主軸がほぼ真北方向となる桁行 10 間、梁行 3 間の大型掘立柱建物跡が存在していることが判明した。この建物は同位置で主軸を若干異にした建て替えが行われているが、大型建物の周辺にはそれぞれの主軸に近似する小規模な建物もみとめられている。なお、掘立柱建物群に先行する材木塀と大溝も発見されているが、両者の機能時期や規模、性格の詳細の把握については今後の課題となった。令和元年度の第 4 次調査（第 1 図⑤）は JR 常磐線東側での様相を把握することを目的として調査を実施し、8 世紀代と 9 世紀前半以降の 2 時期の遺構面が存在することが確認された。この 2 時期の遺構面ではともに掘立柱建物跡がみとめられており、第 3 次調査で発見された建物群が 8 世紀末葉以降に北東側に位置を移動していた可能性が考えられた。

国庫補助事業 3 年目となる今年度の調査は、第 3 次調査区の西側で実施することになった。この調査の目的は、第 3 次調査で確認された I 期の大溝と材木塀で囲まれた区画内部の様相、及び II 期の遺構群の広がりを確認することである。幸いにして地権者である鈴木清一氏より調査へのご快諾が頂けたことから、調査地となる水田（I 区・第 1 図①）・畑地（II 区・第 1 図②）の休耕補償を含めた土地賃借について協議を重ねた。その後、令和 2 年 4 月 28 日付で鈴木清一氏と「土地賃借契約」を締結し、調査機材等の準備を行った。

現地調査は令和 2 年 7 月 14 日より着手した。I 区から開始した重機による表土掘削に並行して遺



第 1 図 原遺跡第 5 次調査地の位置

構精査に取り掛かり、掘立柱建物や堅穴建物を中心とした遺構の検出、及び重複関係の把握に重点を置いて調査を行った。調査の成果が概ねまとまった11月4日に報道機関に向けた現地公開を行い、11月7日午前中に地域住民、7日午後から翌8日には一般市民を対象とした現地説明会を実施し、190名の参加を得た。その後、遺構図面の作成などの作業を行い、11月25日に機材等を搬出、重機による埋め戻しを11月17日から30日にかけて実施した。なお、調査では随時デジタル一眼レフカメラを用いて写真撮影を行っているが、ドローンを用いた空撮を5回実施している。

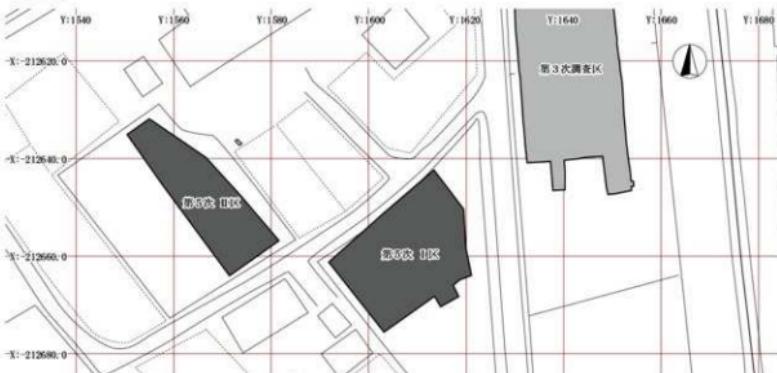
調査中には宮城県教育庁文化財課、多賀城跡調査研究所などをはじめとする方々が来跡し、様々な助言をいただいた。また原遺跡の調査計画・調査方針を審議・承認するための「原遺跡調査検討委員会」を令和2年10月1日に開催し、現地視察を実施した。なお、今年度は新型コロナウィルス感染拡大防止の観点から文化庁専門官による現地視察は断念したが、宮城県教育委員会を通して原遺跡の調査中間報告、及び検討委員会の内容について報告し、指導をいただいた。

2. 調査方法

第5次調査の目的は、前述のとおり第3次調査で確認されたI期の大溝と材木塀で囲まれた区画内部の様相、及びII期の遺構群の広がりを確認することである。このため、検出した遺構についての掘り下げはごく限定的なものにとどめている。

調査はまず、重機を用いてI区・II区とともに基本土層IV層上面までを掘削し、その後に遺構確認面としているV層で精査を実施した。

確認した遺構のうち、柱穴については一段下げる実施して柱痕跡の有無を確認したほか、掘立柱建物や柱列を構成することが確実なものについては部分的に断ち割りを行っている。堅穴建物については一部を掘り下げて調査している。遺構の平面測量に際しては、これまでの調査成果との整合性をはかるために岩沼市が設置した2級基準点、及び圃場整備事業の際に設置された3級基準点を使用した。なお、岩沼市設置の基準点数値については、国土地理院がweb上で公開している「平成23年（2011年）東北地方太平洋沖地震」による地殻変動を補正するパラメーターファイルを用いて補正を行った数値である。



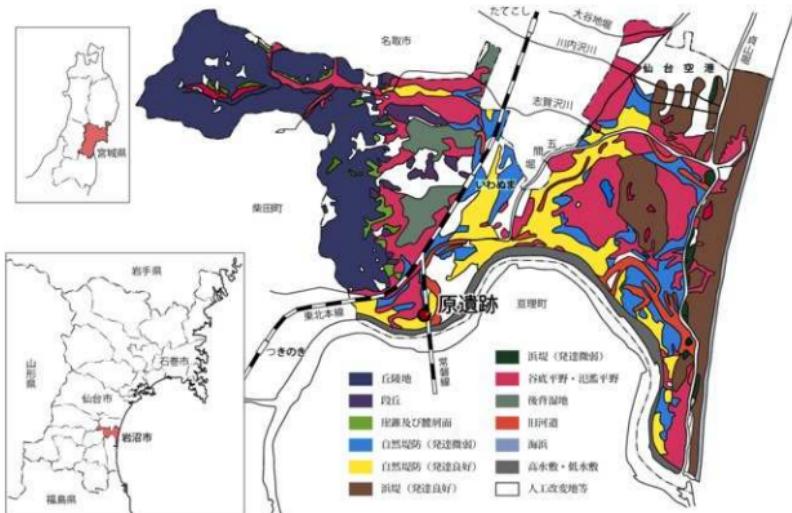
第2図 第5次調査調査区位置図

第II章 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境

岩沼市は宮城県南東部に位置し、東は太平洋に臨み、北は名取市、南は阿武隈川を隔てて亘理町、西は奥羽山脈から派生した陸前丘陵に含まれる高館丘陵で田村町・柴田町と市域を接する。市域の南端を東流する阿武隈川は、福島県と栃木県の境に位置する旭岳に端を発し、福島県内を北流して宮城県へと至る大河川であり、その全長は国内6位の239km、流域面積は5,400 km²を測る。本市は、この阿武隈川が太平洋に注ぐ河口部北岸に位置している。また本市は古代では東山道と、東海道から延びる連絡路が合する地点であったが、現在でも国道4号と同6号、JR東北本線と同常磐線の合流地点となっており、交通要衝の地として知られている。

市域を地質学的に大別すると、西側の山地と東側の広大な沖積地に分けられる。山地は南北に伸びる岩沼西部丘陵（標高100～300m）と高館丘陵（標高200～300m）、これらの丘陵から東へ舌状に張り出す標高10～30mほどの長岡丘陵、二木・朝日丘陵と呼称している小規模な段丘面から成る。山地の東側に展開する広大な沖積地は仙台平野南部域に相当し、岩沼西部丘陵の東縁から太平洋まで7～8kmの幅をもつ。この沖積平野は阿武隈川をはじめ、志賀沢川などの中小河川の堆積作用によつて形成され、自然堤防の発達が顕著である。また、浜堤も発達しており、市域では大きく分けて、岩沼市街地、玉浦地区、海岸地区の三列の浜堤列が確認できる。本報告対象となる原遺跡は、阿武隈川北岸から200～300m北に位置し、阿武隈川北岸に形成された自然堤防上に立地している。



第3図 岩沼市域の地形分類

2. 歴史的環境

岩沼市域では、これまでに縄文時代から近代にかけての遺跡が 64 箇所で確認されている。近年、東日本大震災の復興事業に伴う発掘調査や、岩沼市史編纂事業に伴う学術調査により、地域の歴史を解明するための新たな成果が報告されている。以下に各時代の概略を記す。

縄文時代

縄文時代の遺跡は、市域西側の丘陵部に点在し、晩期の遺物が多量に発見された下塙ノ入遺跡【14】など、特に志賀沢川流域の志賀・小川地区にまとまって分布している。また、沖積地を臨む丘陵上に立地する山畑南貝塚【9】や畠堤上貝塚【36】では、汽水域に生息するヤマトシジミを主体とした貝層の形成もみられる。北原遺跡【7】では、中期後葉の土坑が 50 基近く検出され、磨消縄文を特徴とする土器のほか、石錐や石棒などが発見された。鶴ヶ崎城跡【23】では、第4地点の発掘調査において、鶴ヶ島台式や梨木畠式に比定される早期末の土器群が見つかっている（岩沼市史編纂委員会 2015）。

弥生時代

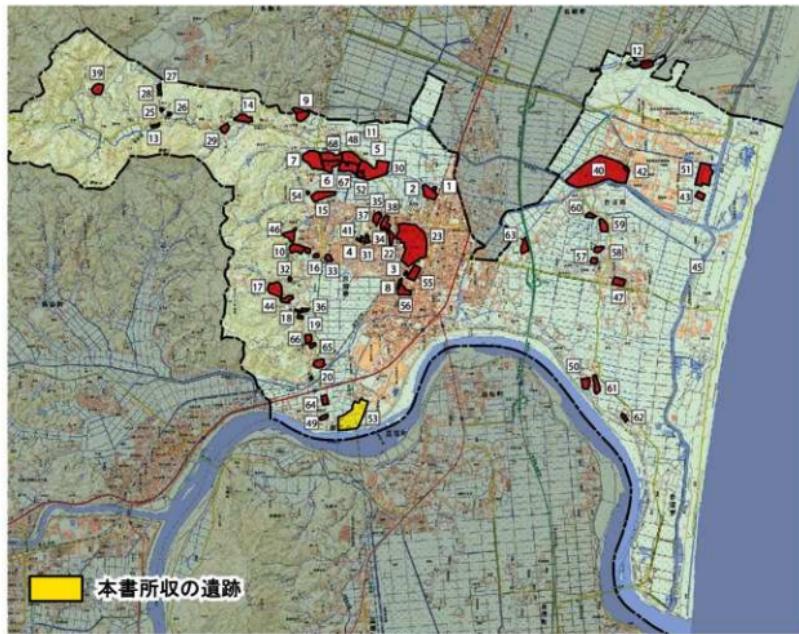
弥生時代の遺跡は縄文時代と同様、市域西側の丘陵部に多く分布している。しかしながら上根崎遺跡【30】や朝日古墳群【37】、平野部に位置するかめ塚西遺跡【2】でも土器の散布が認められ、人間の営みが太平洋側へ拡大する様子をうかがい知ることができる。鶴ヶ崎城跡【23】では、中期後葉と考えられる竪穴建物跡や十三塚式に比定される土器および石包丁などの石器が発見されている。北原遺跡【7】では、北関東を中心に分布する十王台式に並行するものとみられる、後期後半と推量される土器が見つかっている。また、杉の内遺跡【6】では粗痕のある土器も採集されている。（岩沼市史編纂委員会 2015）。

古墳時代

古墳時代の遺跡は高塚古墳、横穴墓、集落跡などが市内各所にみられる。高塚古墳のうち、県指定史跡のかめ塚古墳【1】では、古墳周構の発掘調査において土師器や須恵器のほか、底面から一本二又鶴が出土した。また、地表に顯在する全長約 39 m の墳丘は、周囲が後世に削られたものであり、本来は全長約 48 m を測る前方後円墳であったことが推定されている。造成時期はこれまで中期と考えられてきたが、遺物の年代や古墳の立地条件、墳丘の形態などの点から前期にさかのぼる可能性が示されている（岩沼市史編纂委員会 2015）。

横穴墓は岩沼西部丘陵から派生する低位丘陵の斜面で多く造られ、これまでに 10 箇所の横穴墓群が確認されている（消滅した横穴墓群を含む）。このうち、長谷寺【10】、丸山【3】、二木【8】、土ヶ崎【22】、引込【31】、平等山【16】などの横穴墓群の発掘調査では、7世紀前半頃から造営が開始され、8世紀前半頃まで機能していたと考えられている（岩沼市史編纂委員会 2015、岩沼市教育委員会 2019c）。

集落遺跡では北原遺跡【7】をはじめとする長岡丘陵遺跡群が前期の集落跡として知られるが、そこから南へ約 500m の位置に所在する熊野遺跡【15】でも、同時期の竪穴建物跡群が発見された。また、孫兵衛谷地遺跡【12】では前期の塙釜式に位置付けられる土師器を含む遺物包含層の存在が明らか



第4図 岩沼市域の遺跡分布図

第1表 岩沼市域の遺跡一覧表

| 番号 | 遺跡名 | 時代 | 番号 | 遺跡名 | 時代 | 番号 | 遺跡名 | 時代 |
|----|---------|-------------|----|----------|-------------|----|----------|----------|
| 53 | 原遺跡 | 古墳・古代 | 23 | 御ヶ崎城跡 | 縄文・弥生・中世・近世 | 48 | 長塚丘遺跡 | 縄文・古墳・古代 |
| 1 | かめ塙古墳 | 古墳 | 25 | 八戸A遺跡 | 縄文 | 49 | 笛ヶ崎遺跡 | 縄文・古代 |
| 2 | かめ塙B遺跡 | 弥生・古墳 | 26 | 八戸B遺跡 | 縄文 | 50 | 西須賀原遺跡 | 古代 |
| 3 | 丸山城六幡群 | 古墳 | 27 | 御内A遺跡 | 縄文・古墳 | 51 | 高大瀬遺跡 | 古墳・古代 |
| 4 | 白山精穴墓群 | 古墳 | 28 | 御谷B遺跡 | 縄文・近世 | 52 | 長瀬寺前遺跡 | 近世 |
| 5 | 新明原古墳 | 古墳 | 29 | 新田下遺跡 | 縄文 | 54 | 中原遺跡 | 中世 |
| 6 | 村の内跡 | 弥生・古墳・古代 | 30 | 上柏原遺跡 | 縄文・弥生・古代・中世 | 55 | 丸山遺跡 | 中世・近世 |
| 7 | 北原遺跡 | 縄文・弥生・古墳・古代 | 31 | 引込櫻穴墓群 | 古墳 | 56 | 別宮神社境内遺跡 | 中世・近世 |
| 8 | 二木精穴墓群 | 古墳 | 32 | 古川山遺跡 | 弥生・古墳 | 57 | 新百合子遺跡 | 古代 |
| 9 | 山腹南斜塚 | 縄文・古代 | 33 | 新田遺跡 | 縄文・古代 | 58 | 田前遺跡 | 古代 |
| 10 | 長谷寺前穴墓群 | 古墳 | 36 | 畠内日塚 | 縄文・古墳・古代 | 59 | 西土子遺跡 | 中世 |
| 11 | 長塚古墳 | 古墳 | 37 | 朝日古墳群 | 弥生・古墳・中世・近世 | 60 | 前原遺跡 | 古代 |
| 12 | 孫兵衛谷地遺跡 | 古墳・古跡 | 38 | 朝日遺跡 | 古墳・古代・中世 | 61 | 河原遺跡 | 古代 |
| 13 | 大口遺跡 | 縄文 | 39 | 岩坂寺遺跡 | 縄文・古代・中世 | 62 | 高原遺跡 | 中世 |
| 14 | 下福ノ入遺跡 | 縄文 | 40 | 下野櫻加跡 | 古墳・古代・中世・近世 | 63 | 上中里遺跡 | 古代・中世 |
| 15 | 鶴野遺跡 | 古墳・古代 | 41 | 白山塚 | 近世? | 64 | 越路跡 | 古代・中世 |
| 16 | 平等山櫻穴墓群 | 古墳 | 42 | 船外遺跡 | 古代 | 65 | 柳ヶ森 | 古墳・古代 |
| 17 | 新御跡 | 中世 | 43 | 五ヶ塙遺跡 | 古墳・古代 | 66 | 台遺跡 | 縄文・弥生 |
| 18 | 烟堤上櫻穴墓群 | 古墳 | 44 | 新御前遺跡 | 縄文・古代 | 67 | 長塚遺跡 | 縄文・古墳 |
| 19 | 相方泉遺跡 | 弥生・近世 | 45 | 白山屋(木曳場) | 近世 | 68 | 上小国遺跡 | 弥生・古墳・古代 |
| 20 | 長谷古墳跡 | 室町 | 46 | 竹部遺跡 | 弥生・古墳・古代 | | | |
| 22 | 土ヶ崎櫻穴墓群 | 古墳 | 47 | 新田山遺跡 | 奈良・中世・近世 | | | |

となった。中期以降の様相については遺物の発見が少なく判然としないが、下野郷館跡【40】では南小泉式の土師器壺が出土し、第Ⅱ浜堤列上でも将来、古墳時代の集落遺跡の発見が期待される（岩沼市教育委員会 2018b、岩沼市史編纂委員会 2015）。

古代

岩藏寺遺跡【39】の所在する岩藏寺には、平安時代後期に製作されたと考えられる木造如来像が現存する。発掘調査では、小石を塚状に集積した遺構の底面で火を焚いた痕跡と須恵系土器の壺が発見されており、平安時代から何らかの祭祀行為を行っていた可能性が考えられている（岩沼市史編纂委員会 2018）。北原遺跡【7】や熊野遺跡【15】では、7世紀末から10世紀前半にかけての竪穴建物跡が発見されている（岩沼市教育委員会 2019b）。原遺跡【1】では、桁行10間、梁行3間で、主軸方位が真北方向をとる大型掘立柱建物跡をはじめ、竪穴建物跡や材木塗跡、幅3mを超える大溝などが検出され、円面鏡や墨書き器、刀の口金具が出土した（岩沼市教育委員会 2018a・2019a）。近接する南玉崎遺跡【49】や樋遺跡【64】では、土師器・須恵器などが出土しており、このうち樋遺跡では7世紀末～8世紀初頭頃に位置付けられる須恵器の高台壺などが出土している（岩沼市史編纂委員会 2015）。対岸（阿武隈川南岸）には、平安時代の陸奥国日理郡衙跡と考えられている三十三間堂官衙遺跡（亘理町）が位置し、中世には逢隈湊と呼ばれる湊の存在が『吾妻鑑』に記されている。

中世

中世の遺跡は、過去に朝日古墳群【37】、朝日遺跡【38】、鶴ヶ崎城跡【23】、丸山遺跡【55】、竹駒神社境内遺跡【56】、下野郷館跡【40】、西須賀原遺跡【50】、中ノ原遺跡【54】、岩藏寺遺跡【39】、刈原遺跡【61】、上根崎遺跡【30】などで発掘調査が行われている。平成27年（2015）の熊野遺跡【15】の発掘調査において長軸3.9m、短軸2.4mを測る方形竪穴遺構が確認された。これは倉庫的な性格を持つ遺構と推定されるが、底面からは龍泉窯系の鎌運弁文青磁碗片が出土していることから当該地周辺の中ノ原遺跡で発見された板碑を伴う蔵骨器に納められた被葬者と関わりを持つ在地富裕層などが存在した可能性がある（岩沼市史編纂委員会 2015・2018、岩沼市教育委員会 2019b）。

近世

本市は近世において城下町、宿場町として発展し、竹駒神社の門前町としても賑わいを見せたといわれ、調査実績もほかの時代に比べて多い傾向にある。丸山遺跡【55】、竹駒神社境内遺跡【56】、下野郷館跡【40】、西須賀原遺跡【50】、西土手遺跡【59】、新筒下遺跡【57】、刈原遺跡【61】、高原遺跡【62】などで発掘調査が行われ、仙台藩政期の社会を研究する上で貴重な成果が得られている。鶴ヶ崎城跡【23】第1地点の調査では、溝跡や石積み遺構、碗埋納遺構などが検出され、第4地点では土壘の補・改修痕跡が確認された。遺物では、15世紀前半頃の龍泉窯系青磁盤や天目釉を施した瀬戸産小壺などが出土した（岩沼市教育委員会 2005b、岩沼市史編纂委員会 2015）。

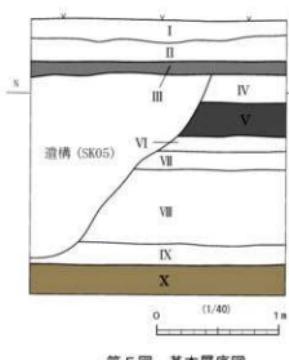
原遺跡【1】の所在する玉崎地区の渡邊家は、江戸時代に仙台藩より阿武隈川舟運の統制を命じられ、船からの税徵収や米などの商品維送を手掛けて玉崎問屋と呼ばれた。また、歌枕としても知られる玉崎地区の「稻葉（田沢）の渡し」は、最も古くからある渡しであったと考えられている。玉崎地区は古代以来、水陸交通の要衝に位置した（岩沼市史編纂委員会 2018）。

第III章 調査成果

1. 基本層序

今回の調査地点のI区は水田、II区は畑地として利用されている。このため、確認された基本土層の上層は若干異なる。しかしながら、III層の黒褐色粘質シルト、VI層にぶい黄褐色砂質シルト、V層の黒色粘質シルトは第1次調査以降から認められるものであり、遺跡内において広範囲な堆積が推定できる。とくにIII層は層位の乱れが少なく、厚みも10～15cmほどと安定しており、付近での調査の掘削に際しては遺構確認面までの指標となる。IV～VII層については第1～3次調査でも認められるものであるが、埋没谷の可能性がある箇所ではV～VII層がみられない（岩沼市教委2019・2020・2021）。なお、今次調査のI区からはVII層以下の層序について、初めて知見が得られている。

一方で、II区北側ではIV層以下の層序が見られず、にぶい黄褐色粘質シルトが堆積している。今回の調査範囲内ではこのII区北側でVII層が確認できたのはSB06掘立柱建物の柱穴底面であり、I区に比べると旧地形が北側へ大きく傾斜していることが分かる。



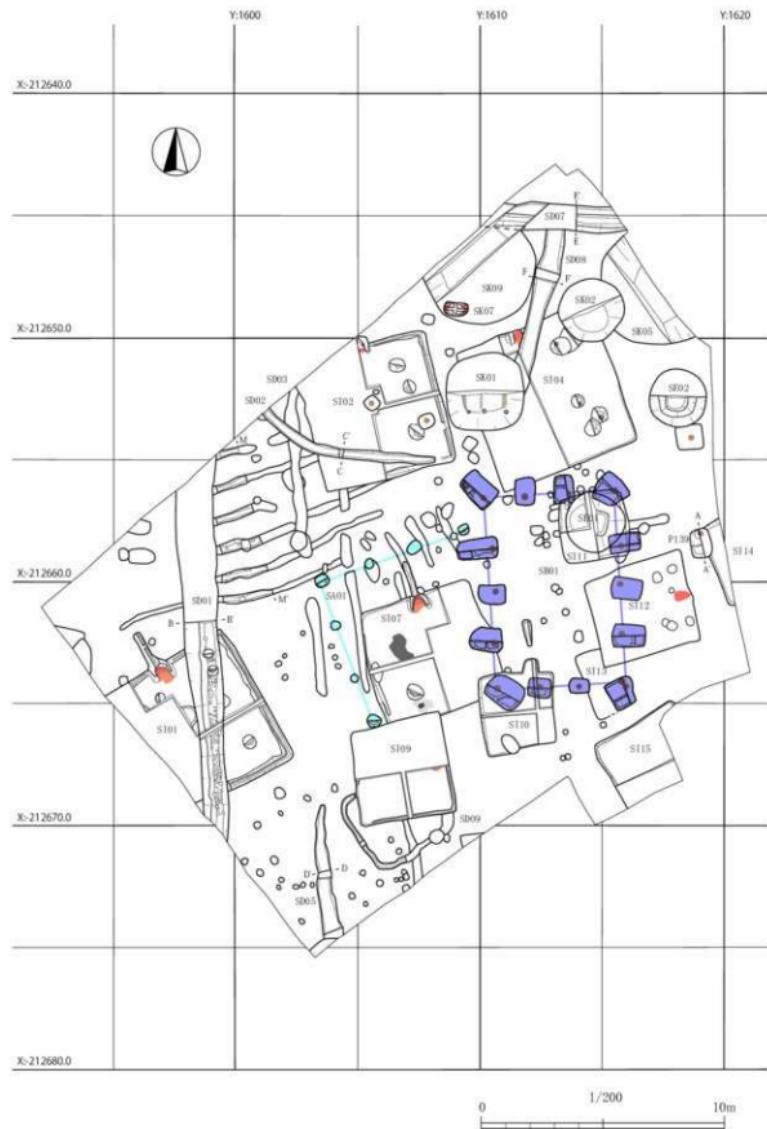
第5図 基本層序図

| 基本層序注記 | | | |
|--------|--------|-----------------|---|
| No. | 土色 | 土質 | 備考 |
| I | 黒褐色 | (10YR3/1) 粘質シルト | 酸化鉄分を多量に含む。しまり弱い。粘性ややあり。現水耕作土。 |
| II | 黒褐色 | (10YR3/2) シルト | 現作物・地上部を微量含む。黒褐色シルトの小ブロックをやや多量に含む。しまりやや強い。粘性ややあり。 |
| III | 暗褐色 | (10YR3/3) シルト | 現作物・地上部を微量含む。黒褐色粘土の小ブロックをやや多量に含む。しまりやや強い。粘性ややあり。 |
| IV | にぶい黄褐色 | (10YR4/3) 砂質シルト | 現土部を微量含む。暗褐色・灰褐色粘質シルトの小ブロックを少額含む。しまりやや弱い。粘性ややあり。 |
| V | 黒色 | (10YR2/1) 粘質シルト | 現作物を微量含む。暗褐色粘土の小ブロックをやや多量含む。しまりやや弱い。粘性ややあり。 |
| VI | 暗褐色 | (10YR3/3) 粘質シルト | 現作物を微量含む。暗褐色・黒褐色粘土の小ブロックを少額含む。しまりやや弱い。粘性ややあり。 |
| VII | 暗褐色 | (10YR3/4) 粘質シルト | 現作物を微量含む。暗褐色・黒褐色粘土の小ブロックを少額含む。しまりやや弱い。粘性ややあり。 |
| VIII | 褐色 | (10YR4/6) 粘土 | 黒褐色粘土の中ブロックを少額含む。しまりやや弱い。粘性あり。 |
| IX | 灰黄褐色 | (10YR5/2) 粘土 | 酸化鉄分を斑状に多量に含む。現作物を微量含む。しまりやや弱い。粘性あり。 |
| X | にぶい黄褐色 | (10YR4/3) 砂 | 酸化鉄分を多量に含む。しまり弱い。粘性なし。 |

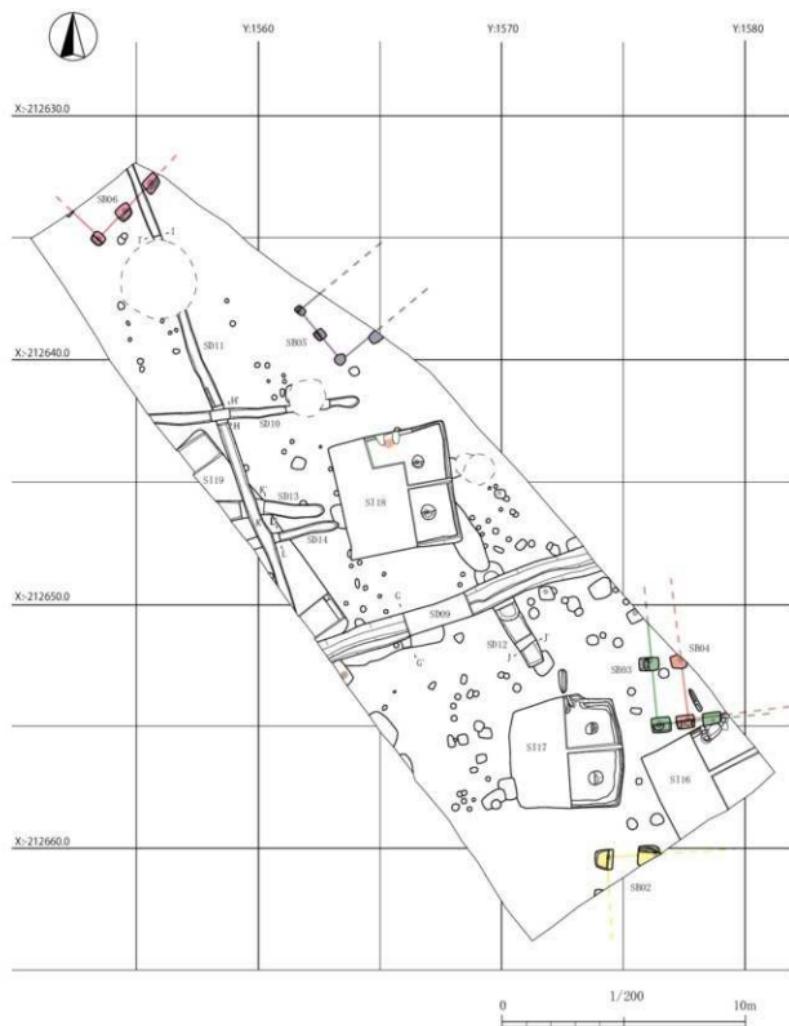
2. 発見された遺構と遺物

第5次調査では、調査面積538m²のI区、そして調査面積366m²のII区で調査を実施した。調査で確認した遺構は、I区では掘立柱建物跡1棟、竪穴建物跡11棟、井戸跡2基、大型土坑4基、柱列1列、溝跡6条、土坑1基、柱穴、そして小溝状遺構群である（第6図）。II区では掘立柱建物跡5棟、竪穴建物跡4棟、溝跡4条、柱穴である（第7図）。

出土遺物はI・II区とともに古墳時代終末期から平安時代の土師器・須恵器が多数を占め、ごく僅かに弥生土器、古墳時代中期の土師器、石製品、カマド支脚などの土製品が含まれる。遺物は主に遺構内、及び遺構精査時に出土しているが、重機による表土掘削でも出土している。出土遺物の総数は整理箱で20箱程度である。以下に発見された遺構別に詳述する。



第6図 第5次調査I区全体図



第7図 第5次調査Ⅱ区全体図

a. 堀立柱建物跡

【SB01】(第8・9図)

I区中央東寄りに位置する。SI04・07・10・11・12・13と重複関係にあり、SI04・07・13より新しく、SI10・11・12より古い。東西3間、南北4間の南北棟であり、桁行総長8.04m、梁行総長5.24mを測る。建物の主軸方位は東列で計測すると、真北から3°西へ傾く。柱穴掘方の平面形は長軸167～84cm、短軸126～60cmを測る長方形であるが、掘り下げを行った10穴のうちで段掘りが行われているものが6穴ある。これらの柱穴で深く掘り下げているのは、いずれも建物側である。柱穴の大半は桁行・梁行に対して直交して掘られるが、四隅の柱穴は長辺が建物に対して45°ほど傾くもの(P33・137)と、短辺が45°ほど傾くもの(P130・140)の2者がある。柱痕跡はすべての柱穴で認められ、柱筋のとおりは概ね良好である。確認した柱痕跡は22～26cmほどの円形である。掘方の埋土は、基本層Ⅷ層である褐色粘土ブロックを多量に用いて埋め戻されている。なお、南西隅のP137では、柱穴掘方内に柱痕跡が2つ確認されており、1つは床束の可能性が考えられる。

遺物は第10図1に図示した須恵器壺のほか、非ロクロ成形の土師器壺・甕、須恵器蓋・甕が出土している。小片のため図示を見送った遺物の中には、内・外の両面に黒色処理を施した非ロクロ成形の土師器壺、合子状の蓋が含まれている。図示した遺物の年代観では8世紀前半頃と考えられるが、後述する第3次調査の成果をあわせ考えると、本遺構は8世紀半ば頃の年代観と考えられる。なお、P135からはウメと思われる種子も出土している。

【SB02】(第11図)

II区南部に位置する。確認した範囲では東西1間、南北1間であるが、調査区南側へさらに広がるため、棟方向も含めた全体の規模は不明である。確認した範囲での北辺は1.86mを測る。建物の主軸方位は北列で計測すると、真北から86°東に傾くことから、東西の柱列は真北から4°前後西へ傾くものとみられる。柱穴掘方の平面形は長軸92～81cm、短軸78～71cmを測る長方形である。なお、確認した柱痕跡は20cmほどの円形である。

遺物は非ロクロ成形の土師器甕と弥生土器が出土しているが、図示はできなかった。これまでの調査成果を踏まえると、主軸がほぼ真北方向であることから、本遺構は8世紀前半から後半頃の年代観と考えられる。

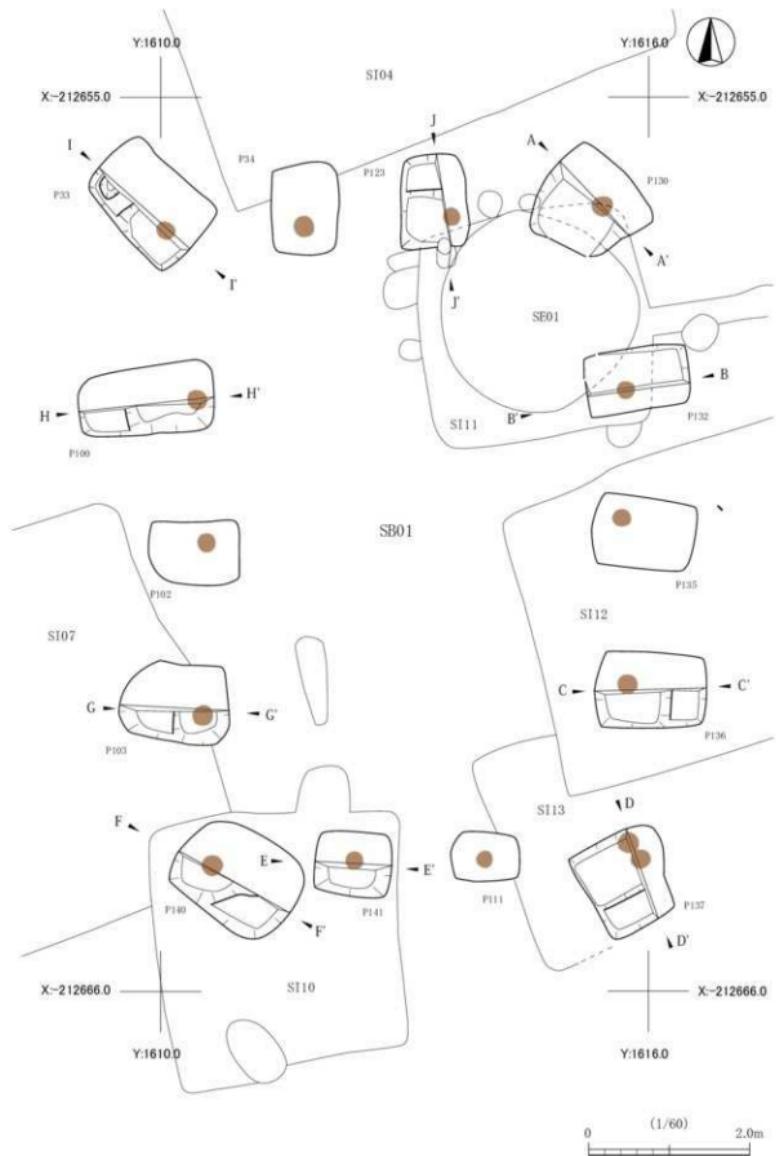
【SB03】(第12・13図)

II区南部東寄りに位置する。SB04、SI16と重複し、SI16より新しいが、SB04とは直接切り合わないために新旧関係は不明である。確認した範囲では東西1間、南北1間であるが、北側には展開しないことから東西棟であるとみられる。東側は調査区外へさらに広がるため、全体の規模は不明である。確認した範囲での南辺は2.20m、西辺は2.62mを測る。建物の主軸方位は西列で計測すると、真北から8°西に傾く。柱穴掘方の平面形は長軸80～76cm、短軸62～44cmを測る長方形である。なお、確認した柱痕跡は24cmほどの円形である。

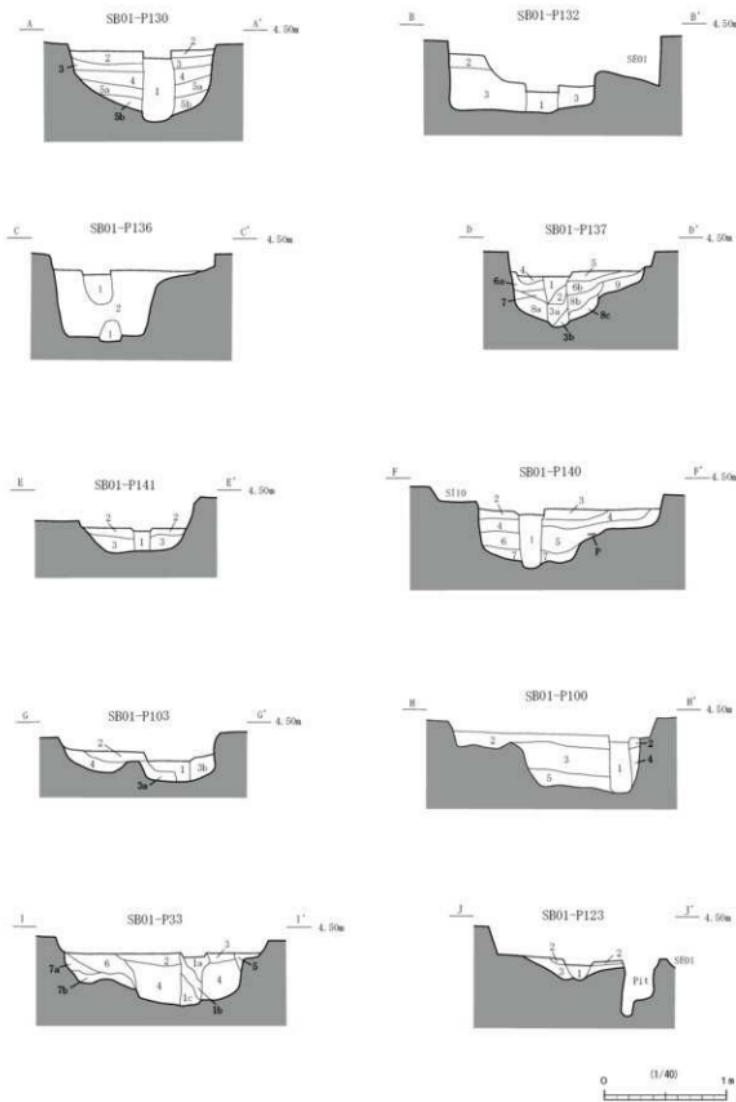
遺物は非ロクロ成形の土師器甕と須恵器壺が出土しているが、図示はできなかった。本遺構も主軸が僅かに西へ傾くものであることから、8世紀前半から後半頃と考えたい。

【SB04】(第12・13図)

II区南部東寄りに位置する。SI16と重複し、これより新しい。前述のとおりSB03との新旧関係は不明である。確認した範囲では東西1間、南北1間であるが、調査区東側へさらに広がるため、全体



第8図 SB01



第9図 SB01柱穴土層断面図

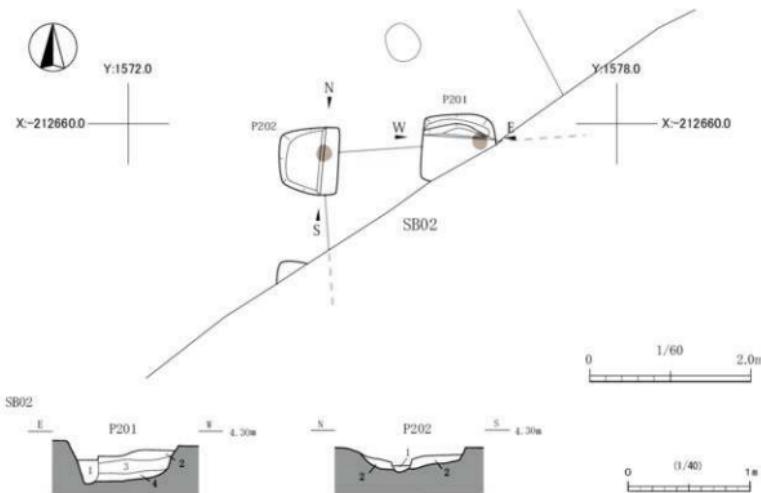
SB01 桁穴 土層注記

| 柱穴名 | 層% | 土色 | 土質 | 備考 |
|------|----|---------|-----------------|---|
| P130 | 1 | 黒褐色 | (10)K3(2) 納賀シルト | 褐色粘土の中ブロックを多量に含む。しまりやや強い。塑性・粘性ややあり。 |
| | 2 | 黒褐色 | (10)K4(1) 納賀シルト | 褐色粘土の中ブロックをやや多量に含む。しまりやや強い。塑性・粘性ややなし。 |
| | 3 | 褐色 | (10)K4(4) 粘土 | 黒褐色粘土の中ブロックを少量に含む。しまりやや強い。塑性・粘性ややあり。 |
| | 4 | 褐色 | (10)K4(1) 納賀粘土 | 黒褐色粘土の中ブロックをやや多量に含む。しまりやや強い。塑性・粘性ややなし。 |
| | 5a | にじい・黄褐色 | (10)K4(2) 粘土 | 黒褐色粘土の中ブロックをやや多量に含む。しまりやや強い。塑性・粘性ややあり。 |
| | 5b | 黒褐色 | (10)K3(2) 粘土 | 黒褐色粘土の中ブロックを多量に含む。しまり強い。塑性・粘性あり。 |
| P132 | 1 | 黒褐色 | (10)K3(2) 粘土 | 褐色粘土の中ブロックを多量に含む。しまりややあり。塑性・粘性ややあり。 |
| | 2 | 褐色 | (10)K4(1) 納賀シルト | にじい・黄褐色粘土の中ブロックを少量含む。しまりやや弱い。塑性・粘性なし。 |
| | 3 | 黒褐色 | (10)K3(1) 粘土 | 褐色粘土の中ブロックを多量に含む。しまり強い。塑性・粘性ややあり。 |
| P136 | 1 | 黒褐色 | (10)K2(2) シルト | 現生物を少額含む。褐色粘土の中ブロックを多量含む。しまり弱い。塑性・粘性あり。 |
| | 2 | 黒褐色 | (10)K3(3) 納賀シルト | 褐色粘土の中ブロックを多量化物・黑色粘土の中ブロックを多量含む。しまり強い。塑性あり。 |
| P137 | 1 | 褐色 | (10)K5(1) | 現生生物を少額含む。褐色粘土の中・中ブロックを多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |
| | 2 | 褐色 | (10)K4(1) 納賀シルト | 褐色粘土の中・中ブロックを多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性あり。 |
| | 3a | 黒褐色 | (10)K4(1) 納賀シルト | 褐色粘土の中・中ブロックを少量含む。しまり弱い。塑性・粘性あり。 |
| | 3b | 黒褐色 | (10)K4(1) 納賀シルト | 褐色粘土の中・中・大ブロックを少量含む。しまり弱い。塑性・粘性あり。 |
| | 4 | 褐色 | (10)K4(1) 納賀粘土 | にじい・黄褐色粘土を少量含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややなし。 |
| | 5 | 黒褐色 | (10)K4(1) 納賀シルト | 褐色粘土の中・中・大ブロックを多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性あり。 |
| | 6a | 褐色 | (10)K4(1) 粘土 | 褐色粘土の中・大ブロックを多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |
| | 6b | 褐色 | (10)K4(1) 粘土 | 褐色・黒褐色粘土の中・大ブロックを多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |
| | 7 | 黒褐色 | (10)K4(1) 粘土 | じりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |
| | 8a | 黒褐色 | (10)K4(2) 粘土 | 褐色粘土の中・大ブロックを多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややなし。 |
| | 8b | 黒褐色 | (10)K4(2) 粘土 | 褐色粘土の中・大ブロックを多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性あり。 |
| | 8c | 黒褐色 | (10)K4(2) 粘土 | 褐色・暗褐色粘土の中・大ブロックを多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性あり。 |
| | 9 | 灰褐色 | (10)K4(2) 粘土 | 褐色・黒褐色粘土の中・大ブロックを多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性あり。 |
| P141 | 1 | 黒褐色 | (10)K2(1) 納賀シルト | 現生生物を少額含む。褐色粘土の中ブロックを少量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややなし。 |
| | 2 | 黒褐色 | (10)K3(1) 粘土 | 褐色粘土の中・大ブロックをやや多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややなし。 |
| | 3 | 黒褐色 | (10)K3(1) 粘土 | 褐色・暗褐色粘土の中・大・大ブロックをやや多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |
| P140 | 1 | 黒褐色 | (10)K2(1) 納賀シルト | 褐色粘土の中・大・大ブロックを多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |
| | 2 | 黒褐色 | (10)K2(1) 粘土 | 褐色粘土の中・大・大ブロックを多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややなし。 |
| | 3 | 褐色 | (10)K4(1) 粘土 | にじい・黄褐色粘土の中・大・大ブロックを多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややなし。 |
| | 4 | にじい・黄褐色 | (10)K2(3) 粘土 | 褐色粘土の中・中・大ブロックを多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |
| | 5 | 黒褐色 | (10)K4(1) 粘土 | 現生生物を少額含む。褐色粘土の中・中・大ブロックを少量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |
| | 6 | 黒褐色 | (10)K4(2) 粘土 | 現生生物を少額含む。褐色粘土の中・中・大ブロックを少量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |
| | 7 | 褐色 | (10)K4(4) 粘土 | 褐色粘土の中・中・大・大ブロックを少量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |
| P103 | 1 | 褐色 | (10)K3(3) 納賀シルト | 現生生物を少額含む。褐色粘土をやや多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややなし。 |
| | 2 | にじい・黄褐色 | (10)K2(3) 納賀シルト | 褐色粘土の中・中・大ブロックをやや多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややなし。 |
| | 3b | 褐色 | (10)K2(3) 粘土 | 褐色・黒褐色粘土の中・大・大ブロックを少量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |
| | 3b | 褐色 | (10)K2(3) 粘土 | 褐色・黒褐色粘土の中・大・大ブロックを少量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |
| | 4 | 黒褐色 | (10)K3(2) 粘土 | 褐色粘土の中・大・大ブロックを多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややなし。 |
| | 5a | 黒褐色 | (10)K3(1) 粘土 | 現生生物を少額含む。褐色粘土の中・中・大ブロックを少量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |
| | 5b | 黒褐色 | (10)K3(1) 粘土 | 褐色粘土の中・中・大・大ブロックを少量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |
| | 6 | 黒褐色 | (10)K2(1) 納賀シルト | 現生生物を少額含む。褐色粘土をやや多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |
| | 7a | 褐色 | (10)K4(4) 粘土 | 褐色粘土の中・中・大・大ブロックを少量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |
| | 7b | 黒褐色 | (10)K4(1) 粘土 | 褐色粘土の中・中・大・大ブロックを多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |
| P123 | 1 | 黒褐色 | (10)K5(1) 納賀シルト | 褐色粘土の中・中・大・大ブロックをやや多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややなし。 |
| | 2 | 褐色 | (10)K4(1) 納賀粘土 | にじい・黄褐色・褐色粘土の中・中・大・大ブロックを少量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややなし。 |
| | 3 | にじい・黄褐色 | (10)K4(3) 粘土 | 褐色粘土の中・中・大・大ブロックを多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |

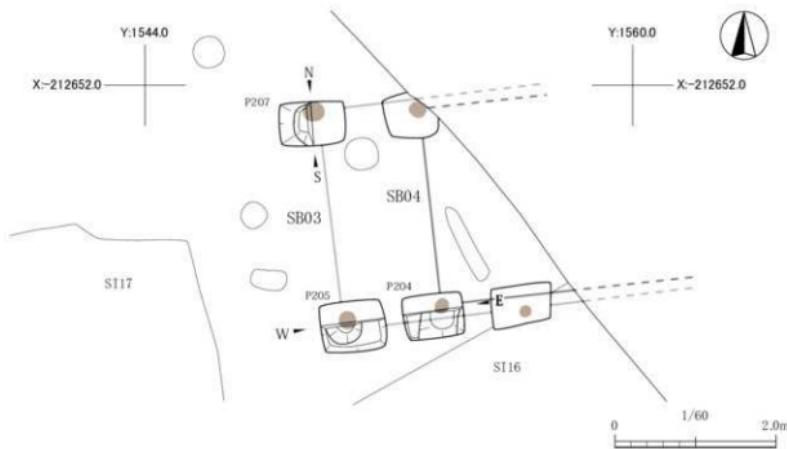


| 番号 | 細部・層位 | 種別 | 加種 | 外 面 | 内 面 | 残 存 | 出土量(cm) | 西側・東側 |
|----|-------|-----|----|------------------------|-------|--------|------------------|-------|
| 1 | 西側・埋土 | 埋立部 | 坪 | ロクロナダー追込軋軸ヘタ切り離し後ヘタケズリ | ロクロナダ | 全体の1/2 | (15.3) (9.8) 4.1 | 7-1 |

第10図 SB01(P137) 出土遺物



第11図 SB02



第12図 SB03・04 (1)

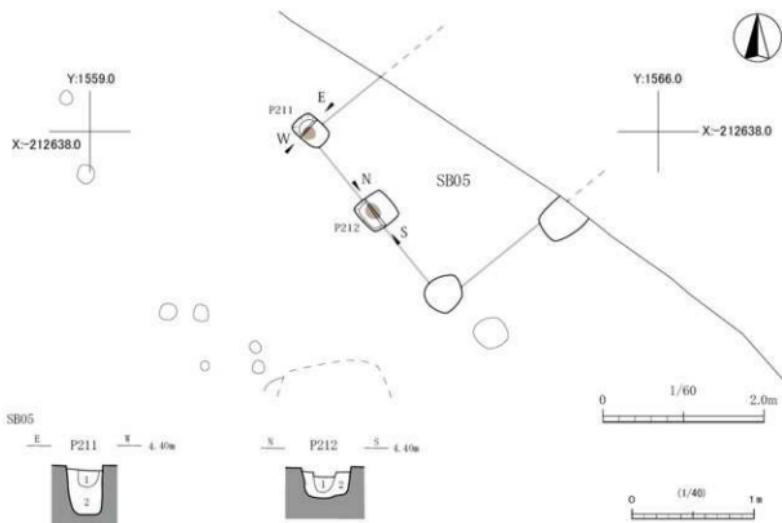
SB03・SB04



SB03・SB04柱穴土層注記

| 柱穴No | 層No | 土色 | 土質 | 備考 |
|------|-----|-----|-----------------|---|
| P204 | 1 | 黒褐色 | (10YR3/1) 粘質シルト | 褐色粘土の中ブロックをやや多量に含む。しまりやや強い。塑性・粘性ややあり。 |
| | 2 | 黒褐色 | (10YR2/2) 粘質シルト | 褐色粘土の中ブロックをやや多量に含む。しまりやや強い。塑性・粘性ややあり。 |
| | 3 | 黒褐色 | (10YR3/1) 粘質シルト | 褐色粘土の大ブロックをやや多量に含む。しまりやや強い。塑性・粘性ややあり。 |
| | 4 | 褐色 | (10YR4/4) 粘土 | 黒褐色粘質シルトの大ブロックをやや多量に含む。しまりやや強い。塑性・粘性ややあり。 |
| | 5 | 褐色 | (10YR4/4) 粘土 | 黒褐色粘質シルトの大ブロックを少量化。しまりやや強い。塑性・粘性ややあり。 |
| P205 | 1 | 黒色 | (10YR2/1) 粘質シルト | 褐色粘土の小ブロックを少量化。しまりやや強い。塑性・粘性ややあり。 |
| | 2 | 黒色 | (10YR2/1) 粘質シルト | 褐色粘土の小・中ブロックを少量含む。しまりやや強い。塑性・粘性ややあり。 |
| P207 | 1 | 黒褐色 | (10YR3/1) 粘質シルト | 褐色粘土の大ブロックを多量に含む。しまりやや強い。塑性・粘性ややあり。 |
| | 2 | 黒褐色 | (10YR3/2) 粘質シルト | 褐色粘土の大ブロックを多量に含む。しまりやや強い。塑性・粘性ややあり。 |
| | 3 | 黒褐色 | (10YR3/2) 粘質シルト | 褐色粘土の大ブロックをやや多量に含む。しまりやや強い。塑性・粘性ややあり。 |
| | 4 | 黒褐色 | (10YR3/2) 粘質シルト | 褐色粘土の小ブロックを少量含む。しまりやや強い。塑性・粘性あり。 |

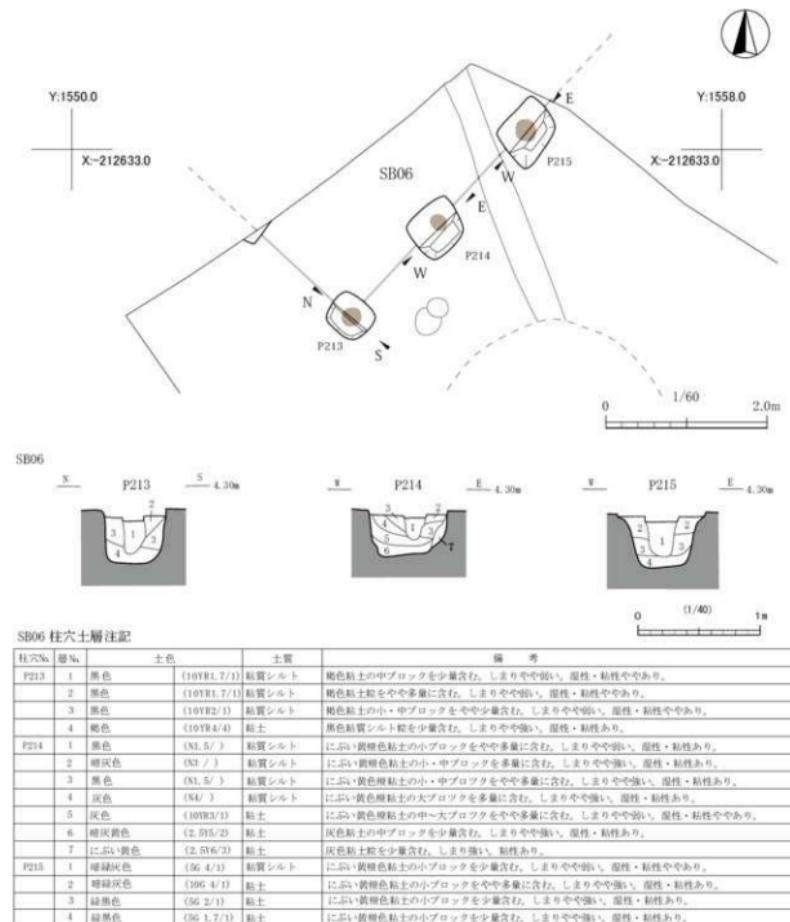
第13図 SB03・04(2)



SB05柱穴土層注記

| 柱穴No | 層No | 土色 | 土質 | 備考 |
|------|-----|-----|---------------|---|
| P211 | 1 | 黒褐色 | (10YR3/2) 粘土 | 炭化物を少量含む。褐色粘土の小ブロックを少量含む。しまりやや強い。塑性・粘性ややあり。 |
| | 2 | 黒褐色 | (10YR3/1) 粘土 | 褐色粘土の小・中ブロックを少量含む。しまりやや強い。塑性・粘性あり。 |
| P212 | 1 | 褐色 | (10YR5/1) 粘土 | にふる黄褐色粘土の中ブロックを多量に含む。しまりやや強い。塑性・粘性あり。 |
| | 2 | 黄褐色 | (2.5YH7/3) 粘土 | 黒褐色粘土の中ブロックをやや多量に含む。しまりやや強い。塑性・粘性あり。 |

第14図 SB05



第15図 SB06

の規模は不明である。確認した範囲での西辺は 2.42 m を測る。SB06 とほぼ同位置であることから東西棟の建て替えであると考えられる。建物の主軸方位は西列で計測すると、真北から 7° 西に傾く。柱穴掘方の平面形は長軸 74 cm、短軸 56 ~ 54 cm を測る長方形である。なお、確認した柱痕跡は 18 cm ほどの円形である。

遺物は非クロコ成形の土師器壺・甕、須恵器壺・甕が出土しているが図示はできなかった。しかしながら、須恵器壺では底部をヘラギリしたのちに手持ちヘラケズリを施したもののが含まれている。本

遺構も主軸が僅かに西へ傾くものであることから、8世紀前半から後半頃の年代観と考えたい。

【SB05】(第14図)

II区東部に位置する。確認した範囲では東西1間、南北2間以上であり、東西棟と考えられるが、調査区東側へさらに広がるため、全体の規模は不明である。確認した範囲での南辺は1.80m、西辺は2.56mを測る。建物の主軸方位は西列で計測すると真北から41°西に傾く。柱穴掘方の平面形は長軸44cm、短軸42~31cmを測る長方形である。なお、確認した柱痕跡は20cmほどの円形である。

遺物は出土していないが、後述するSI19と近い主軸方位を示すことから7世紀後半頃と考えたい。

【SB06】(第15図)

II区北部に位置する。確認した範囲では東西2間以上、南北1間以上であるが、調査区北側へさらに広がるため、棟方向も含めた全体の規模は不明である。確認した範囲での南辺は3.16mを測る。建物の主軸方位は西列で計測すると真北から47°西に傾く。柱穴掘方の平面形は長軸71~56cm、短軸58~49cmを測る長方形である。なお、確認した柱痕跡は20cmほどの円形である。

遺物は出土していないが、後述するSI19と近い主軸方位を示すことから7世紀後半頃と考えたい。

第2表 堀立柱建物跡属性表

| 建物名 | 間数 | 棟方向 | 桁行 総長 (m) | 柱間寸法 (m) | 測定 柱列 | 梁間 総長 (m) | 柱間寸法 (m) | 測定 柱列 | 方向 | 柱痕 跡径(cm) | 柱穴 規模(cm) | 備考 |
|------|-------------|----------|-----------------|-------------------------|----------|-----------------|--------------------|----------|-----------|--------------|-----------------------|---|
| SB01 | 3×4 | 南北棟 | 8.04 | 2.22/1.54/ 2.10/2.18 | 東列 | 5.21 | 1.72/1.60/ 1.92 | 南列 | N・3° ~ E | 22~26 円形 | 167~84 × 126~60 | SI10+07より新 SI10+11+12+13。SB01 より旧 |
| SB02 | 1以上× 1以上 | 東西棟 ? | 1.86以上 | 1.86/ | 北列 | 不明 | | | N・86° ~ E | 20 円形 | 92~81 × 78~71 | |
| SB03 | 1×1以上 | 東西棟 | 2.20以上 | 2.20/ | 南列 | 2.62 | 2.62 | 西列 | N・8° ~ W | 24 円形 | 89~76 × 62~44 | SI16より新 SB03との新旧不明 |
| SB04 | 1以上× 1以上 | 東西棟 ? | 不明 | | | 2.42 | 2.42 | 西列 | N・7° ~ W | 18 円形 | 74~56~54 | SB03との新旧不明 |
| SB05 | 1以上×2 | 東西棟 ? | 1.80以上 | 1.80 | 南列 | 2.56 | 1.24/L32 | 西列 | N・41° ~ W | 20 円形 | 14×42~31 | |
| SB01 | 1以上× 2以上 | 南北棟 ? | 不明 | | | 3.16 | 1.60/L1.56 | 南列 | N・47° ~ W | 20 円形 | 71~56 × 58~49 | |

b. 柱列跡

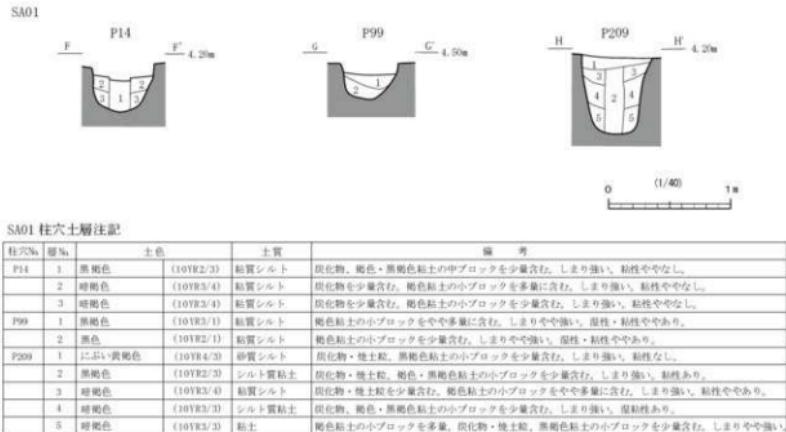
【SA01】(第16・23図)

I区中央部から西寄りにかけて存在するL字状の柱列である。小溝状遺構群と重複関係にあり、これより新しい。東西3間、南北3間であり、東西列の西端で南北方向に屈曲する。総検出長は東西方向が6.16m、南北方向が6.11mを測る。東西列の柱穴間は西から2.05m・1.97m・2.14m、南北列の柱穴間は北から1.90m・2.29m・1.92mを測る。東西列で計測した主軸方向は真北から71°東へ傾き、南北列で計測した主軸方向は真北から20°西へ傾く。柱穴掘方の平面形は楕円形が主体であり、長軸66~35cm、短軸49~25cmを測る。なお、確認した柱痕跡は18cmほどの円形である。

遺物は非ロクロ成形の土器師甕が出土しているが、図示できなかつた。

第3表 柱列跡属性表

| 建物名 | 間数 | 棟方向 | 東西 総長 (m) | 柱間寸法 (m) | 南北 総長 (m) | 柱間寸法 (m) | 方向 | 柱痕 跡径(cm) | 柱穴 規模(cm) | 備考 |
|------|-------------|-----|-----------------|-----------------------|-----------------|-----------------------|--|--------------|---------------------|-----------|
| SI01 | 東西3× 南北3 | L字状 | 6.16 | 西から 2.05/1.97/2.14 | 6.11 | 北から 1.90/2.29/1.92 | 東西柱列 N・71° ~ E 南北柱列 N・20° ~ W | 18 円形 | 66~35 × 49~25 | 小溝状遺構群より新 |



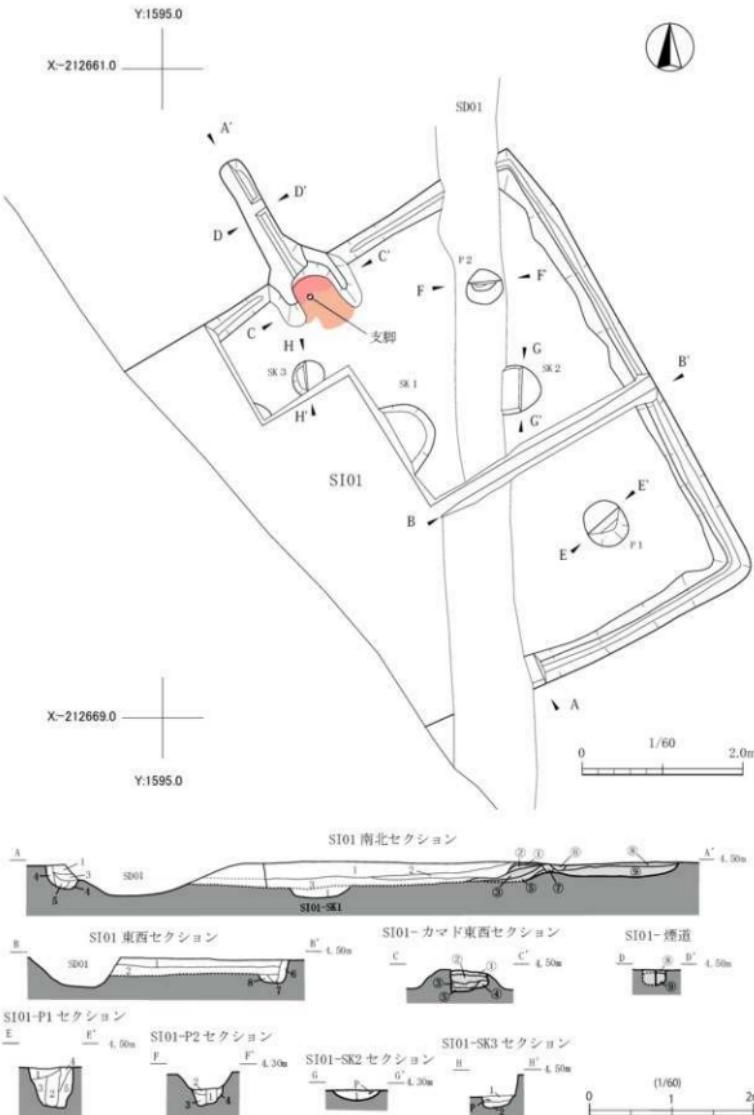
第 16 図 SA01 柱跡柱土層断面図

c. 壇穴建物跡

【S101】(第 17 図)

I 区西側に位置する。東半分とカマド部分で掘り下げを行っている。SD01 と重複関係にあり、これより古い。西側は調査区外へ広がるが、平面形状は方形とみられ、規模は東西が確認できた範囲で 5.48 m、南北は 6.18 m、確認面からの深さは 28 cm を測る。東壁で計測した主軸方向は、真北から 30° 西へ傾く。カマドは北壁中央につくられたとみられ、構築材にはにぶい黄褐色粘質シルトが用いられる。燃焼部の幅は 54 cm、奥行きは 74 cm であり、ほぼ中央から土製の支脚が確認されている。カマド内の壁面では強い被熱が認められ、燃焼部底面も赤変する。煙道部はカマド奥壁際から長さ 164 cm を測る長煙道であり、底面はほぼ平坦である。床面は黒褐色砂質シルトを用いた貼床であり、主柱穴が 3 口みられるほか、カマド前面では焼土をやや多く含む小ピットを確認している。また、建物中央付近の床面下には焼土を多量に含む床下土坑が 2 基存在していた。周溝はカマドを除くすべての壁際で確認されている。

遺物は第 18 図 1・2 の非ロクロ成形土器壺、3 の甕、4 の須恵器高壺のほか、須恵器甕が出土している。1 の壺は口縁部と体部との境に明瞭な段を有する。また 3 の甕はハケメの後、縦方向のヘラケズリが施される。4 の高壺の脚部には 1 条の沈線が巡る。図示した遺物の年代観から、本遺構は 6 世紀末葉から 7 世紀前半頃の年代観が考えられる。



第17図 SI01

第III章 調査成果

S101 土層注記

| 層No. | 土色 | 土質 | 備考 |
|------|------|------------|---|
| 1 | 焦褐色 | (10YR3/2) | 砂質シルト 腐化物・堆土粒をやや多量に含む。しまりやや強い。塑性・粘性なし。 |
| 2 | 黒褐色 | (10YR3/1) | 砂質シルト 黒褐色土の稍ブロックを多量に含む。しまりやや強い。塑性・粘性ややなし。 |
| 3 | 黒褐色 | (10YR3/1) | 砂質シルト 腐化物・堆土を少量含む。黒褐色土の小ブロックを少量含む。しまりやや強い。塑性・粘性ややあり。 |
| 4 | 褐色 | (10YR4/1) | 粘質シルト 黒褐色土の中ブロックをやや多量に含む。しまりやや強い。塑性・粘性ややあり。 |
| 5 | 無褐色 | (10YR4/2) | 粘質シルト 堆土粒を少量含む。黒褐色土の小・中ブロックをやや多量に含む。しまりやや強い。塑性ややあり。 |
| 6 | 黄褐色 | (2.5YR4/1) | 粘質シルト しまりやや強い。塑性・粘性ややあり。 |
| 7 | 暗灰褐色 | (2.5YR4/2) | 黒褐色粘質シルト粒をやや多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |
| 8 | 暗灰褐色 | (2.5YR4/2) | 黒褐色粘質シルトの小・中ブロックをやや多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |

S101 カマド土層注記

| 層No. | 土色 | 土質 | 備考 |
|------|--------|------------|--|
| ① | 黒褐色 | (10YR3/1) | 粘質シルト 腐化物・堆土粒をやや多量含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |
| ② | 灰黄褐色 | (10YR4/2) | 堆土粒を多量に含む。しまり強い。塑性ややあり。 |
| ③ | にじみ赤褐色 | (2.5YR4/4) | シント質粘土 腐化物粒・堆土の中ブロックを多量に含む。しまりやや強い。塑性・粘性ややあり。 |
| ④ | にじみ赤褐色 | (2.5YR4/4) | 粘土 堆土の中・大ブロックを多量に含む。しまり強い。塑性・粘性ややあり。 |
| ⑤ | にじみ赤褐色 | (2.5YR4/4) | シント質粘土 腐化物粒・堆土の大ブロックを多量に含む。しまり強い。 |
| ⑥ | 褐色 | (10YR4/4) | 粘質シルト 堆土の小・中ブロックを多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性あり。 |
| ⑦ | 褐色 | (10YR5/1) | 粘質シルト 堆土・腐化物粒を少量含む。しまりやや強い。 |
| ⑧ | にじみ黄褐色 | (10YR4/3) | 粘質シルト 堆土・腐化物・黄褐色土粒の小・中ブロックを多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |
| ⑨ | オリーブ褐色 | (2.5YR4/3) | 砂質シルト 堆土・腐化物を少量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |

S101-P1 土層注記

| 層No. | 土色 | 土質 | 備考 |
|------|-----|-----------|---|
| 1 | 褐色 | (10YR4/4) | 粘土 黒褐色粘土の大ブロックを多量に含む。しまり強い。塑性・粘性ややあり。 |
| 2 | 黒褐色 | (10YR3/1) | 粘質シルト 腐化物・黒褐色土の小・中ブロックを少量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性あり。 |
| 3 | 暗褐色 | (10YR3/4) | 粘土 黒褐色・黒褐色粘土の中ブロックを多量に含む。しまり弱い。塑性・粘性ややあり。 |
| 4 | 暗褐色 | (10YR3/4) | 粘質シルト 黒褐色・黒褐色粘土の小・中ブロックを多量に含む。しまり強い。塑性・粘性ややあり。 |
| 5 | 褐色 | (10YR4/6) | 粘土 黒褐色粘土の中ブロックを多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性あり。 |

S101-P2 土層注記

| 層No. | 土色 | 土質 | 備考 |
|------|-----|-----------|--|
| 1 | 暗褐色 | (10YR3/3) | 粘質シルト 黒褐色粘土の小・中ブロックを少量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |
| 2 | 暗褐色 | (10YR3/3) | 粘質シルト 堆土粒を少量含む。黒褐色粘土粒を少量含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |
| 3 | 黒褐色 | (10YR3/2) | 粘質シルト 黒褐色粘土粒を少量含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |
| 4 | 黒褐色 | (10YR3/2) | 粘質シルト しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |

S101-SK1 土層注記

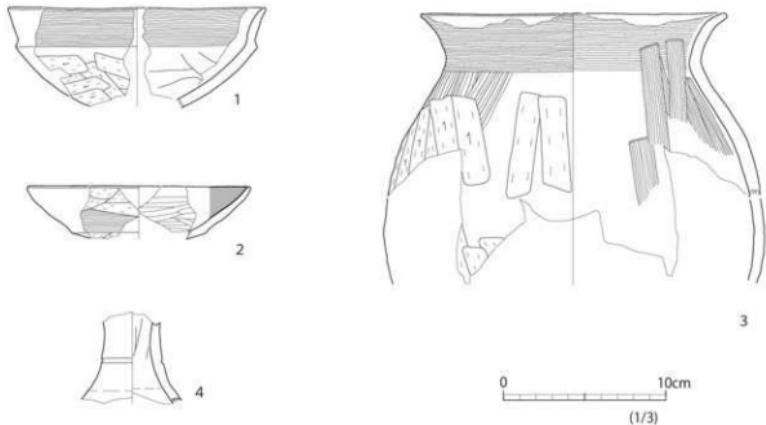
| 層No. | 土色 | 土質 | 備考 |
|------|-----|-----------|---|
| 1 | 暗褐色 | (10YR3/3) | 砂質シルト 幾土粒・小・中ブロックをやや多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性あり。 |

S101-SK2 土層注記

| 層No. | 土色 | 土質 | 備考 |
|------|-----|----------|--|
| 1 | 黒褐色 | (5YR2/2) | 粘質シルト 腐化物・堆土粒を多量に含む。褐色粘土の小・中ブロックをやや多量に含む。しまりやや強い。 |

S101-SK3 土層注記

| 層No. | 土色 | 土質 | 備考 |
|------|------|------------|---|
| 1 | 暗赤褐色 | (2.5YR3/2) | 粘質シルト 腐化物・堆土粒を多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |
| 2 | 黒褐色 | (10YR3/2) | 粘土 腐化物・堆土粒を少量含む。黒褐色粘土粒を少量含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |

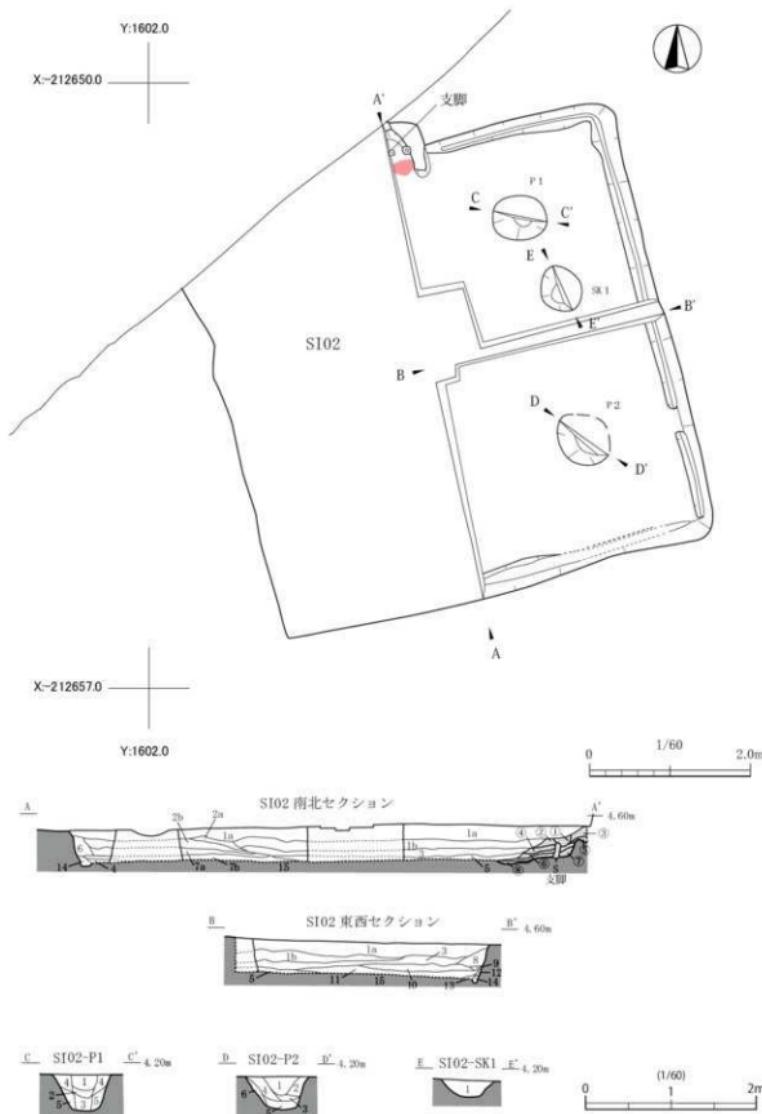


第18図 SI01出土遺物

【SI02】(第19図)

I区中央部北側に位置する。東半分で掘り下げを行っている。SD02、小溝状遺構群と重複関係にあり、小溝状遺構群より新しく、SD02より古い。北側の一部は調査区外へ広がるが、平面形状は方形とみられ、規模は東西が5.53m、南北は5.55m、確認面からの深さは42cmを測る。東壁で計測した主軸方向は、真北から1°西へ傾く。カマドは北壁中央につくられ、北壁を若干掘り立てて構築している。カマドの構築材にはにぶい黄褐色粘質シルトが用いられる。燃焼部のほぼ中央とみられる位置では土製の支脚が確認されている。カマド内の壁面では強い被熱が認められ、燃焼部底面も赤変する。煙道部は調査区外へ延びるために、規模・形状は不明である。なお、カマド前面の床面付近からは非ロクロ成形の土師器椀・瓶・甕がまとまって出土している。床面は黒褐色粘質シルトを用いた貼床であり、主柱穴が2口みられるほか、小ピットを1口確認している。また、周溝はカマドを除くすべての壁際で確認されている。

遺物は第20図1の非ロクロ成形土師器椀、2～4の甕、5の瓶、6の須恵器蓋、7・8の石製模造品が出土している。このうち7・8・11については本遺構に直接伴うものではない。1の椀は内面に黒色処理がされていない。3の甕では頸部に段がみられ、最大径を胴部下半で測るものである。4の甕は縦方向のケズリの後、ヨコナデを行い、さらに縦方向のハケメが施される。5の瓶は外面はナデ、内面では横方向のミガキが施される。図示した遺物の年代観から、本遺構は6世紀末葉から7世紀前半頃の年代観が考えられるが、隣接するSI04との関係から6世紀末葉頃の可能性がある。



第19図 SI02

S102 土層注記

| 層No. | 土色 | 土質 | 備考 |
|------|--------|-------------|--|
| 1a | 黒褐色 | (10YR3/2) | 砂質シルト 炭化物・堆土粒を少量含む。にぶい黄褐色シルトの小ブロックをやや多量に含む。しまりやや強い。 |
| 1b | 黒色 | (10YR3/2) | 炭化物・堆土粒をやや少含む。にぶい黄褐色シルトの小ブロックを多量に含む。しまりやや強い。 |
| 2a | 黒褐色 | (10YR3/1) | 粘質シルト 炭化物・堆土を少量含む。にぶい黄褐色シルト粒・小ブロックを少量含む。しまりやや弱い。 |
| 2b | 黒褐色 | (10YR3/1) | 粘質シルト 炭化物を少量含む。にぶい黄褐色粘土粒をやや多量に含む。しまりやや弱い。 |
| 3 | 黒褐色 | (10YR2/2) | 粘質シルト 炭化物を少量含む。にぶい黄褐色粘土粒を多量に含む。しまりやや弱い。湿性・粘性ややあり。 |
| 4 | 黒褐色 | (10YR2/2) | 粘質シルト 炭化物を少量含む。しまりやや弱い。湿性・粘性ややあり。 |
| 5 | 黒褐色 | (2, 3YR2/2) | 粘質シルト 炭化物・堆土をやや多量に含む。湿性・粘性ややあり。 |
| 6 | にぶい黄褐色 | (10YR4/2) | 砂質シルト 無機色粘土を少量含む。しまりやや弱い。 |
| 7a | 黒褐色 | (10YR3/1) | 粘質シルト 堆土粒を少量含む。しまりやや弱い。湿性・粘性ややあり。 |
| 7b | 黒褐色 | (10YR2/1) | 粘質シルト 堆土・炭化物粒を少量含む。しまりやや弱い。湿性・粘性あり。 |
| 8 | にぶい黄褐色 | (10YR4/3) | 砂質シルト 炭化物・砂質シルト粒を多量に含む。しまりややなし。湿性・粘性ややあり。 |
| 9 | 黒色 | (10YR2/1) | 粘土 炭化物・砂質シルト粒を少量に含む。しまりややなし。湿性・粘性あり。 |
| 10 | 黒褐色 | (10YR3/2) | 粘質シルト にぶい黄褐色粘土小ブロックを多量に含む。しまりややなし。湿性・粘性ややあり。 |
| 11 | 黒褐色 | (10YR3/2) | 粘質シルト 無色・にぶい黄褐色粘土・無機色砂質シルト粒・小ブロックを多量に含む。しまりややなし。 |
| 12 | にぶい黄褐色 | (10YR4/3) | 粘土 しまりややなし。湿性・粘性ややあり。 |
| 13 | 褐色 | (10YR4/4) | 粘土 無機色粘土の小ブロックを多量に含む。しまりややなし。湿性・粘性ややあり。 |
| 14 | 褐色 | (10YR4/1) | 粘土 無機色粘土・堆土をやや多量に含む。無機色粘土の小一中ブロックを多量に含む。しまりややあり。 |
| 15 | にぶい黄褐色 | (10YR4/3) | 粘土 無機色粘土・堆土をやや多量に含む。無機色粘土の小一中ブロックを多量に含む。しまりややあり。 |

S102 カマド土層注記

| 層No. | 土色 | 土質 | 備考 |
|------|-----|-----------|--|
| ① | 黒褐色 | (10YR3/2) | 粘質シルト 炭化物・後土粒を少量含む。しまりやや弱い。湿性・粘性ややあり。 |
| ② | 黒褐色 | (10YR3/2) | 粘質シルト 炭化物・堆土粒・にぶい黄褐色シルト粒をやや多量に含む。しまりやや弱い。湿性・粘性ややあり。 |
| ③ | 黒褐色 | (10YR3/1) | 粘質シルト 炭化物・堆土粒・にぶい黄褐色シルト粒を少量含む。しまりやや弱い。湿性・粘性ややあり。 |
| ④ | 褐灰色 | (10YR4/1) | 粘質シルト 炭化物・堆土の小の小ブロックを少量含む。しまりやや弱い。湿性・粘性ややあり。 |
| ⑤ | 黒褐色 | (10YR2/2) | 粘質シルト しまりやや弱い。湿性・粘性ややあり。 |
| ⑥ | 黒褐色 | (3YR2/1) | 粘質シルト 炭化物・堆土の小一中ブロックを多量に含む。しまりやや弱い。湿性・粘性ややあり。 |
| ⑦ | 黒褐色 | (3YR2/1) | 粘質シルト 炭化物・堆土の小一中ブロックを多量に含む。しまりやや弱い。湿性・粘性ややあり。 |
| ⑧ | 褐色 | (10YR4/4) | 粘質シルト 無機色粘土小ブロックを含む。しまりやや弱い。湿性・粘性あり。灰斑。 |

S102-P1 土層注記

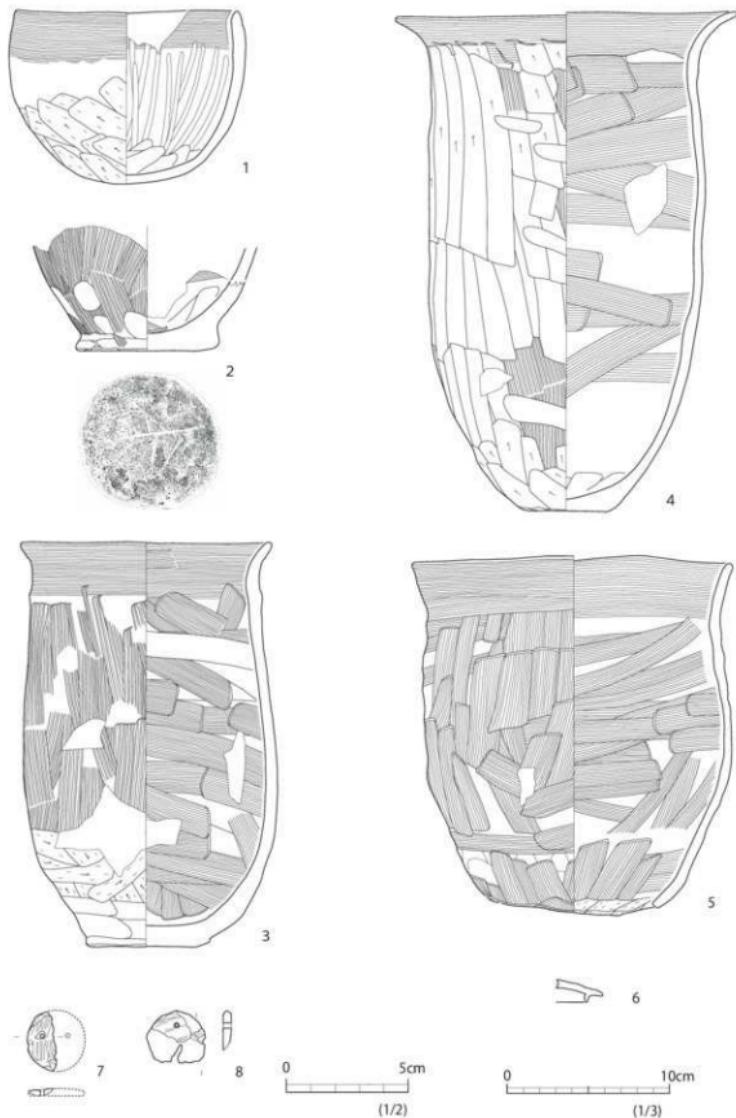
| 層No. | 土色 | 土質 | 備考 |
|------|--------|-------------|---|
| 1 | 黒褐色 | (7, 3YR3/2) | シルト 炭化物・後土粒を少量含む。しまりやや弱い。湿性・粘性ややなし。 |
| 2 | 黒褐色 | (7, 3YR3/2) | シルト 炭化物・無機色粘土粒を多量に含む。しまりやや弱い。湿性・粘性ややあり。 |
| 3 | 黒褐色 | (10YR2/2) | シルト 無機色粘土の小ブロックを多量に含む。しまりやや弱い。湿性・粘性ややあり。 |
| 4 | 黒褐色 | (10YR3/1) | 粘質シルト 炭化物を少量含む。しまりやや弱い。湿性・粘性ややあり。 |
| 5 | にぶい黄褐色 | (10YR4/3) | 粘質シルト 無機色粘土の小ブロックを含む。しまりやや弱い。湿性・粘性あり。 |

S102-P2 土層注記

| 層No. | 土色 | 土質 | 備考 |
|------|-----|-------------|---|
| 1 | 黒褐色 | (7, 3YR3/2) | シルト 炭化物・にぶい黄褐色粘土粒をやや多量に含む。しまりやや弱い。 |
| 2 | 褐灰色 | (7, 3YR3/4) | 粘質シルト 無機色粘土の小ブロックを多量に含む。しまりやや弱い。湿性・粘性ややあり。 |
| 3 | 黒褐色 | (10YR2/2) | シルト 堆土粒を少量含む。しまりやや強め。湿性・粘性ややあり。 |
| 4 | 黒褐色 | (7, 3YR3/2) | シルト にぶい黄褐色粘土粒をやや多量含む。しまりやや弱い。 |
| 5 | 黒褐色 | (10YR3/1) | 粘質シルト 無機色粘土の小ブロックを多量に含む。しまりやや弱い。湿性・粘性ややあり。 |
| 6 | 褐色 | (10YR4/4) | 粘質シルト 無機色粘土の小ブロックをやや多量に含む。しまりやや弱い。湿性・粘性ややあり。 |

S102-SK1 土層注記

| 層No. | 土色 | 土質 | 備考 |
|------|----|-----------|---|
| 1 | 黒色 | (10YR2/1) | 粘質シルト 無機色粘土の小ブロックを多量に含む。しまりやや強め。湿性・粘性あり。 |



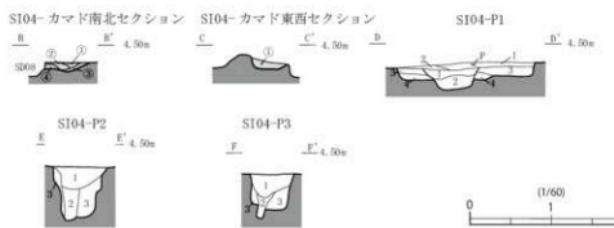
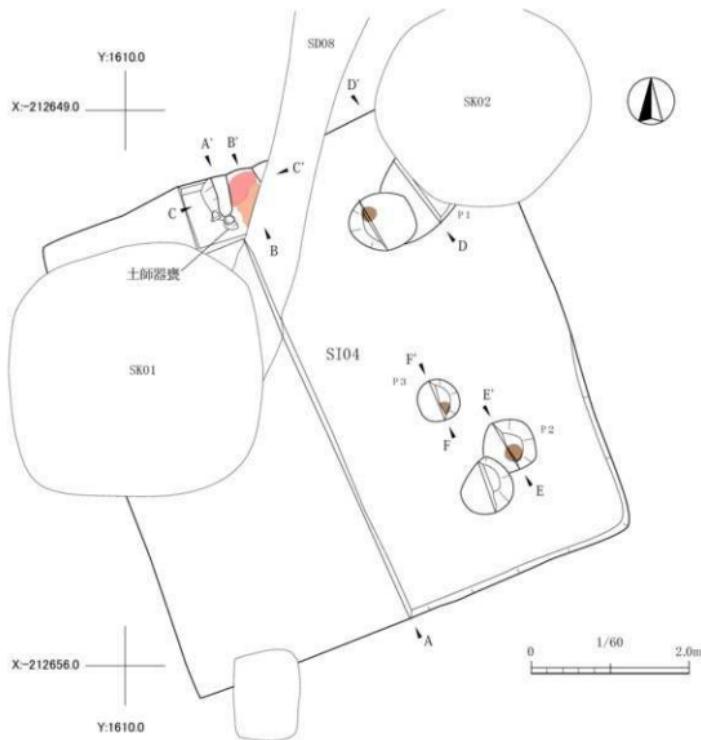
第20図 SI02出土遺物

| 番号 | 断面・層位 | 種別 | 器種 | 外　面 | 内　面 | 残　存 | 法量(cm) | | | 写真添版 |
|----|----------|-------|-----|-------------------------------------|---------------|--------|--------|--------|------|------|
| | | | | | | | 口徑 | 底径 | 器高 | |
| 1 | 北側北壁・床直 | 土師器 | 碗 | ヨコナダーヘラケズリ | ヨコナダーヘラミガキーナダ | 一部のみ欠損 | 13.5 | — | 10.7 | 7-2 |
| 2 | カマド前面・床直 | 土師器 | 小型甌 | ハケメーナダ | ヘラナダ・ナダ | 直錐破片 | — | 8.7 | — | |
| 3 | カマド背面 | 土師器 | 中型甌 | ヨコナダーハケメーハラケズリ | ヨコナダーヘラナダ・ナダ | 一部のみ欠損 | 15.4 | 7.5 | 24.8 | 7-4 |
| 4 | カマド背面 | 土師器 | 大型甌 | ヨコナダーハケメーハラケズリ | ヨコナダーヘラナダ・ナダ | 完形 | 20.9 | 8.2 | 30.4 | 7-5 |
| 5 | 北側北壁・床直 | 土師器 | 甌 | ヨコナダーヘラナダ・ナダ | ヨコナダーヘラナダ・ナダ | 全体1/3 | (19.1) | (10.1) | 21.8 | |
| 6 | 北側・堆積土 | 土師器 | 甌 | ロクロナダ | ロクロナダ | 口縁破片 | (14.9) | — | — | |
| 7 | 北側・堆積土 | 石製模造品 | 瓶形? | 両面に擦痕、厚さ3mm、穿孔径2mm、石質陶。 | — | 全体1/3 | — | — | — | |
| 8 | 北側・堆積土 | 石製模造品 | 瓶形? | 両面に擦痕、表面の剥離が著しい、厚さ3.5mm、穿孔径2mm、石質陶。 | — | 全体1/2 | — | — | — | |

【SI04】(第21図)

I区中央部北寄りに位置する。東半分で掘り下げを行っている。SB01、SK01・02、SD08と重複関係にあり、いざれよりも古い。平面形状は方形とみられ、規模は東西が5.92m、南北は6.12m、確認面からの深さは18cmを測る。西壁で計測した主軸方向は、真北から19°西へ傾く。カマドは北壁中央から西寄りにつくられているが、SD08により右袖の大部分を失う。カマドの構築材にはにぶい黄褐色粘質シルトが用いられているが、左袖の先端には非ロクロ成形の土師器甌を逆位に設置してオサエとしている。カマド内の壁面では強い被熱が認められ、燃焼部底部も赤変する。煙道部は確認されていない。床面は黒褐色粘質シルトを用いた貼床であり、主柱穴を2口確認しているが、ほかに柱穴が2口みられたことから建て替えが行われている可能性がある。また、このほかに小ピットを1口確認した。なお、周溝はみとめられなかった。

遺物は第22図1に図示した土師器甌のほか、土師器坏、須恵器坏・蓋・甌がごく少量出土している。1はカマド袖のオサエとして使用されていたもので、口縁部は短く、やや強く外反する。胴部には縦方向のヘラケズリが施される。図示した遺物の年代観から、本遺構は6世紀末葉から7世紀前半頃の年代観が考えられるが、隣接するSI02との関係から7世紀前半の可能性がある。



第21図 SI04

S104 土層注記

| 層番 | 土色 | 土質 | 備考 |
|----|-----|-----------------|--|
| 1 | 暗褐色 | (10YR3/3) 砂質シルト | 炭化物・堆土粒を少量含む。黒褐色粘土の小ブロックを少數含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややなし。 |
| 2 | 暗褐色 | (10YR3/3) 砂質シルト | 炭化物・堆土粒を少量含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややなし。 |
| 3 | 黒褐色 | (10YR3/2) 砂質シルト | 堆土粒を微量含む。黒褐色粘土の小ブロックを多量に含む。しまりやや弱い。粘性あり。 |
| 4 | 黒褐色 | (10YR3/1) 砂質シルト | 黒褐色粘土の中ブロックをやや多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |

S104 カマド土層注記

| 層番 | 土色 | 土質 | 備考 |
|----|------|------------------|--------------------------------------|
| ① | 暗赤褐色 | (5YR3/2) 砂質シルト | 炭化物・堆土粒を多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややなし。 |
| ② | 黒褐色 | (7.5YR3/3) 砂質シルト | 堆土粒・小ブロックをやや多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややなし。 |
| ③ | 黒褐色 | (10YR3/1) 砂質シルト | 堆土粒を微量含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |
| ④ | 暗赤褐色 | (5YR3/2) 砂質シルト | 堆土粒・小ブロックをやや多量に含む。しまり弱い。塑性・粘性ややあり。 |

S104-P1 土層注記

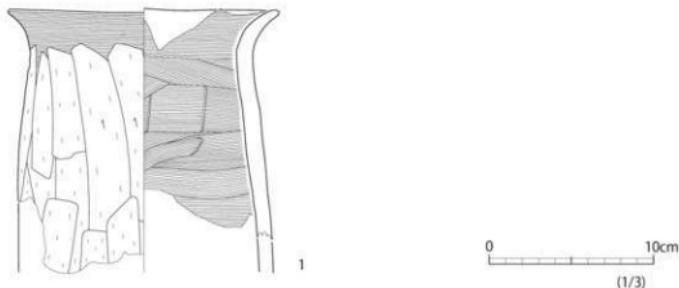
| 層番 | 土色 | 土質 | 備考 |
|----|-----|--------------|--|
| 1 | 黒褐色 | (10YR3/1) 粘土 | 炭化物を少量含む。黒褐色粘土粒・小ブロックをやや多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |
| 2 | 黒褐色 | (10YR3/2) 粘土 | 堆土・炭化物を少量含む。黒褐色粘土の小ブロックをやや多量に含む。しまりやや強い。 |

S104-P2 土層注記

| 層番 | 土色 | 土質 | 備考 |
|----|-----|---------------|--|
| 1 | 暗褐色 | (10YR3/3) シルト | 炭化物・堆土粒をやや多量に含む。黒褐色粘土粒を微量含む。しまりやや弱い。粘性なし。 |
| 2 | 黒褐色 | (10YR2/3) シルト | 黒褐色粘土粒をやや多く含む。しまり弱い。塑性やや弱い。 |
| 3 | 黒褐色 | (10YR2/2) シルト | 黒褐色粘土の中ブロックを多量に含む。黒褐色粘土の小ブロックを少量含む。しまり強い。粘性あり。 |

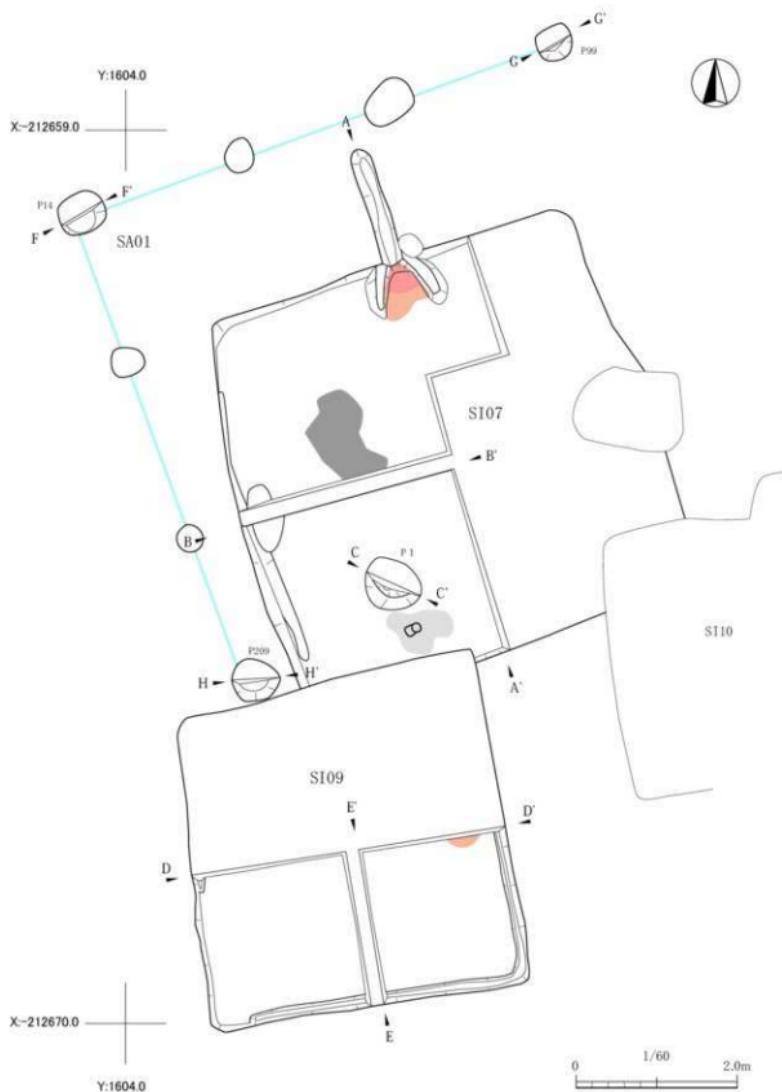
S101 底面 Pitt1 土層注記

| 層番 | 土色 | 土質 | 備考 |
|----|-----|-----------------|---|
| 1 | 暗褐色 | (10YR3/3) 砂質シルト | 黒褐色粘土粒をやや多量に含む。しまりやや弱い。粘性ややあり。 |
| 2 | 暗褐色 | (10YR3/3) 砂質シルト | 暗褐色粘土・黒褐色粘土の小ブロックを少數含む。しまり弱い。塑性やや弱い。 |
| 3 | 黒褐色 | (10YR2/3) 砂質シルト | 黒褐色粘土の中ブロックを多量に含む。黒褐色粘土の小ブロックをやや多量に含む。しまり強い。粘性あり。 |

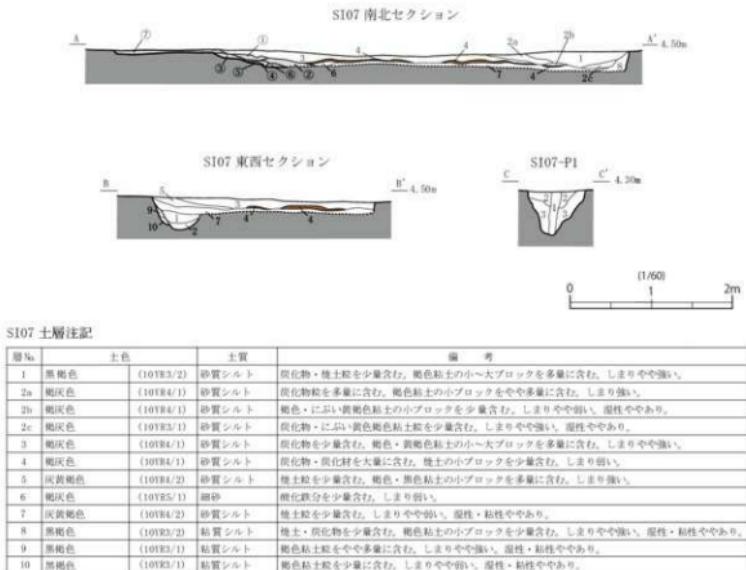


| 番号 | 測定・測定 | 種別 | 器種 | 外観 | 内観 | 保存 | 法線(cm) | | | 写真撮影 |
|----|-------|-----|----|------------|-----------|-------|--------|----|----|------|
| | | | | | | | 口徑 | 直径 | 高さ | |
| 1 | カマド石柱 | 土壟器 | 便 | ヨコナダーハラケヅリ | ヨコナダーハラナダ | 全体1/3 | 16.3 | — | — | |

第22図 S104出土遺物



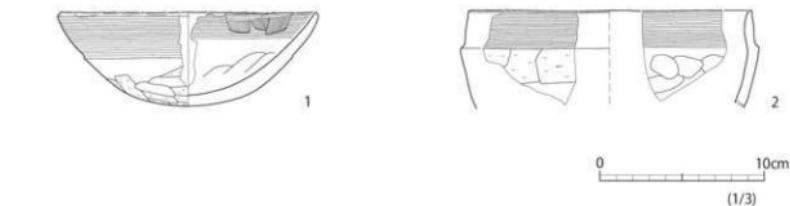
第23図 SI07 (1)



第24図 SI07 (2)

【SI07】(第23・24図)

I区中央部に位置する。西半分とカマド部分で掘り下げを行っている。SB01、SI09・10、小溝状遺構群と重複関係にあり、小溝状遺構群より新しく、SB01、SI09・10より古い。平面形状は方形であり、規模は東西が5.25m、南北は5.05m、確認面からの深さは18cmを測る。カマド中軸線で計測した主軸方向は、真北から15°西へ傾く。カマドは北壁につくられ、カマドの構築材にはにぶい黄褐色砂質シルトが用いられている。燃焼部の幅は61cm、奥行きは61cmである。カマド内の壁面では強い



第25図 S107出土遺物

S109 東西セクション



S109 南北セクション



S109 土層注記

| 層番 | 土色 | 土質 | 備考 |
|----|-------------|-------|---|
| 1 | (10TR3/2) | 砂質シルト | 炭化物・焼土粒を少量化。黒褐色粘土の小ブロックを少量含む。しまりやや強い。 |
| 2 | (10TR3/1) | 砂質シルト | 炭化物・焼土粒を少量含む。しまりやや弱い。粘性ややなし。 |
| 3 | (10TR2/2) | 砂質シルト | 焼土粒を微量含む。褐色粘土の小ブロックを多量に含む。しまりやや強い。粘性あり。 |
| 4 | (2. 9TR3/4) | 砂質シルト | 褐色粘土の小ブロックをやや多量に含む。しまりやや強い。粘性・粘性ややあり。 |
| 5 | (10TR2/1) | 粘土 | しまりやや弱い。粘性・粘性ややあり。 |
| 6 | (10TR4/2) | 砂質シルト | 炭化物を少量に含む。黒褐色粘土の小ブロックを多く含む。しまりやや弱い。粘性・粘性ややあり。 |

第26図 S109土層断面図

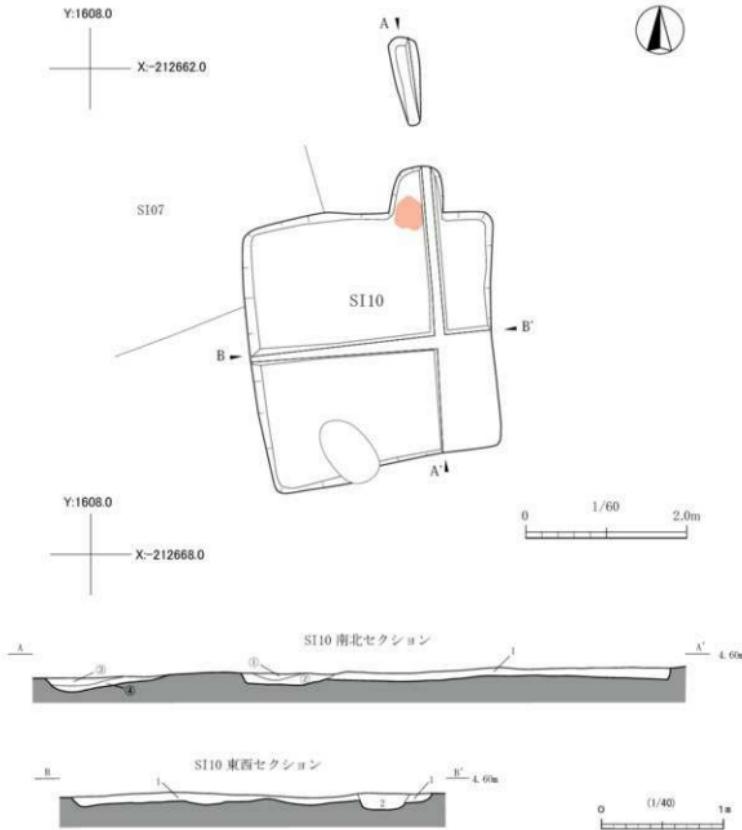
被熱が認められ、燃焼部底面も赤変する。煙道部はカマド奥壁際から長さ 148 cm を測る長煙道であり、底面は先端部に向かって弱く傾斜する。床面は灰黄褐色砂質シルトを用いた貼床であり、主柱穴を 1 口確認している。周溝は西壁の一部でのみ認められている。このほかに建物中央から南西部にかけてでは、床面のやや上位に草状の植物が炭化した状態でみられており、一部では縦方向と横方向に交差して編まれているようにも見受けられた。また、南壁際の中央付近では白色粘土が長さ 75 cm、幅 45 cm の範囲で塊状に存在していた。

遺物は第25図 1 の非クロコ成形土師器坏、2 の鉢のほか、土師器甕がごく少量出土している。1 の内面は磨滅が著しいため黒色処理は明確に確認できないが、口縁部の一部にミガキの痕跡がみられることから剥落している可能性がある。外面では体部下半から底部にかけてヘラケズリが施される。2 の鉢は口縁部と体部との境に強い段を有している。黒色処理は施されていない。図示した遺物の年代観から、本遺構は 6 世紀末葉から 7 世紀前半頃の年代観が考えられる。

【SI09】(第23・26図)

I区中央部南寄りに位置する。南半分で掘り下げを行っている。SI07と重複関係にあり、これより新しい。平面形状は方形とみられ、規模は東西が3.85m、南北は3.95m、確認面からの深さは15cmを測る。西壁で計測した主軸方向は、真北から8°西へ傾く。カマドは建物廃絶時に意図して破壊されたよう、構築材なども明確には認められていないが、東壁中央付近の床面が若干赤変しており、焼土粒や炭化物も広がっていたことから、この部分に設置されていたとみられる。煙道部は確認されていない。床面は基本層第VII層を利用しておおり、貼床はみられない。また、主柱穴は確認されていないが、周溝は南西隅を除いた箇所で認められている。

遺物はロクロ成形土師器壺・甕がごく少量出土しているが、いずれも小片のため図示できなかった。しかしながら、ロクロ成形土師器の出土により、8世紀末葉以降の年代観が考えられる。



第27図 SI10

SI10 土層注記

| 層番 | 土色 | 土質 | 備考 |
|----|-----|-----------|--|
| 1 | 黒褐色 | (10YR3/2) | 粘質シルト 褐色粘土の小ブロックを少々含む。しまりやや強い。粘性ややあり。貼床土。 |
| 2 | 暗褐色 | (10YR3/3) | 黒色粘土の中ブロックをやや多量に含む。しまりやや弱い。粘性やや強い。 |

SI10 カマド土層注記

| 層番 | 土色 | 土質 | 備考 |
|----|--------|-----------|---|
| ① | 褐色 | (10YR4/4) | 砂質シルト 堆土粒を多量に含む。炭化物を少々含む。しまり弱い。粘性ややなし。 |
| ② | にがい黄褐色 | (10YR4/3) | 砂質シルト 炭化物・堆土粒を微量に含む。しまりやや弱い。粘性ややなし。 |
| ③ | 暗褐色 | (10YR3/3) | 砂質シルト 炭化物を微量に含む。しまりやや弱い。粘性ややあり。煙道部。 |
| ④ | 黒褐色 | (10YR3/2) | 砂質シルト 炭化物をやや多量に含む。堆土粒を極微量に含む。しまりやや弱い。粘性やや弱い。煙道部。 |



| 番号 | 頭部・部位 | 種別 | 器種 | 外　面 | | 内　面 | 残存 | 法線(cm) | | | 写真回数 |
|----|--------|-----|----|-----------------|----|------------|--------|--------|-----|-----|------|
| | | | | 口径 | 底径 | | | 高さ | 口径 | 底径 | |
| 1 | 南側・堆積土 | 土器部 | 片 | ヨコナデーナ | | ハラミガキ・黑色燒附 | 全体の2/3 | 11.2 | 5.6 | 3.5 | 7号 |
| 2 | 南側・堆積土 | 重窓部 | 蓋 | ロクロナデ・手持ち・ハラケヌリ | | ロクロナデ | 口縁破片 | (11.4) | — | — | |

第28図 SI10出土遺物

【SI10】(第27図)

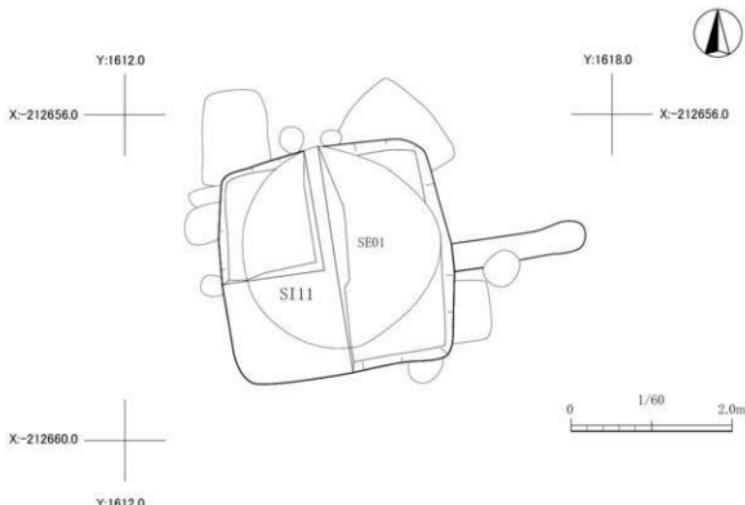
I区中央部南寄りに位置する。南東部を除いた箇所で掘り下げを行っている。SB01、SI07と重複関係にあり、これらより新しい。平面形状は方形とみられ、規模は東西が3.00m、南北は3.08m、確認面からの深さは12cmを測る。カマド中軸線で計測した主軸方向は、真北から6°西へ傾く。カマドは北壁東寄りで、壁面を幅66cm、奥行き57cmをU字状にやや大きく掘り込んでつくられているが、建物廃絶時に意図して破壊されたようで、構築材は明確には認められていない。煙道部の一部は失われているが、燃焼部奥壁から160cmの長さでつくられ、底面は先端部に向かってやや強く傾斜しているとみられる。床面は黒褐色粘質シルトを用いた貼床である。主柱穴、及び周溝は確認されていない。

遺物は第28図に図示した1のロクロ成形土師器壺、2の須恵器蓋のほか、非ロクロ成形土師器甕が出土している。このうち2は混入とみられ、遺構に伴うものではない。1の壺は底部からやや内窓気味に立ち上がる。図示した遺物の年代観から、本遺構は9世紀前半頃の年代観が考えられる。

【SI11】(第29・42図)

I区中央部東寄りに位置する。南西部を除いた箇所で掘り下げを行っている。SB01、SE01と重複関係にあり、SB01よりは新しく、SE01より古い。平面形状は隅丸方形であり、規模は東西が2.82m、南北は2.84m、確認面からの深さは32cmを測る。西壁で計測した主軸方向は、真北から7°西へ傾く。カマドは煙道部の存在から東壁中央につくられているが、後述するSE01によりカマド本体はほぼ完全に失われており、構築材や燃焼部の規模については不明である。煙道部は燃焼部奥壁から163cmの長さでつくられ、底面は先端部に向かってやや弱く傾斜していた。床面は黒褐色粘質シルトを用いた貼床であるが、SE01が本遺構と完全に重複していることから主柱穴、及び周溝の有無については不明である。

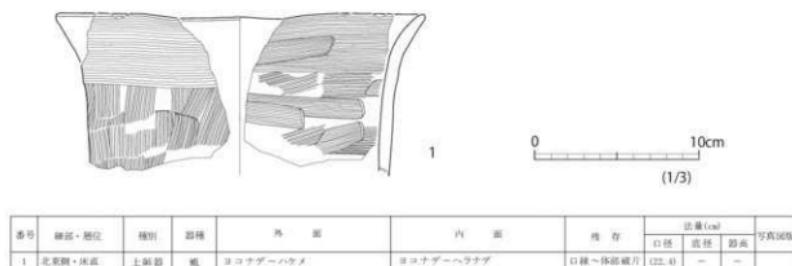
遺物は第30図1に図示したロクロ成形土師器壺が煙道部より出土している。1の壺は口径・底径ともやや大きく、底部から内窓気味に立ち上がる。図示した遺物の年代観から、本遺構は8世紀末葉



第29図 SI11



第30図 SI11出土遺物



第31図 SI13出土遺物

～9世紀初頭頃の年代観が考えられる。

【SI12】(第6図)

I区東部南寄りに位置する。本遺構はごく薄く残存していた床面と、掘方のみの確認である。SB01、SI13と重複関係にあり、SB01より古く、SI13より新しい。平面形状は方形であり、確認した範囲での規模は東西が4.22m、南北は4.20mを測る。建物跡の西側貼床ラインで計測した主軸方向は、真北から13°西へ傾く。カマドも構築材などは明確には認められていないが、東壁中央付近の床面が若干赤変していたことから、この部分に設置されていたとみられる。煙道部は確認されていない。残存していた床面は黒褐色粘質シルトを用いた貼床であり、主柱穴を2口と小ビットを3口確認している。なお、周溝は認められなかった。

遺物は床面より非ロクロ成形の土師器甕とロクロ成形の土師器壺がごく少量出土しているが、小片のため図示できなかつた。

【SI13】(第6図)

I区東部南寄りに位置する。本遺構もSI12同様にごく薄く残存していた床面と、掘方のみの確認であるが、東側については掘方痕跡も認められていない。SB01、SI13と重複関係にあり、両者より古い。平面形状は方形とみられ、確認した範囲での規模は東西が1.10m、南北は2.62mを測る。建物跡の西側貼床ラインで計測した主軸方向は、真北から19°西へ傾く。カマドは確認されていない。残存していた床面は黒褐色粘質シルトを用いた貼床であるが、主柱穴や周溝は認められなかつた。

遺物は第31図1に図示した非ロクロ成形土師器甕のみが床面より出土している。図示した遺物の年代観から、本遺構は6世紀末葉から7世紀前半頃の年代観が考えられる。

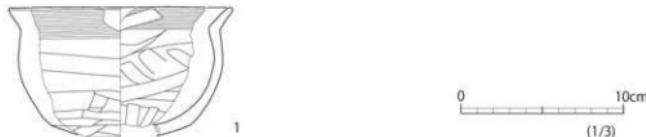
【SI14】(第6図)

I区東部南寄りに位置する。P139と重複関係にあり、これより古い。本遺構の大部分は調査区東側へ広がることから、全体の形状・規模については不明である。確認した範囲での南北の規模は3.42m、確認面からの深さ15cmを測る。西壁で計測した主軸方向は、真北から22°西へ傾く。カマドは確認されていない。床面は基本層第VII層を用いている。主柱穴や周溝は認められなかつた。

遺物は非ロクロ成形の土師器甕がごく少量出土しているが、小片のため図示できなかつた。

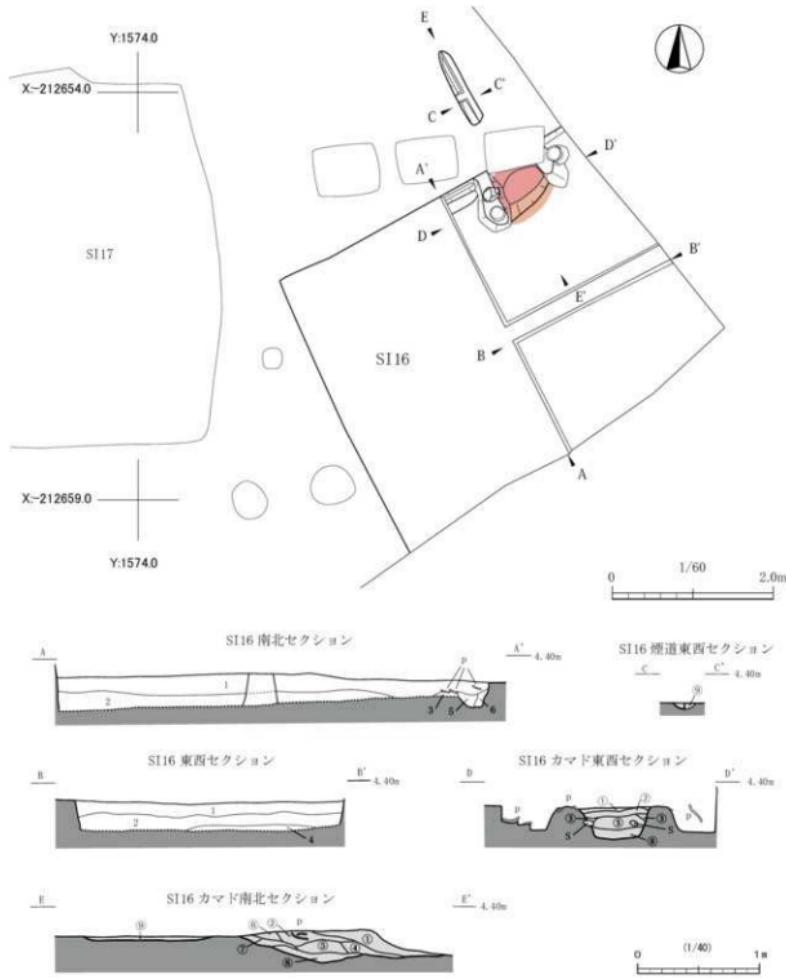
【SI15】(第6図)

I区南側中央に位置する。本遺構の大部分は調査区南側へ広がることから、全体の形状・規模については不明である。確認した範囲での東西の規模は3.96m、確認面からの深さは12cmを測る。西壁で計測した主軸方向は、真北から30°西へ傾く。カマドは確認されていない。床面は黒褐色粘質シ



| 番号 | 細部・部位 | 種別 | 器種 | 外 面 | | 内 面 | 推 存 | 法量(cm) | | | 写真図版 |
|----|-------|-----|----|-----------|----|-----------|-------|--------|----|-----|------|
| | | | | 横幅 | 高さ | | | 口徑 | 底径 | 器高 | |
| 1 | 北側・床面 | 土師器 | 甕 | ヨコナダーハラナダ | 丸底 | ヨコナダーハラナダ | 全体1/7 | (13.0) | — | 7.0 | 7-4 |

第32図 SI15出土遺物



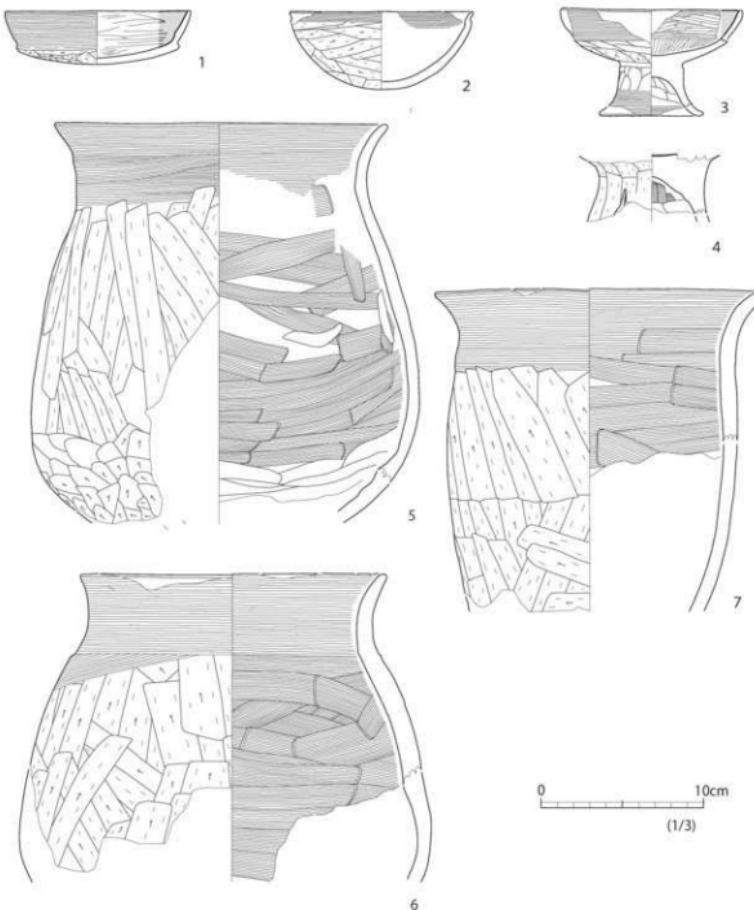
SI16 土層注記

| 層番 | 土色 | 土質 | 備考 |
|----|-------------------|-------|---|
| 1 | 黒褐色 (10YR3/2) | 粘質シルト | 炭化物・鐵土粒をやや多量に含む。しまりやや強い。塑性・粘性ややなし。 |
| 2 | 黒褐色 (10YR3/2) | 粘質シルト | 炭化物・鐵土粒を多量に含む。褐色粘質シルト粒をやや多量に含む。しまりややあり。 |
| 3 | 暗褐色 (10YR3/3) | 粘質シルト | 褐色粘土の中ブロックを多量に含む。しまりややあり。塑性・粘性ややあり。 |
| 4 | 淡黄褐色 (10YR4/2) | 粘土 | 炭化物・鐵土をやや多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |
| 5 | 暗褐色 (10YR3/3) | 粘質シルト | 褐色粘土粒を多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |
| 6 | 黒褐色 (10YR3/2) | 粘質シルト | 褐色粘土粒を少量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |

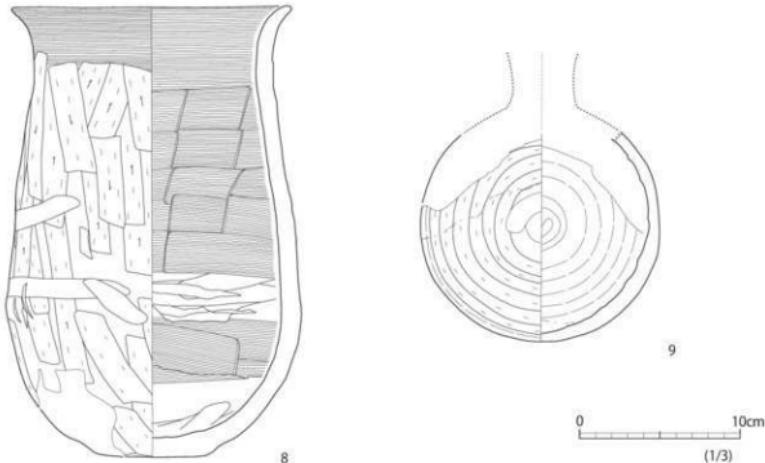
第33図 SI16

SI16 カマド土層注記

| 層No. | 土色 | 土質 | 備考 |
|------|------|----------------------|--|
| ① | 暗褐色 | (10YR3/3) 粘質シルト | 炭化物・焼土粒。褐色砂質シルトの中ブロックをやや多量に含む。しまりやや弱い。 |
| ② | 灰黄褐色 | (10YR4/2) 粘質シルト | 炭化物・焼土粒。褐色砂質シルトの中ブロックを多量に含む。しまりやや弱い。韌性ややあり。 |
| ③ | 灰黃褐色 | (10YR4/2) 粘質シルト | 焼土粒を多量に含む。炭化物をやや多量に含む。しまりやや弱い。韌性ややあり。 |
| ④ | 灰黃褐色 | (10YR4/2) 粘質シルト | 焼土・炭化物小ブロックをやや多量に含む。しまりやや弱い。韌性ややあり。 |
| ⑤ | 黄褐色 | (2, 10Y5/3) 粘質シルト | 炭化物・焼土粒をやや多量に含む。しまりやや弱い。韌性あり。 |
| ⑥ | 暗褐色 | (10YR3/3) シルト | 焼土中ブロック・褐色砂質シルトの中ブロックを多量に含む。しまりやや強い。韌性・粘性ややあり。 |
| ⑦ | 黒褐色 | (10YR3/2) 粘質シルト | 炭化物・焼土粒。褐色砂質シルトの中ブロックをやや多量に含む。しまりやや弱い。韌性ややあり。 |
| ⑧ | 黒褐色 | (10YR3/1) 粘土 | 炭化物・焼土粒を多量に含む。しまりやや弱い。韌性・粘性あり。 |
| ⑨ | 黒褐色 | (2YR2/2) 粘質シルト | 炭化物化をやや多量に含む。しまりやや弱い。韌性・粘性ややなし。 |



第34図 SI16出土遺物(1)



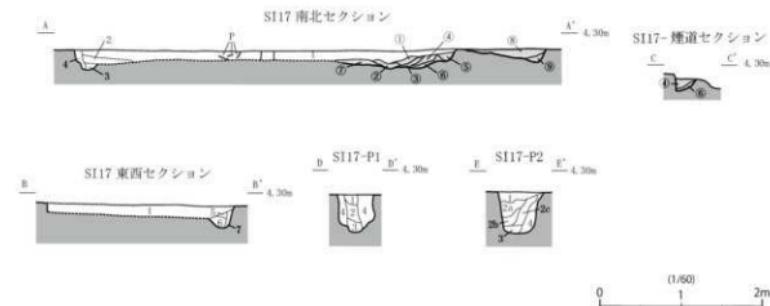
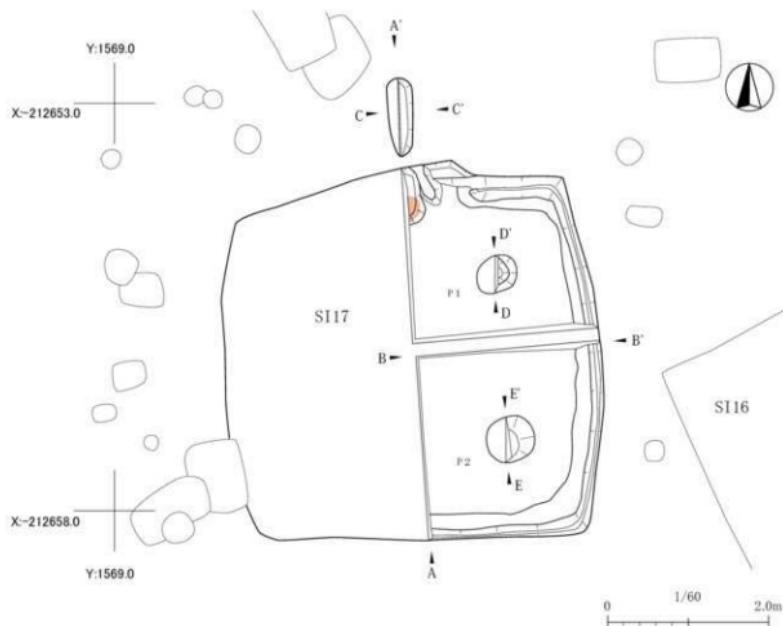
第35圖 SI16出土遺物(2)

ルトを用いた貼床である。主柱穴は認められなかつたが、西壁際の一部では周溝が認められてゐる。

遺物は第32図1に図示した非ロクロ成形の土師器椀のほか、高杯・甕が出土している。1の椀は赤彩が施され、口縁は強く外反する。また底部は丸底である。図示した遺物の年代観から、本遺構は6世紀前半頃の年代観が考えられる。

【SI16】(第33図)

Ⅱ区南東部に位置する。東半分で掘り下げを行っている。SB03と重複関係にあり、これより古い。本遺構の東と南側は調査区外へ広がるために不明な点はあるが、平面形状は方形とみられる。確認した範囲での規模は東西が4.50 m、南北は3.96 m、確認面からの深さは40 cmを測る。西壁で計測した主軸方向は、真北から25°西へ傾く。カマドは北壁につくられ、カマドの構築材にはぶい黄褐色砂質シルトが用いられている。また左袖内と先端には非ロクロ成形の土師器甕2個体を芯材・オサエとして逆位で設置している。燃焼部はSB03の柱穴により一部を失うが、燃焼部の幅は64 cm、確認できた範囲での奥行きは46 cmである。カマド内の壁面では強い被熱が認められ、燃焼部底面も赤変する。煙道部は削平によって一旦途切れるが、カマド奥壁際から長さ154 cmを測る長煙道であり、先端部付近の底面はほぼ平坦である。なお、カマドの右袖脇には底部を欠いた非ロクロ成形の土師器甕



SI17 土層注記

| 番号 | 土色 | 土質 | 備考 |
|----|-----|-------------------|---|
| 1 | 暗褐色 | (7, SYR3/3) 砂質シルト | 褐色粘土を少量含む。褐色シルト粒を多量に含む。しまりやや強い。 |
| 2 | 暗褐色 | (10YR3/3) 砂質シルト | 褐色物・堆土・褐色粘土を少量含む。しまりやや強い。塑性・粘性ややあり。 |
| 3 | 黒褐色 | (10YR3/2) 砂質シルト | 褐色粘土の中プロックを多量に含む。しまりやや強い。塑性・粘性ややあり。 |
| 4 | 黒色 | (10YR2/1) 砂質シルト | 褐色粘土の小プロックを少量含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |
| 5 | 暗褐色 | (10YR3/3) 砂質シルト | 褐色粘土を多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |
| 6 | 黒褐色 | (10YR3/2) 砂質シルト | 褐色粘土の小さい・中プロックを多量に含む。しまりやや強い。塑性・粘性ややあり。 |
| 7 | 黒褐色 | (10YR3/2) 砂質シルト | 褐色粘土の小プロックや多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |

第36図 SI17

SI17 カマド土層注記

| 層№ | 土色 | 土質 | 備考 |
|----|--------|-----------|--|
| ① | 暗褐色 | (10YR3/3) | 粘質シルト 地土粒を少量化。褐色粘土粒を多量に含む。しまりやや強い。塑性・粘性ややあり。 |
| ② | にぶい黄褐色 | (10YR6/3) | 炭化物・焼土粒を多量に含む。暗褐色シルト粒をやや多量に含む。しまりやや強い。塑性・粘性ややあり。 |
| ③ | にぶい黄褐色 | (10YR6/3) | 暗褐色シルト粒を少量化。しまりやや弱い。塑性・粘性ややなし。 |
| ④ | 灰褐色 | (10YR4/2) | 褐色粘土の小・中ブロックを多量に含む。地土粒をやや多く含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |
| ⑤ | にぶい黄褐色 | (10YR4/3) | 褐色粘土の中・大ブロックを多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |
| ⑥ | 灰褐色 | (10YR4/2) | 褐色粘土の中ブロックを多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |
| ⑦ | 暗褐色 | (10YR2/3) | 炭化物・焼土粒を多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |
| ⑧ | 黒色 | (10YR2/1) | 褐色粘土を少量化。褐色粘土の小・中ブロックを多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややなし。 |
| ⑨ | 黒色 | (10YR2/1) | 褐色粘土を少量化。褐色粘土の小・中ブロックを多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややなし。 |

SI17-P1 土層注記

| 層№ | 土色 | 土質 | 備考 |
|----|--------|-----------|--|
| 1 | 黒褐色 | (10YR3/1) | 粘質シルト 地土粒・褐色粘土粒をやや少量化。しまり強い。塑性・粘性ややなし。 |
| 2 | 暗褐色 | (10YR3/3) | 粘質シルト 地土・炭化物粒を少量化。褐色粘土の小・中ブロックを多量に含む。しまりやや弱い。 |
| 3 | にぶい黄褐色 | (10YR4/3) | 褐色粘土の中ブロックを多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |
| 4 | 黒褐色 | (10YR2/3) | 粘質シルト 炭化物粒を少量化。にぶい黄褐色・褐色粘土の中・大ブロックを多量に含む。しまりやや弱い。 |

SI17-P2 土層注記

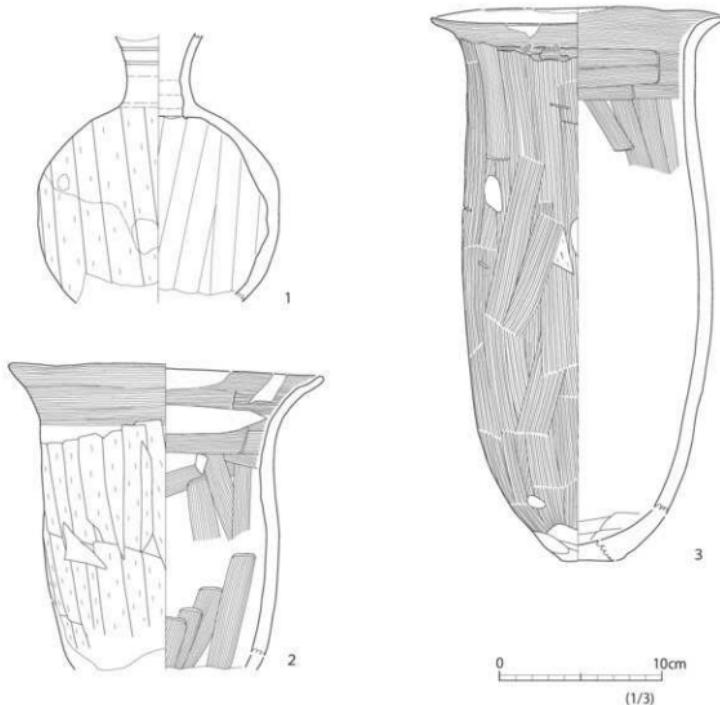
| 層№ | 土色 | 土質 | 備考 |
|----|-----|-----------|--|
| 1 | 黒褐色 | (10YR3/1) | 粘質シルト 地土粒・褐色粘土粒をやや少量化。しまり強い。 |
| 2a | 暗褐色 | (10YR3/3) | 粘質シルト 地土・炭化物粒を少量化。褐色粘土の小・中ブロックを多量に含む。塑性・粘性ややなし。 |
| 2b | 暗褐色 | (10YR3/3) | 粘質シルト 褐色粘土の小・中ブロックを多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |
| 2c | 暗褐色 | (10YR2/3) | 粘質シルト 褐色粘土の小・大ブロックを多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |
| 3 | 黒褐色 | (10YR3/1) | 粘質シルト 褐色粘土の中ブロックをやや多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |
| 4 | 黒褐色 | (10YR4/4) | 粘質シルト 褐色粘土の小・中ブロックをやや多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |

が正置しており、器台として用いられた可能性が考えられる。さらにその東側の床面には、底部を欠いて半分に割れた土器壺を置き、その上に白色粘土塊を載せたものが発見されている。床面は黒褐色粘質シルトを用いた貼床であり、主柱穴は確認できなかったが、カマドを除く北壁際で周溝を確認している。このほかカマド付近の床面からは湖西窯跡群で生産されたフラスコ形長頸瓶が出土している。

遺物は第34・35図に図示した1・2の非クロ成形土器壺、3・4の高坏、5~8の甕、9の須恵器フラスコ形長頸瓶が出土している。1の壺は口縁部と体部との境に明瞭な段を有する。2の壺は関東系土器である。口縁部が短く、また屈曲する。内面の黒色処理は無く、体部、及び底部ではヘラケズリが施される。4の高坏脚部には細長い三角形を呈するとみられる透孔が5か所みられる。同様の透孔の高坏は本遺跡第1次調査SI12出土資料にも存在する。5・6・8の甕は体部下半で最大径を測るものであり、胴部上半部では縦方向のヘラケズリが施される。なお、4・8の甕では頸部に弱い段が認められる。9のフラスコ形長頸瓶は胴部のみの出土であるが、外面上半と内底面には降灰による自然釉がみられる。図示した遺物の年代観から、本遺構は7世紀後半頃の年代観が考えられる。

【SI17】(第36図)

II区南部に位置する。東半分で掘り下げを行っている。平面形状は不整形であり、規模は東西が4.58m、南北は4.46m、確認面からの深さは12cmを測る。カマド中軸線で計測した主軸方向は、真北から4°西へ傾く。カマドは北壁中央につくられ、カマドの構築材にはにぶい黄褐色砂質シルトが用いられている。燃焼部の奥行きは71cmである。カマド内の壁面ではごく弱い被熱が認められ、燃焼部底面の赤変は顕著ではない。煙道部は削平によって一旦途切れるが、カマド奥壁際から長さ124cmを測る長煙道であり、先端部付近に向かってやや急激に傾斜する。なお、カマドの右袖脇には床面から8cmほどの高さで、幅45cm、奥行15cmの平坦な張り出しがつくられている。床面は灰黄褐



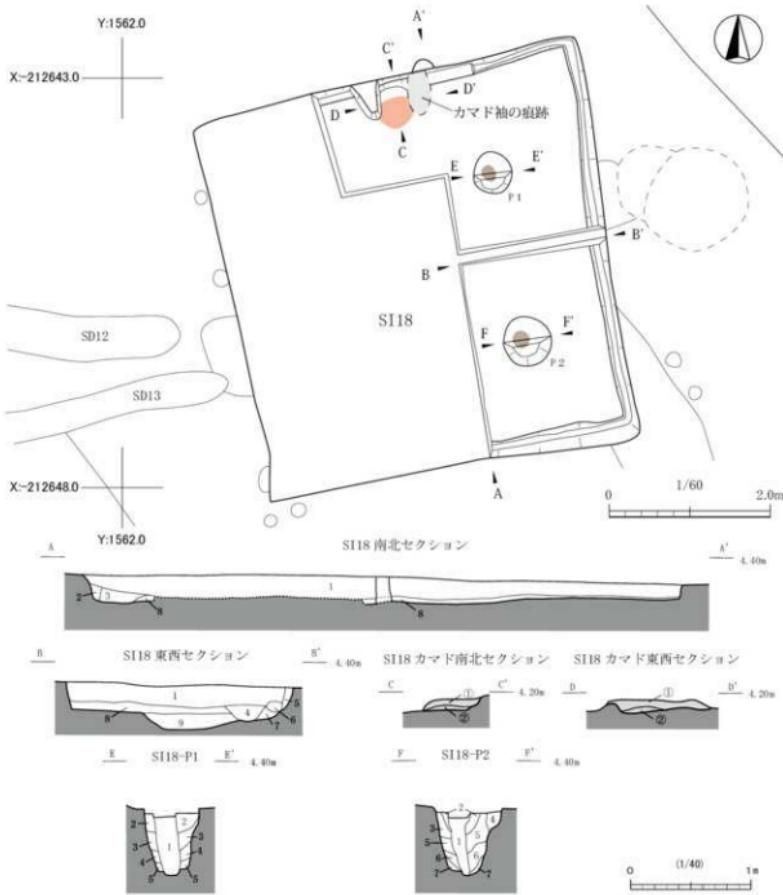
第37図 SI17出土遺物

色粘質シルトを用いた貼床であり、主柱穴が2口確認している。周溝はカマドを除く全てで確認している。このほか床面からは猿投窓跡群で生産されたフラスコ形長頸瓶、非ロクロ成形の土師器甕が出土している。

遺物は第37図に図示した1の須恵器フラスコ形長頸瓶、2・3の非ロクロ成形土師器甕が出土している。1のフラスコ形長頸瓶の外面には暗みがかった降灰による自然釉がみられ、頸部には2条の沈線がめぐる。2・3の甕は頸部には段が見られず、口縁部が外側へ強く外反する。3の底部ではハケメが施されている。図示した遺物の年代観から、本遺構は7世紀後半頃の年代観が考えられる。

【SI18】(第38図)

II区中央部に位置する。東半分とカマド部分で掘り下げを行っている。平面形状は方形であり、規模は東西が4.82m、南北は4.82m、確認面からの深さは19cmを測る。東壁で計測した主軸方向は、



SI18 土層注記

| 番号 | 土色 | 土質 | 備考 |
|----|-----|-----------------|--|
| 1 | 暗褐色 | (10YR3/3) 粘質シルト | 炭化物・焼土粒を少量含む。褐色粘土の小~中ブロックを多量に含む。しまりやや強い。 |
| 2 | 黒褐色 | (10YR3/2) 粘土 | 炭化物を少量含む。にじい黄褐色・褐色粘土の中ブロックをやや多量に含む。しまりやや弱い。 |
| 3 | 黒褐色 | (10YR3/2) 粘質シルト | 炭化物を少量含む。にじい黄褐色・褐色粘土の中ブロックをやや多量に含む。しまりやや弱い。 |
| 4 | 黒褐色 | (10YR2/2) 粘土 | 炭化物・焼土粒を少量含む。褐色粘土の中ブロックを多量に含む。しまり強い。塑性・粘性ややなし。 |
| 5 | 黒褐色 | (10YR2/3) 粘土 | 褐色粘土の小さな小アプロックを少量含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややなし。 |
| 6 | 黒褐色 | (10YR2/2) 粘土 | 褐色粘土の中ブロックをやや多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややなし。 |
| 7 | 暗褐色 | (10YR3/4) 粘土 | 黒褐色粘土の中ブロックを少量含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |
| 8 | 黒褐色 | (10YR3/1) 粘質シルト | 炭化物・焼土粒をやや多量含む。褐色・褐色粘土の中・中ブロックをやや多量に含む。鰐床埋土。 |
| 9 | 黒色 | (10YR2/1) 粘土 | 褐色粘土の大ブロックを多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややなし。腐泥質土。 |
| ① | 暗褐色 | (10YR3/3) 粘質シルト | 炭化物を少量含む。焼土粒を少ブロックを多量に含む。しまりやや弱い。 |
| ② | 暗褐色 | (10YR3/3) 粘質シルト | 炭化物を少量含む。焼土粒へ少ブロックを多量に含む。しまりやや弱い。粘性ややあり。 |

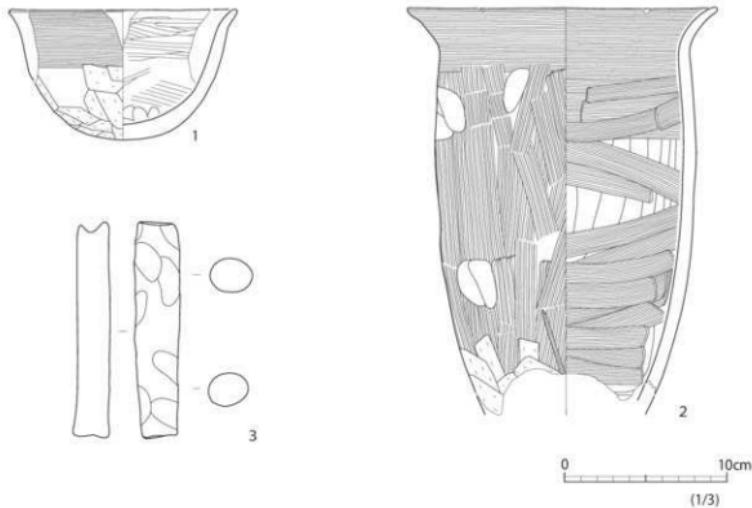
第38図 SI18

SI18-P1 土層注記

| 層No. | 土色 | 土質 | 備考 |
|------|-------|-----------|--|
| 1 | 暗褐色 | (10YR3/3) | 粘質シルト 褐色粘土の小ブロックを多量に含む。しまりやや強い。塑性・粘性ややあり。 |
| 2 | 黒褐色 | (10YR2/3) | 粘質シルト 褐色粘土の小ブロックをやや多量に含む。しまり強い。塑性・粘性ややなし。 |
| 3 | 濃い黄褐色 | (10YR4/3) | 炭化物を少量含む。褐色粘土の小ブロックを多量に含む。しまりやや強い。塑性・粘性ややなし。 |
| 4 | 暗褐色 | (10YR3/4) | 粘質シルト 褐色粘土の中・中ブロックをやや多量に含む。しまりやや強い。塑性・粘性ややあり。 |
| 5 | 褐色 | (10YR4/6) | 粘質粘土 褐色粘土の小ブロックを少量に含む。しまりやや強い。塑性・粘性ややあり。 |

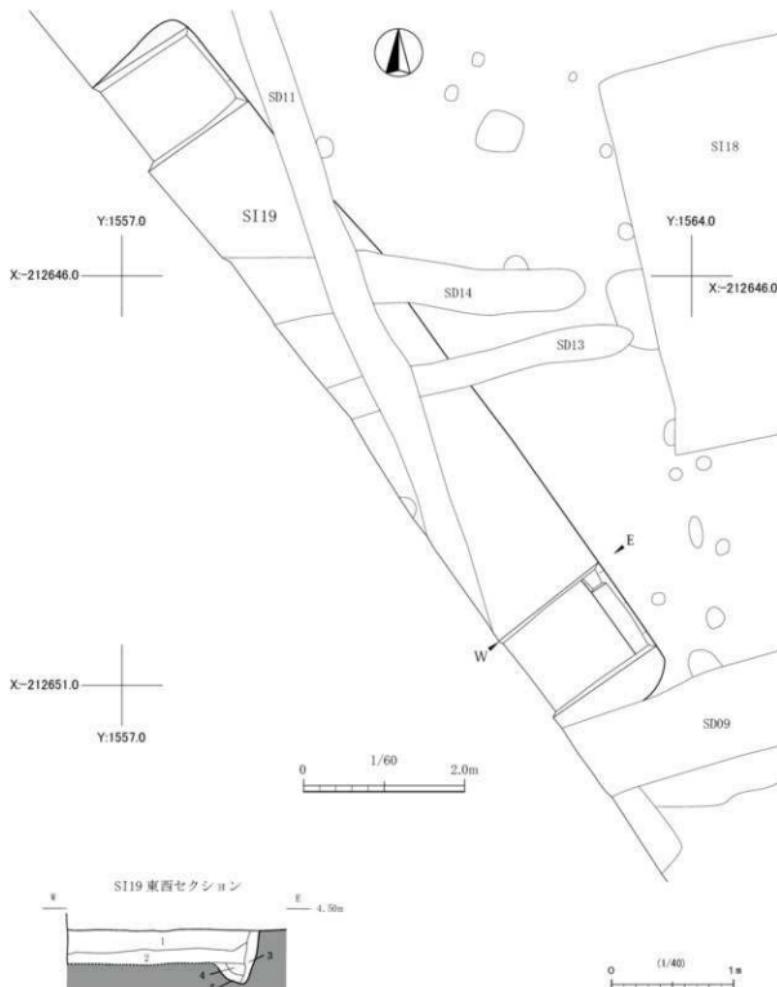
SI18-P2 土層注記

| 層No. | 土色 | 土質 | 備考 |
|------|-----|------------|--|
| 1 | 黒褐色 | (7,5YR2/2) | 炭化物・燃土粒を少量含む。暗褐色粘土粒をやや多量に含む。しまりやや強い。塑性・粘性ややなし。 |
| 2 | 黒褐色 | (7,5YR2/2) | 暗褐色・黒褐色粘土の小ブロックをやや多量に含む。しまりやや強い。塑性・粘性ややあり。 |
| 3 | 暗褐色 | (10YR3/3) | 褐色粘土の中ぶらっこを多量に含む。しまりやや強い。塑性・粘性ややあり。 |
| 4 | 褐色 | (7,5YR4/4) | 黒褐色粘土の中・大ブロックを多量に含む。しまりやや強い。塑性・粘性ややなし。 |
| 5 | 黒褐色 | (10YR2/2) | 褐色・暗褐色粘土の中・大ブロックを多量に含む。しまりやや強い。塑性・粘性ややあり。 |
| 6 | 黒褐色 | (10YR2/2) | 褐色粘土の中・大ブロックを多量に含む。しまりやや強い。塑性・粘性ややあり。 |
| 7 | 黒褐色 | (10YR3/1) | しまりやや弱い。塑性あり。粘性なし。 |



第39図 SI18出土遺物

真北から9°西へ傾く。カマドは北壁中央につくられ、カマドの構築材にはにぶい黄褐色砂質シルトが用いられているが、廃絶時に意図して破壊されたようで、左袖の先端、及び右袖は明確には認められていない。焼土範囲から燃焼部の幅は50cm、奥行きは62cmほどであると考えられる。カマド左袖壁面ではごく弱い被熱が認められ、燃焼部底面では焼土・炭化物はみられるものの、赤変は顯著ではない。煙道部は確認できなかった。床面は黒褐色粘質シルトを用いた貼床であり、主柱穴を2口確認



SI19 土層注記

| 層No. | 土色 | 土質 | 備考 |
|------|-----|-----------------|--|
| 1 | 黒褐色 | (10YR3/1) 粘質シルト | 腐化物・堆土粒・褐色粘土粒をやや多量に含む。しまりやや強い。塑性・粘性ややあり。 |
| 2 | 黒褐色 | (10YR3/1) 粘質シルト | 腐化物・堆土粒をやや少量に含む。褐色粘土粒を多量に含む。しまりやや強い。塑性・粘性ややあり。 |
| 3 | 黒褐色 | (10YR3/2) 粘質シルト | 褐色粘土の小・大ブロックを多量に含む。「しまりやや弱い」。塑性・粘性ややあり。 |
| 4 | 黒褐色 | (10YR3/2) 粘質シルト | 褐色粘土の小・中ブロックを多量に含む。「しまりやや弱い」。塑性・粘性ややあり。 |
| 5 | 暗褐色 | (10YR3/3) 粘質シルト | 褐色粘土の小・中ブロックを多量に含む。「しまりやや弱い」。塑性・粘性ややあり。 |

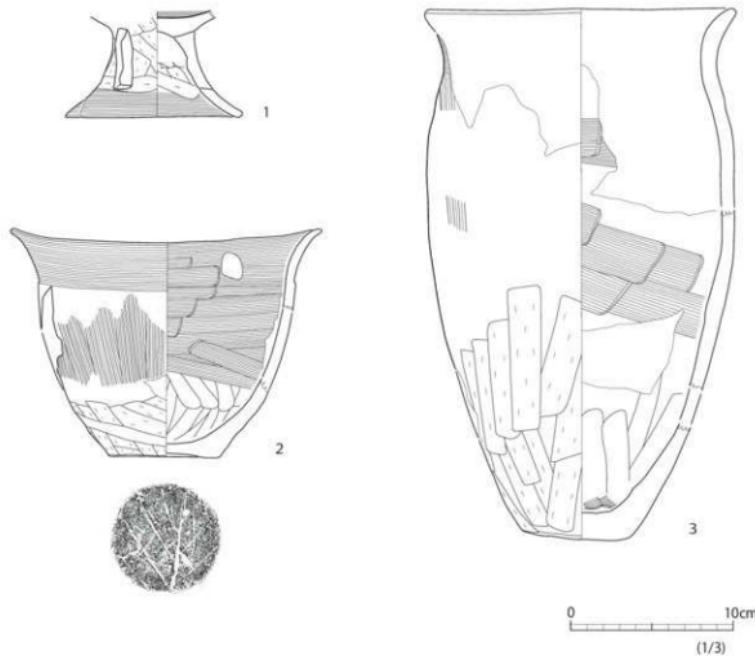
第40図 SI19

している。周溝はカマドを除く全てで確認している。

遺物は第39図に図示した1の非クロコ成形土器器坏、2の甕のほか、カマド右袖の痕跡と考えられる場所から出土した土製品がある。1の坏は器高が高く、底部は丸みが強いものであり、内面には黒色処理が行われていない。縦方向のハケメの後にヨコナダが施される。3の土製品は一部では被焼の痕跡が認められる。類例は福島県本宮町高木遺跡 58号住居跡でみられ（福島県教委2002・註1）、支脚の可能性が考えられる。図示した遺物の年代観から、本遺構は7世紀後半頃の年代観が考えられる。

【SI19】（第40図）

II区西側中央に位置する。北側と南側の一部で掘り下げを行っている。本遺構の大部分は調査区西側へ広がるために平面形状は不明であるが、確認した範囲での規模は南北10.15m、確認面からの深さは40cmを測る。東壁で計測した主軸方向は、真北から38°西へ傾く。床面は黒褐色粘質シルトを用いた貼床であり、カマドや主柱穴は未確認であるが、周溝を南東部分で確認している。



第41図 SI19出土遺物

遺物は第41図に図示した1の非クロコ成形土師器高杯、2・3の甕が出土している。1の高杯は脚部に長方形の透孔をもつものである。2の甕は底部から口縁部に向かって大きく開く形状であり、頸部には弱い段を有する。

3の甕の器面は磨滅が著しいが、体部上半の一部にハケメ、下半に縦方向のヘラケズリが認められる。図示した遺物の年代観から、本遺構は7世紀後半頃の年代観が考えられる。

第4表 穴穴建物跡属性表

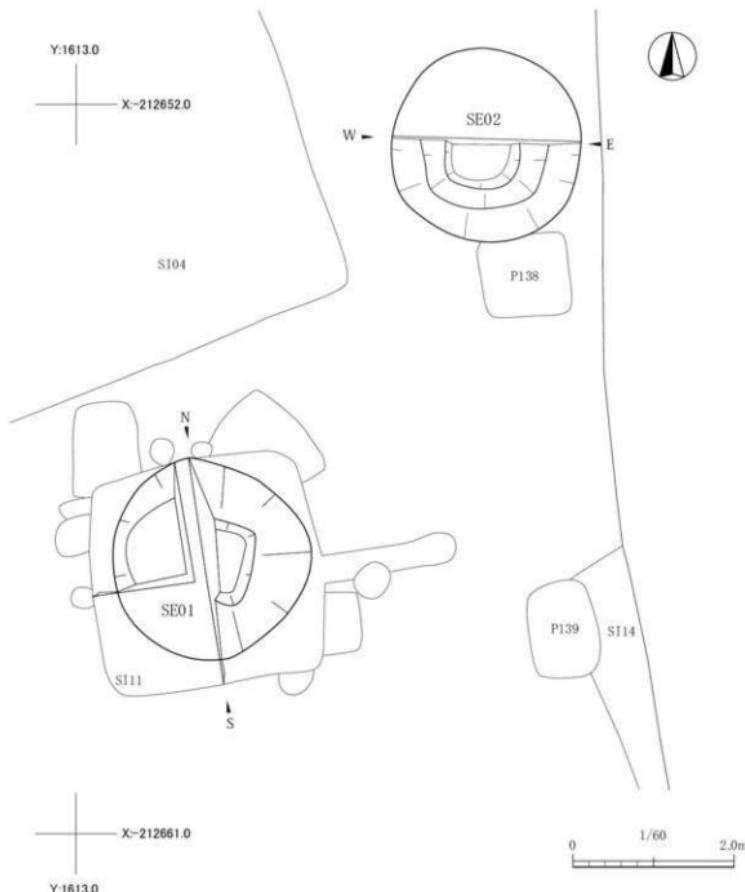
| 建物名 | 平面形 （東西×南北） | 軸方位 N-30°W | 床 | カマド 中央 | カマド 構築材 シルト | 焼造道 164 | 柱穴 主柱穴 3 | 周廣 を除く 全周 | 出土遺物 非クロコ成形土師器 杯・甕、須恵器高杯・甕、 土製品（文脚） | 時期 6世紀末葉 ～ 7世紀前半 | 備考 SD01より古 カマド燃焼部内に 土製脚 |
|------|------------------------------|---------------|----|-----------------|-------------------|------------|----------------|-------------------|--|---------------------------|--|
| SI01 | 方形 (5.48) X 6.18 | N-14°W | 貼床 | 北壁 中央 | 粘質 シルト | 不明 | 主柱穴 2 | カマド を除く 全周 | 非クロコ成形土師器 杯・甕、須恵器高杯・甕、 土製品（文脚） | 6世紀末葉 ～ 7世紀前半 | SD01より古 カマド燃焼部内に 土製脚 |
| SI02 | 方形 5.53 X 5.55 | N-19°W | 貼床 | 北壁 中央 | 粘質 シルト | 不明 | 主柱穴 4 | カマド を除く 全周 | 非クロコ成形土師器 杯・甕、須恵器高杯・甕、 土製品（文脚） | 6世紀末葉 ～ 7世紀前半 | 小溝状遺構群より新 SD02より古 カマド燃焼部内に 土製脚 |
| SI04 | 方形 5.92 X 6.12 | N-15°W | 貼床 | 北壁 中央 西寄り | 粘質 シルト | 不明 | 主柱穴 1 | なし | 非クロコ成形土師器 甕、須恵器高杯・甕・甕 | 6世紀末葉 ～ 7世紀前半 | SB01、SK01・02、 SD08より古 カマド左袖のオサ エ材に逆位の土師 器甕を設置 建替えの可能性 |
| SI07 | 方形 5.25 X 5.05 | N-8°W | 貼床 | 北壁 中央 | 砂質 シルト | 長埋道 148 | 主柱穴 1 | 西壁際 の一部 | 非クロコ成形土師器 杯・甕・甕 | 6世紀末葉 ～ 7世紀前半 | 小溝状遺構群より新 SD01、SI09・10 より古 |
| SI09 | 方形 3.85 X 3.95 | N-8°W | 地山 | 東壁 中央？ | 不明 | 不明 | なし | 東壁 南・西 壁の一部 | ロクロ成形土師器杯・ 甕、須恵器甕 | 8世紀末葉 以降 | 小溝状遺構群、 SI07・09より新 |
| SI10 | 方形 3.00 X 3.08 | N-6°W | 貼床 | 北壁 東寄り | 不明 | 長埋道 160 | なし | なし | ロクロ成形杯、須恵器 甕 | 9世紀前半 | SB01、SI07より新 カマドは北壁をU 字状に掘り込んで 構築 |
| SI11 | 隅丸方形 2.82 X 2.84 | N-7°W | 地山 | 東壁 中央 | 不明 | 長埋道 163 | 不明 | なし | ロクロ成形土師器杯 | 8世紀末葉 ～ 9世紀初頭 | SD01より新 SD01より古 |
| SI12 | 方形 4.22 X 4.20 | N-13°W | 貼床 | 東壁 中央？ | 不明 | 不明 | 主柱穴 2 | なし | 非クロコ成形土師器 甕、ロクロ成形土師器 甕 | 不明 | SI13より新 SD01より古 |
| SI13 | 方形？ (1.10) X 2.62 | N-19°W | 地山 | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 | なし | 非クロコ成形土師器甕 | 6世紀末葉 ～ 7世紀前半 | SB01、SI12より古 |
| SI14 | 不明 (0.70) X 3.42 | N-22°W | 地山 | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 | なし | 非クロコ成形土師器甕 | 不明 | P130より古 |
| SI15 | 方形？ 3.96 X (2.90) | N-30°W | 貼床 | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 | なし | 非クロコ成形土師器 杯・高杯・甕 | 6世紀前半 ？ | |
| SI16 | 方形？ (4.50) X (3.96) | N-25°W | 貼床 | 北壁 中央？ | 粘質 シルト | 長埋道 154 | なし | なし | 非クロコ成形土師器杯 (隠東系土師器含む)・ 高杯・甕、須恵器杯・ 長颈瓶・甕 | 7世紀後半 | SB03より古 カマド左袖の芯材・ オサエに逆位の土 師器甕、カマド右 袖協に底部を欠く 土師器甕を正位で 設置 |
| SI17 | 不整形 4.58 X 4.46 | N-4°W | 貼床 | 北壁 中央 | 砂質 シルト | 長埋道 124 | 主柱穴 2 | カマド を除く 全周 | 非クロコ成形甕、須恵 器長颈瓶 | 7世紀後半 | カマド右脇に櫛状 設置 |
| SI18 | 方形 4.82 X 4.82 | N-9°W | 貼床 | 北壁 中央 | 砂質 シルト | 不明 | 主柱穴 2 | カマド を除く 全周 | 非クロコ成形土師器 杯・甕、土製品（文脚） | 7世紀後半 | 建物廃絶時にカマ ドを意図的に破壊 か |
| SI19 | 方形？ (1.06) X 10.15 | N-38°W | 貼床 | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 | 東壁際 の一部 | 非クロコ成形土師器高 杯・甕 | 7世紀後半 | SD09・11・13・14 より古 |

d. 井戸跡

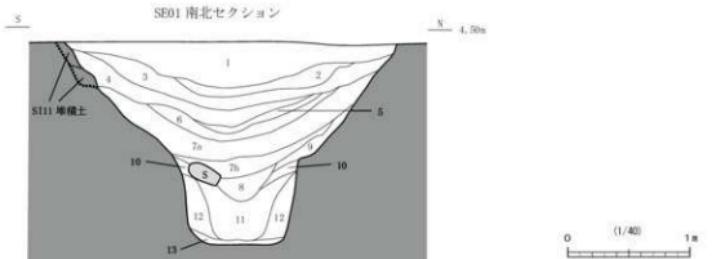
【SE01】(第 42・43 図)

I 区中央部東側に位置する。東側と北西部の一部で掘り下げを行っている。SB01、SI11 と重複関係にあり、これらより新しい。特に SI11 とは完全に重複しており、SI11 の廃絶後からさほど時間を経ずに本構造をつくった可能性がある。素掘りの井戸であり、平面形状は楕円形で、規模は長軸 2.52 m、短軸 2.42 m を測る。断面形状は漏斗状であり、確認面からの深さは 168 cm を測る。堆積土は 13 層に分層でき、すべて自然堆積である。

遺物は第 44 図 1 に図示した須恵器甕のほか、非黒クロ成形の土師器壺・高壺・甕、そして須恵器

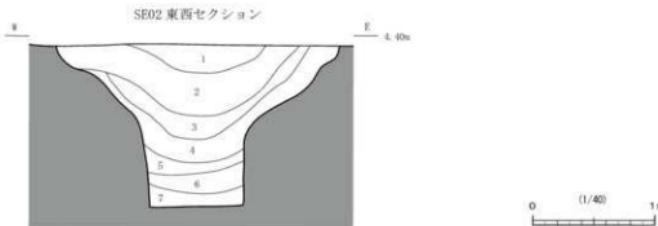


第 42 図 SE01・02



SE01 南北セクション注記

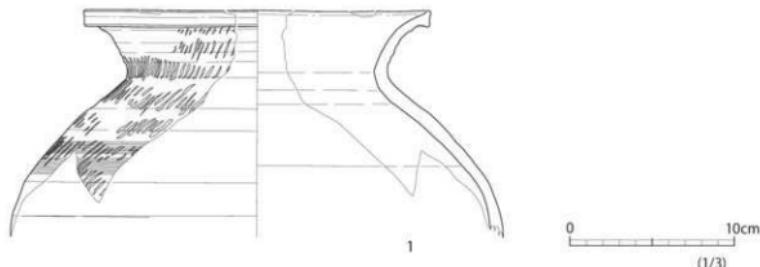
| 層番号 | 土色 | 土質 | 備考 |
|-----|---------|------------|--|
| 1 | 黒褐色 | (10YR3/2) | シルト 炭化物を少量含む。しまりあり。 |
| 2 | 灰青褐色 | (10YR4/2) | シルト にごい黄褐色シルト粒を少量含む。しまりやや強い。 |
| 3 | 暗オリーブ褐色 | (2, 5Y3/3) | シルト 灰黄褐色シルト粒を少量含む。しまりやや強い。 |
| 4 | 暗オリーブ褐色 | (2, 5Y3/3) | 粘質シルト 灰黄褐色シルト粒・無土粒を少量含む。しまりやや強い。 |
| 5 | オリーブ褐色 | (2, 5Y4/3) | 粘質シルト 黄褐色粘土粒を少量含む。しまりやや弱い。 |
| 6 | 暗オリーブ褐色 | (2, 5Y3/3) | 粘質シルト 炭化物を少量含む。しまりやや弱い。 |
| 7a | 暗褐色 | (10YR3/2) | 粘質シルト 炭化物を少量含む。しまりやや弱い。 |
| 7b | 暗褐色 | (10YR3/2) | 粘質シルト 炭化物を少量含む。しまりやや弱い。粘性高い。 |
| 8 | 黃灰色 | (2, 5Y4/1) | 粘土 暗灰褐色。黒色粘土中ブロックを多量含む。しまりやや弱い。 |
| 9 | 褐色 | (10YR4/1) | 粘質シルト にごい黄褐色粘土小ブロックをやや多量含む。しまりやや弱い。 |
| 10 | にごい黄褐色 | (10YR4/2) | 粘土 褐色シルト粒を少量含む。しまりやや弱い。 |
| 11 | 黒色 | (2, 5Y2/1) | 粘土 炭化物分を多量含む。しまり弱い。粘性高い。 |
| 12 | 暗褐色 | (7, 5Y3/3) | 細砂 炭化物分をやや多量含む。しまり弱い。 |
| 13 | 暗灰色 | (X3/1) | 粘土 灰白色・褐色粘土小ブロックをやや多量含む。しまりやや強い。粘性高い。 |



SE02 東西セクション注記

| 層番号 | 土色 | 土質 | 備考 |
|-----|--------|-----------|---|
| 1 | 暗褐色 | (10YR3/4) | シルト質粘土 炭化物・無土粒を少量含む。褐色粘土の小ブロックを帯状に含む。しまり強い。粘性あり。 |
| 2 | 黒褐色 | (10YR3/2) | 粘質シルト 炭化物・無土粒を少量含む。黒褐色粘土の小ブロックを少量含む。しまり強い。粘性ややあり。 |
| 3 | にごい黄褐色 | (10YR4/3) | シルト質粘土 炭化物を少量含む。黒褐色・褐色粘土の小ブロックをやや多量に含む。しまり弱い。粘性あり。 |
| 4 | 暗褐色 | (10YR3/1) | 粘土 炭化物を少量含む。褐色粘土の小ブロックを少量に含む。しまり強い。粘性あり。 |
| 5 | 暗褐色 | (10YR3/3) | 粘土 炭化物を少量含む。褐色粘土の小ブロックを多量に含む。しまりやや弱い。粘性あり。 |
| 6 | 黒褐色 | (10YR3/2) | 粘土 炭化物を少量含む。褐色粘土の小ブロックを少量含む。しまりやや弱い。粘性あり。 |
| 7 | 黒褐色 | (10YR3/2) | 粘質シルト 雪面粘土を少量含む。しまりやや弱い。粘性ややあり。 |

第43図 SE01・02 土層断面図



第44図 SE01出土遺物

| 番号 | 縁部・層位 | 種別 | 部構 | 外 面 | | 内 面 | | 堆 積 | 法量(cm) | | | 写真図版 |
|----|--------|-----|----|-------|------------|-------|----------|-----|--------|----|----|------|
| | | | | ロクロナダ | 平行叩き目・ヘラナダ | ロクロナダ | ロクロ・体部破片 | | 口径 | 底径 | 器高 | |
| 1 | 北側・堆積土 | 須恵器 | 便 | | | | | | 21.0 | - | - | |



第45図 SE02出土遺物

| 番号 | 縁部・層位 | 種別 | 部構 | 外 面 | | 内 面 | | 堆 積 | 法量(cm) | | | 写真図版 |
|----|--------|-----|----|-------------|------------------|------|------|-----|--------|-------|----|------|
| | | | | ロクロナダ・ハラケズリ | 底部凹軸系切り離し後・ハラケズリ | 黑色処理 | 底部破片 | | 口径 | 底径 | 器高 | |
| 1 | 南側・堆積土 | 土師器 | 井 | | | | | | - | (6.9) | - | |

第5表 井戸跡属性表

| 遺構名 | 構造 | 平面形 | 断面形 | 規模 (m) | 深さ (m) | 堆積土 | 遺物 | 備考 |
|------|----|-----|-----|-------------|--------|-----|---------------------------|---------|
| SE01 | 素掘 | 橢円形 | 漏斗 | 2.52 × 2.42 | 1.68 | 自然 | 青ロクロ成形土師器杯・高杯・便、須恵器杯 | SI11より新 |
| SE02 | 素掘 | 円形 | 漏斗 | 2.38 × 2.32 | 1.32 | 自然 | 青ロクロ成形土師器甕、ロクロ成形土師器杯、須恵器甕 | P138より新 |

坏がごく少量出土している。前述したSI11との重複関係から、本遺構は9世紀前半頃の年代観が考えられる。

【SE02】(第42・43図)

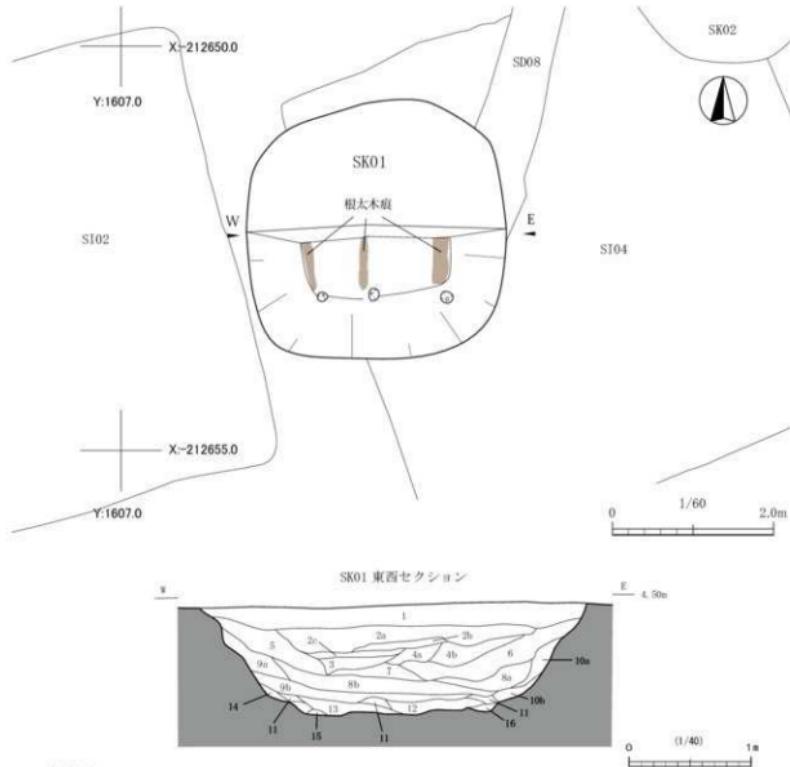
I区東側中央に位置する。南側で掘り下げを行っている。P138と重複関係にあり、これより新しい。素掘りの井戸であり、平面形状は円形で、規模は長軸2.38 m、短軸2.32 mを測る。断面形状は漏斗状であり、確認面からの深さは132 cmを測る。堆積土は7層に分層でき、すべて自然堆積である。

遺物は第45図1に図示したロクロ成形の土師器坏のほか、非ロクロ成形の土師器甕、須恵器甕がごく少量出土している。図示した遺物の年代観から、本遺構は9世紀前半頃の年代観が考えられる。

e. 大型土坑

【SK01】(第46図)

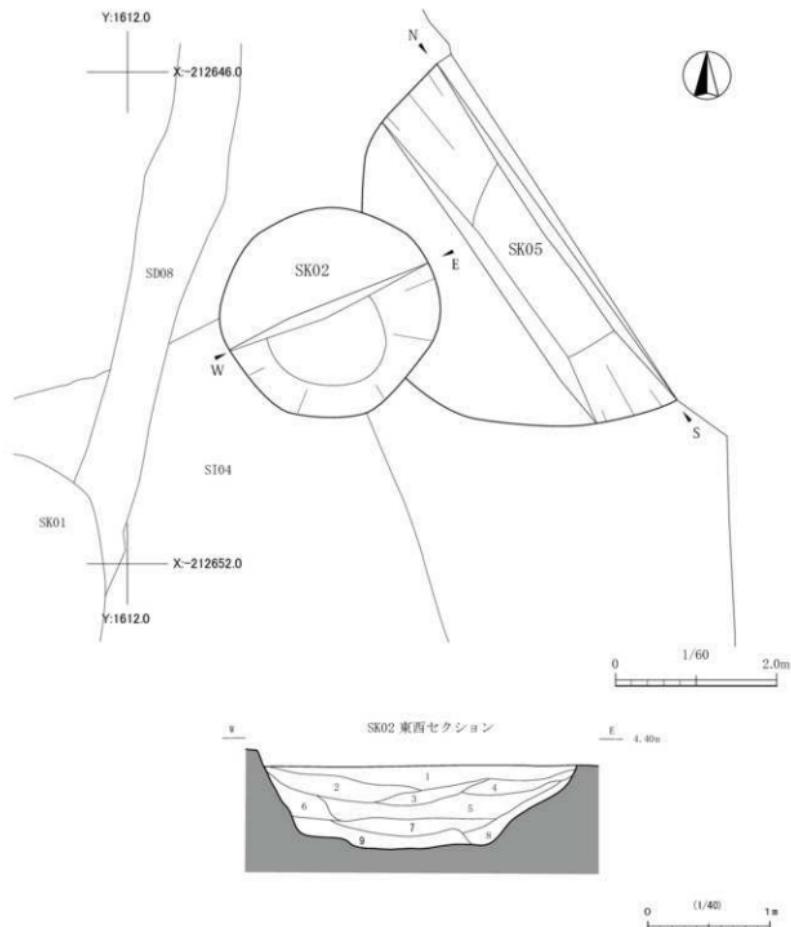
I区中央部北寄りに位置する。南側で掘り下げを行っている。SI04、SD08と重複関係にあり、これらより新しい。平面形状は隅丸方形で、規模は長軸3.32 m、短軸3.20 mを測る。断面形状は逆台形であり、確認面からの深さは90 cmを測る。底面には褐色粘土を用いた貼床がみられ、そこでは幅10～15 cmのにぶい黄橙色粘土が東西方向に3列並んでいた。本遺跡地内で確認される柱穴底面の基



SK01 土層注記

| 順番 | 土色 | 土質 | 備考 |
|-----|--------|-----------|---|
| 1 | 暗褐色 | (10)Y3(2) | 炭化物を少量含む。しまり無い。 |
| 2a | 暗褐色 | (10)Y3(2) | 炭化物・褐色粘土を少額含む。しまりやや弱い。 |
| 2b | 暗褐色 | (10)Y3(2) | 炭化物・褐色粘土を少量含む。しまりやや弱い。 |
| 3 | にぶい黃褐色 | (10)Y4(3) | 炭化物粘土を少量含む。黃褐色粘土をブロック状にやや多量に含む。しまりやや弱い。 |
| 4a | 黒褐色 | (10)Y3(1) | 炭化物・にぶい黒褐色粘土を少量含む。しまりやや弱い。 |
| 4b | 暗褐色 | (10)Y3(1) | 炭化物・にぶい黒褐色粘土をやや多量に含む。しまりやや弱い。 |
| 5 | 暗褐色 | (10)Y3(2) | 炭化物・褐色粘土を少量含む。黄褐色粘土を多量に含む。しまりやや弱い。 |
| 6 | 暗褐色 | (10)Y3(3) | 炭化物を多量に含む。黃褐色粘土をブロック状に含む。しまりやや弱い。 |
| 7 | 黒褐色 | (10)Y3(1) | 炭化物を少額含む。黒褐色粘土を含む。しまりやや弱い。 |
| 8a | 褐色 | (10)Y4(4) | 粘質シルト |
| 8b | 褐色 | (10)Y4(4) | 粘質シルト |
| 9a | にぶい黃褐色 | (10)Y4(3) | 炭化物を少額含む。しまりやや弱い。塑性ややあり。 |
| 9b | にぶい黃褐色 | (10)Y4(3) | 炭化物・褐色粘土を少額含む。しまりやや弱い。 |
| 10a | 黒褐色 | (10)Y3(2) | 粘質シルト |
| 10b | 黒褐色 | (10)Y3(2) | 粘質シルト |
| 11 | にぶい黃褐色 | (10)Y4(3) | 黒褐色粘土をブロック状に含む。耐化鉄分を細粒状に含む。しまりやや弱い。塑性ややあり。根太木痕。 |
| 12 | 褐色 | (10)Y4(6) | 黒色・黒褐色粘土の小ブロックを多量に含む。しまりやや弱い。塑性ややあり。點床土。 |
| 13 | 褐色 | (10)Y4(6) | 黒色・黒褐色粘土の小・中ブロックを多量に含む。しまりやや弱い。塑性ややあり。點床土。 |
| 14 | 褐色 | (10)Y4(6) | シルト質粘土 |
| 15 | オリーブ褐色 | (10)Y4(6) | 粘土 |
| 16 | オリーブ褐色 | (10)Y4(6) | 黒褐色粘土の小ブロックをやや多量に含む。しまりやや弱い。塑性あり。 |

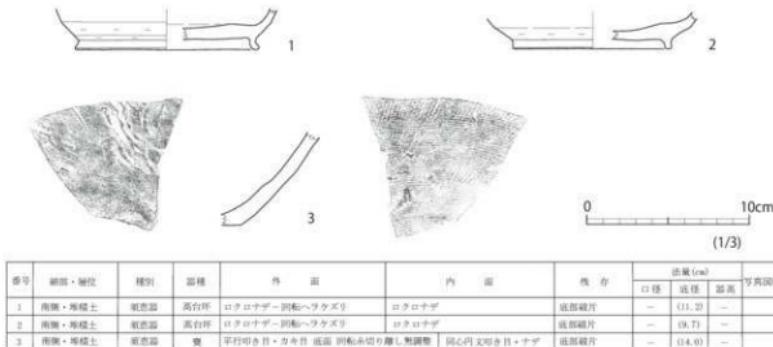
第46図 SK01



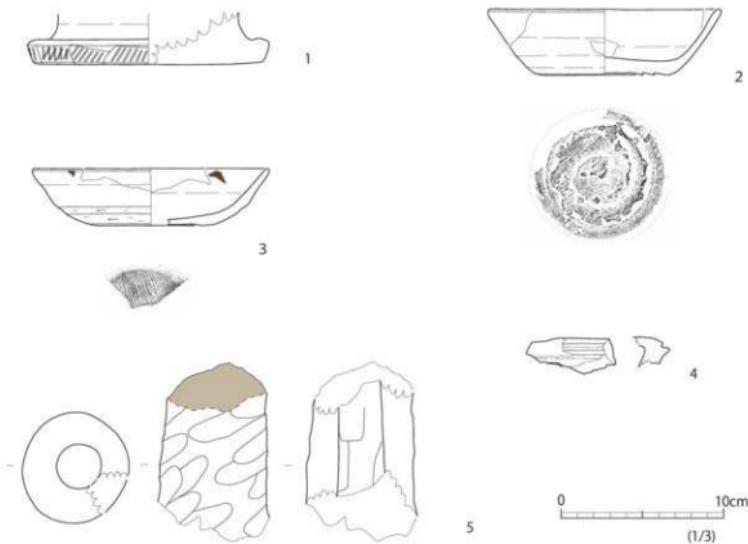
SK02 土層注記

| 層番 | 土色 | 土質 | 備考 |
|----|-----|-----------|---|
| 1 | 暗褐色 | (10YR3/3) | 砂質シルト 炭化物・塊土粒を多量に含む。黒褐色粘土の小ブロックを少量含む。しまり強い。粘性なし。 |
| 2 | 暗褐色 | (10YR3/3) | 砂質シルト 炭化物・塊土粒を少量含む。褐色・黒褐色粘土の小ブロックを少量含む。しまり強い。粘性なし。 |
| 3 | 暗褐色 | (10YR3/3) | 砂質シルト 炭化物を少量含む。褐色・黒褐色粘土の小ブロックを多量に含む。しまり強い。粘性ややあり。 |
| 4 | 暗褐色 | (10YR3/3) | 砂質シルト 炭化物・塊土粒を少量含む。しまり強い。粘性なし。 |
| 5 | 暗褐色 | (10YR3/4) | 粘質シルト 炭化物を多量に含む。堆土粒・小礫・褐色粘土小ブロックを少量含む。しまり強い。粘性ややあり。 |
| 6 | 暗褐色 | (10YR3/4) | シルト 炭化物を少量含む。堆土粒・褐色粘土小ブロックを多量に含む。しまり強い。粘性なし。 |
| 7 | 暗褐色 | (10YR3/4) | 粘質シルト 炭化物・堆土粒を少量含む。褐色粘土の小ブロックを少量含む。しまり強い。粘性ややあり。 |
| 8 | 暗褐色 | (10YR3/4) | 砂質シルト 炭化物・塊土粒を少量含む。褐色粘土の小ブロックを多量に含む。しまり強い。粘性なし。 |
| 9 | 暗褐色 | (10YR3/4) | シルト質粘土 炭化物を多量に含む。堆土粒を少量含む。褐色粘土の小ブロックを多量に含む。しまり強い。粘性あり。 |

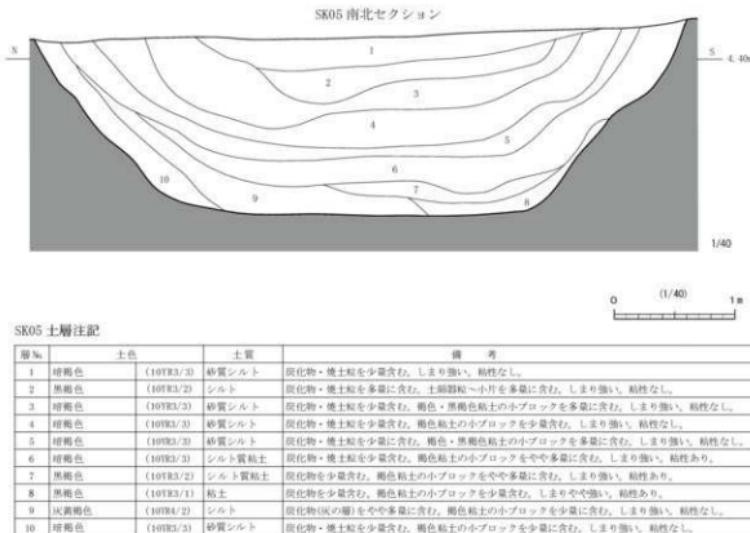
第 47 図 SK02



第48図 SK01出土遺物



第49図 SK02出土遺物



第50図 SK05 土層断面図

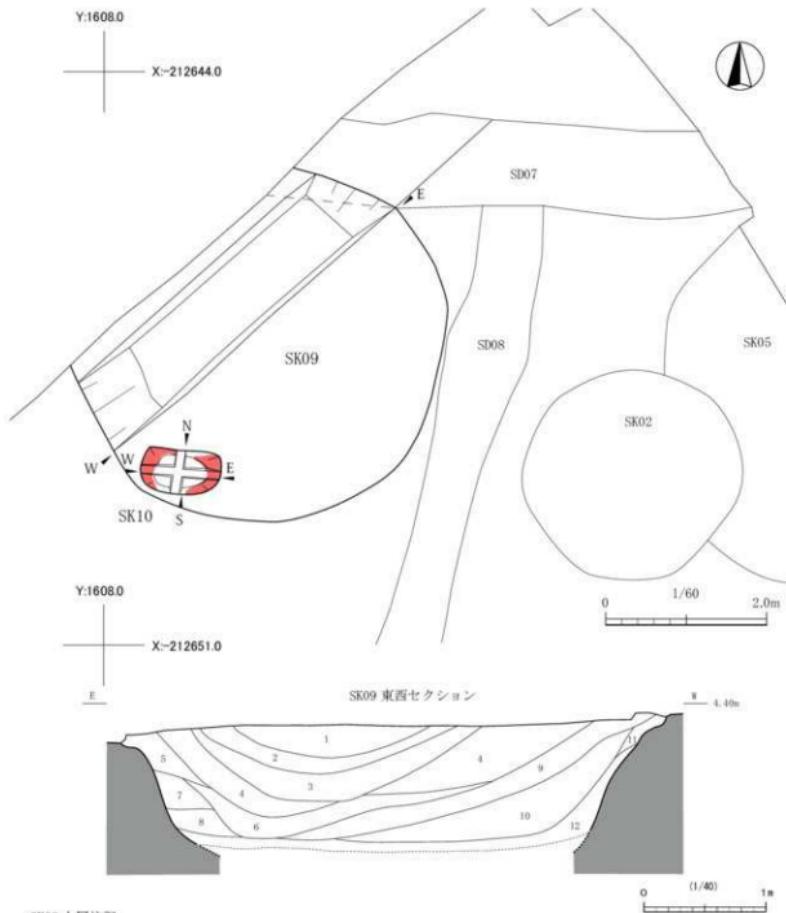
本層第VII層では、荷重を受けた柱当たりの部分が同様の色調に変色していることから、これらは貼床の上でさらに床板を敷くにあたって設置した根太木の痕跡であるとみられる。各根太木痕跡の南端に接するように、直径10cmほどの杭を打ち込んだ痕跡も認められており、壁板の設置、あるいは簡易的な屋根のような設備が存在していた可能性も考慮できる。堆積土は21層に分層でき、土層観察の結果から8～10層は自然堆積で、そのほかは人為堆積とみられる。

遺物は第48図1に図示した須恵器高台壺・甕のほか、非ロクロ成形の土師器壺・甕、須恵器瓶類がごく少量出土している。SI04、SD08との重複関係から、本遺構は8世紀後半頃の年代観が考えられる。

【SK02】(第47図)

I区北東部に位置する。南側で掘り下げを行っている。SI04、SK05と重複関係にあり、これらより新しい。平面形状は円形で、規模は長軸2.68m、短軸2.58mを測る。断面形状は逆台形であり、確認面からの深さは68cmを測る。堆積土の中で特に5・6層では大量の炭化物と焼土粒が出土している。これらを含めて堆積土は9層に分層でき、すべて人為堆積である。

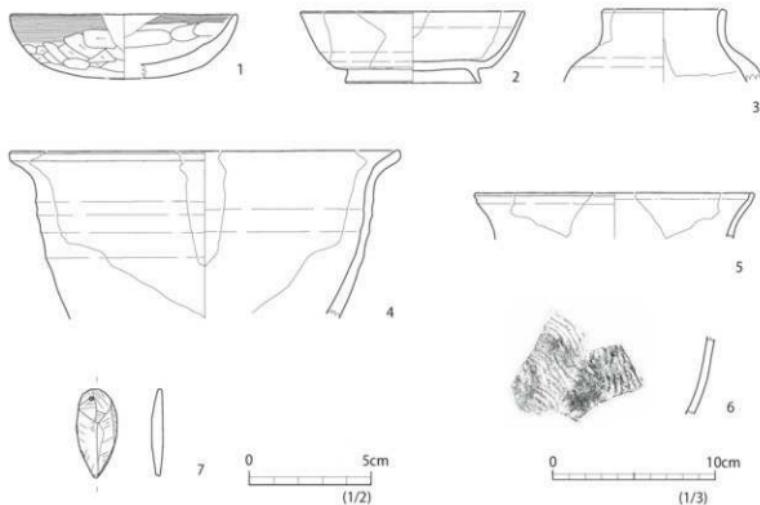
遺物は第49図に図示した1の須恵器捏鉢、2・3の壺、4の不明須恵器、5の土製品の羽口のほか、非ロクロ成形の土師器壺・高台・甕、ロクロ成形の土師器壺、須恵器壺・蓋・甕が出土している。図示していないロクロ成形の土師器壺は、静止糸切後に底部外縁を弱い回転ヘラケズリを施している。図示した遺物の年代観などから、本遺構は8世紀後半頃の年代観が考えられる。



SK09 土層注記

| 番号 | 土色 | 土質 | 備考 |
|----|-----|-----------------|--|
| 1 | 暗褐色 | (10YR3/4) 粘質シルト | 微化物・後土粒を少量含む。褐色・黒褐色粘土の小ブロックを多量に含む。しまり強い。粘性あり。 |
| 2 | 暗褐色 | (10YR3/4) シルト | 微化物・後土粒を少量含む。褐色・黒褐色・灰白色火山灰を少量含む。しまり強い。粘性ややあり。 |
| 3 | 暗褐色 | (10YR3/4) 粘質シルト | 微化物・後土粒を少量含む。褐色・黒褐色粘土の小ブロックを多量に含む。しまり強い。粘性あり。 |
| 4 | 暗褐色 | (10YR3/4) 粘質シルト | 微化物・後土粒を少量含む。褐色・黒褐色粘土の小ブロックを少量含む。しまり強い。粘性なし。 |
| 5 | 暗褐色 | (10YR3/4) 粘質シルト | 微化物・後土粒を少量に含む。褐色・黒褐色粘土の小ブロックを少量含む。しまり強い。粘性あり。 |
| 6 | 暗褐色 | (10YR3/3) 粘質シルト | 微化物・後土粒・灰白色火山灰を少量含む。褐色粘土の小ブロックを多量に含む。しまり強い。 |
| 7 | 暗褐色 | (10YR3/3) 粘質シルト | 微化物・灰白色火山灰を少量含む。褐色・黒褐色粘土の小ブロックを少量に含む。しまり強い。 |
| 8 | 黒褐色 | (10YR3/2) 粘質シルト | 後土粒を少量含む。褐色・黒褐色粘土の小ブロックを少量含む。しまり強い。粘性なし。 |
| 9 | 黒褐色 | (10YR3/2) シルト | 微化物を少量含む。褐色粘土を塊状に含む。黒褐色粘土の小ブロックを少量に含む。しまり強い。 |
| 10 | 黒褐色 | (10YR3/2) 粘質シルト | 微化物・後土粒を少量含む。褐色粘土の小ブロックをやや多量に含む。しまり強い。粘性ややあり。 |
| 11 | 暗褐色 | (10YR3/3) 粘質シルト | 微化物・褐色・黒褐色粘土を少量含む。褐色粘土の小ブロックを少量に含む。しまり強い。粘性なし。 |
| 12 | 黒褐色 | (10YR3/2) 粘質シルト | 微化物・褐色・黒褐色粘土の小ブロックを少量含む。褐色粘土の小ブロックを多量に含む。 |

第51図 SK09



第 52 図 SK05 出土遺物

【SK05】(第 47・50 図)

I 区東部に位置する。中央付近で掘り下げを行っている。SK02 と重複関係にあり、これより古い。本遺構の東側は調査区外へ広がるために平面形状は不明であるが、検出範囲から推定すると円形、もしくは梢円形を呈するとみられる。確認した範囲での規模は長軸 5.06 m、短軸 2.65 m 以上を測る。断面形状は逆台形であり、確認面からの深さは 148 cm を測る。堆積土の中で特に 1・2 層では大量の炭化物と焼土粒とともに、土師器・須恵器などの遺物が多く出土している。これらを含めて堆積土は 10 層に分層でき、1・2 層が人為堆積、そのほかは自然堆積である。

遺物は第 52 図に図示した 1 の非クロコ成形土師器壺、2 の須恵器高台壺、3 の短頸壺、4・5 の鉢、6 の甕、7 の石製模造品のほか、非クロコ成形の土師器甕・須恵器壺・蓋・甕・短頸壺が出土している。このうち 1 の壺は関東系土師器である。5・6 は極めて硬質であり、また器壁は薄い。図示した遺物の年代観では 2 は 8 世紀半ばから後半頃の年代観が考えられるが、下層から出土した 1 の年代観から本遺構は 8 世紀前半頃と考えられる。

【SK09】(第 51 図)

I 区北部東寄りに位置する。中央付近の一部で掘り下げを行っている。SD07、SK07 と重複関係に

| 番号 | 細部・層位 | 種別 | 基種 | 外 面 | | 内 面 | 残 有 | 法面(cm) | | 可見範囲 |
|----|--------|-----|----|----------|----|------------|-------------------|--------|----|------|
| | | | | 長軸 | 短軸 | | | 口径 | 底径 | |
| 1 | 北側・堆積土 | 土師器 | 壺 | ヨコナダーハケメ | | ヨコナダーハラナダ | 口縁～体部破片 (15.2) | — | — | |
| 2 | 北側・堆積土 | 須恵器 | 高盤 | ロクロナダーナダ | | ロクロナダーハラナダ | 脚部破片 | — | — | 10-9 |

第53図 SK09出土遺物

あり、これらより古い。本遺構の北西側は調査区外へ広がるために平面形状は明確ではないが、検出範囲から推定すると円形を呈するとみられる。確認した範囲での規模は長軸4.66m、短軸3.55m以上を測る。確認面から104cmまで掘り下げを行ったが、調査中の大雨によって壁面が崩落する危険性が生じたことから底面までの完掘は断念した。このため断面形状については不明であるが、前述のSK05と同様に逆台形である可能性が高いとみられる。堆積土は12層に分層でき、1~3・6層が人為堆積、そのほかは自然堆積である。

遺物は第53図に図示した1の非ロクロ成形土師器壺、2の須恵器高盤のほか、非ロクロ成形の土師器壺・壺、須恵器壺・高台壺・壺・蓋が出土している。2の高盤の脚部は内面が非常に厚いものである。図示していない土師器壺の口唇部は玉縁状である。また須恵器蓋はカエリを有するものである。これらの遺物の年代観から、本遺構は7世紀後半頃の年代観が考えられる。

第6表 大型土坑属性表

| 遺構名 | 平面形 | 断面形 | 規格(cm) | | | 堆積土の状況 | 遺 物 | 備 考 |
|------|------|-----|--------|-------|-------|-----------------|---|--------------------------------|
| | | | 長軸 | 短軸 | 深さ | | | |
| SK01 | 調丸方形 | 逆台形 | 332 | 320 | 90 | 人為 | 非ロクロ成形土師器壺・壺、須恵器壺・壺 | SI04、SD08より新底面に貼床、根太木痕、杭跡 |
| SK02 | 円形 | 逆台形 | 268 | 258 | 68 | 人為 | 非ロクロ成形土師器壺・高壺・蓋、非ロクロ成形土師器壺・須恵器壺・蓋・接鉢・壺、不明製品、土製品羽口 | SI04、SK05より新5・6層に大量の炭化物・燒土粒を含む |
| SK05 | 円形? | 逆台形 | 506 | 265 | 148 | 1・2は人為、その他は自然堆積 | 非ロクロ成形土師器壺・壺、須恵器壺・壺、壺 | SK02より古 |
| SK09 | 不明 | — | 466 | (355) | (104) | 1・3・9は人為、その他は自然 | 非ロクロ成形土師器壺・壺・蓋、須恵器壺・高台壺・壺・蓋、高盤・壺 | SD07、SK10より古 |

f. 溝跡

【SD01】(第6・54図)

I区西部に位置する南北溝である。中央より南側で掘り下げを行っている。SI01、小溝状遺構群と重複関係にあり、これらより新しい。本遺構の北側、及び南側は調査区外へさらに延びるが、調査区内での総検出長は14.80mで、主軸方位は真北から3°西へ傾く。上幅1.34m前後、底面幅は0.32m前後であり、断面形状は西側が緩やかに立ち上がる逆台形である。底面は比較的平坦であるが、緩やかに南側へ傾斜している。なお、底面には溝を開削した際の工具痕がみられることから、短期間にうちに大部分を埋め戻した可能性がある。堆積土は11層に分層でき、すべて人為堆積である。

遺物は第55図に図示した1の非クロクロ成形土師器壺、2~4の須恵器壺、5の小型甕、6の壺のほか、非クロクロ成形の土師器高壺、ロクロ成形の土師器壺・甕、須恵器壺・鉢・蓋が出土している。2の須恵器外底面には「土」とみられる墨書があり、県内では仙台市五本松窯跡（仙台市教委1987）出土の記号瓦・多賀城跡出土の文字瓦・墨書土器（宮多賀城研1979・1980）に類例が求められる（註2）。また本遺跡内に存在が推定される契機となった「玉前剣」名が記された木簡にも同様の使用例が認められる（宮多賀城研1985・2013）。なお、図示した須恵器壺は回転糸切のち未調整が多いが、図示を見送ったものにはヘラギリのち手持ちヘラケズリが施されるもの、静止糸切で未調整のもの、回転糸切後に手持ちヘラケズリを施すものなども含まれている。図示した遺物の年代観から、本遺構は9世紀後半頃の年代観が考えられる。

【SD02】(第6・54図)

I区中央北部に位置する溝である。SI02、SD03、小溝状遺構群と重複関係にあり、これらより新しい。本遺構の北側は調査区外へさらに延びるが、調査区内での総検出長は7.24mである。東側から中間ほどで緩やかに屈曲して北へ向かうという弧状を呈するため、主軸方位の計測はできない。上幅0.42m前後、底面幅は0.30m前後であり、断面形状は皿形である。底面は比較的平坦であるが、緩やかに北側へ傾斜している。堆積土は1層であり、自然堆積である。

遺物は非クロクロ成形の土師器甕、ロクロ成形の土師器壺、須恵器壺・甕が出土しているが、小片のため図示できなかった。この中でロクロ土師器の壺は回転糸切後に底部全面でヘラケズリを施しているものが含まれていることから、8世紀末葉～9世紀前半頃の年代観が考えられる。

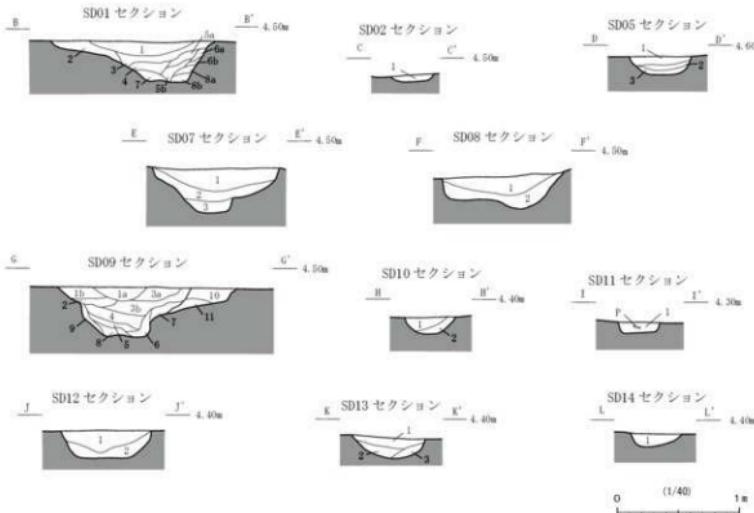
【SD03・04・05】(第6・54図)

I区西部に位置する南北溝である。部分的に途切れるが、走方向や規模・堆積土が共通しており、本来は一連の遺構として機能していた可能性が高い。小溝状遺構群とピット2口と重複関係にあり、小溝状遺構群よりは新しく、ピットより古い。本遺構の北、及び南側は調査区外へさらに延びるが、調査区内での総検出長は22.70mで、主軸方位は真北から5°西へ傾く。上幅0.40～0.66m前後、底面幅は0.28～0.45m前後であり、断面形状はU字状である。底面は比較的平坦であるが、緩やかに南側へ傾斜している。堆積土は最も多い箇所では3層に分層でき、すべて自然堆積である。

遺物は第55図7に図示した須恵器壺が出土したのみである。図示した遺物の年代観から、本遺構は8世紀末～9世紀初頭頃の年代観が考えられる。

【SD07】(第6・54図)

I区北東部に位置する東西溝である。SK09、SD08と重複関係にあり、これらより新しい。本遺構の東側、及び西側は調査区外へさらに延びるが、調査区内での総検出長は5.18mで、主軸方位は真



SD01 土層注記

| 層No. | 土色 | 土質 | 備考 |
|------|-----|-----------|---|
| 1 | 黒褐色 | (10YR3/2) | 粘質シルト 炭化物。にがい黄褐色シルト粒を多量に含む。しまりやや強い。 |
| 2 | 黒色 | (10YR2/1) | 粘質シルト 炭化物分を視認に多く混入する。しまりやや強い。 |
| 3 | 褐色 | (10YR4/1) | 粘質シルト 炭化物。にがい黄褐色シルト粒を少量含む。しまりやや強い。 |
| 4 | 褐色 | (10YR4/1) | 粘質シルト 炭化物を少量含む。炭化物分を視認に多く含む。しまりやや強い。 |
| 5a | 黄灰色 | (2,5Y5/1) | 粘質シルト 炭化物分をやや多量に含む。しまりやや弱い。 |
| 5b | 黄灰色 | (2,5Y5/1) | 粘質シルト 炭化物分を多量に含む。しまりやや弱い。 |
| 6a | 褐色 | (10YR5/1) | 粘質シルト 炭化物分をやや多量に含む。しまりやや弱い。 |
| 6b | 褐色 | (10YR5/1) | 粘質シルト 炭化物分を少量含む。しまりやや弱い。粘性強い。 |
| 7 | 灰色 | (5Y5/1) | 粘質砂 黄褐色・黒褐色粘土の小ブロックをやや多量に含む。しまりやや弱い。 |
| 8a | 黄褐色 | (2,5Y5/1) | 粘質砂 にがい黄褐色粘土小ブロックをやや多量含む。しまりやや弱い。 |
| 8b | 黒褐色 | (2,5Y5/1) | 粘質砂 にがい黄褐色粘土小ブロックを多量に含む。しまりやや弱い。 |

SD02 土層注記

| 層No. | 土色 | 土質 | 備考 |
|------|-----|-----------|---|
| 1 | 黒褐色 | (10YR2/2) | シルト 炭化物・焼土粒を極く少量含む。しまりやや弱い。保水性・粘性なし。 |

SD05 土層注記

| 層No. | 土色 | 土質 | 備考 |
|------|-----|-----------|---|
| 1 | 黒褐色 | (10YR3/1) | 粘土 褐色粘土の小ブロックをやや多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |
| 2 | 黒褐色 | (10YR3/2) | 粘土 褐色粘土の小ブロックを少量含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |
| 3 | 暗褐色 | (10YR3/3) | 粘土 褐色粘土の中ブロックを多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性あり。 |

SD07 土層注記

| 層No. | 土色 | 土質 | 備考 |
|------|-----|-----------|---|
| 1 | 暗褐色 | (10YR3/3) | 砂質シルト 黒褐色粘土の小ブロックをやや多量に含む。にがい黄褐色シルトを微量含む。しまり強い。粘性なし。 |
| 2 | 暗褐色 | (10YR3/3) | 粘質シルト 黒褐色粘土・にがい黄褐色シルトの小ブロックを少量含む。しまり強い。粘性ややあり。 |
| 3 | 暗褐色 | (10YR3/3) | 砂質シルト 褐色粘土の小ブロックを多量に含む。しまり強い。粘性あり。 |

SD08 土層注記

| 層No. | 土色 | 土質 | 備考 |
|------|-----|-----------|--|
| 1 | 暗褐色 | (10YR3/4) | 砂質シルト 黒褐色粘土の小ブロックをやや少量に含む。しまり強い。粘性なし。 |
| 2 | 暗褐色 | (10YR3/3) | 粘質シルト 黒褐色粘土を少量含む。黒褐色・褐色粘土の小ブロックを多量に含む。しまり強い。粘性ややあり。 |

第54図 溝跡土層断面図

第Ⅲ章 調査成果

SD09 土層注記

| 層No. | 土色 | 土質 | 備考 |
|------|-----|-----------|--|
| 1a | 暗褐色 | (10YR3/3) | 粘質シルト 炭化物・堆土粒を少量含む。灰白色・褐色粘土粒を多量に含む。しまりやや強い。塑性・粘性ややなし。 |
| 1b | 暗褐色 | (10YR3/3) | 粘質シルト 炭化物を少量含む。褐色粘土粒を少量含む。しまりやや強い。塑性・粘性ややなし。 |
| 2 | 黒褐色 | (10YR3/2) | 粘質シルト にぶい褐色粘土の大ブロックを多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |
| 3a | 黒褐色 | (10YR3/2) | 粘質シルト 堆土粒を少量含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |
| 3b | 黒褐色 | (10YR3/2) | 粘質シルト 炭化物・褐色粘土粒を少量含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |
| 4 | 黒褐色 | (10YR2/2) | 粘質シルト 炭化物・褐色粘土粒を少量含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |
| 5 | 黒褐色 | (10YR3/2) | 砂質シルト 褐色粘土の小ブロックをやや多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |
| 6 | 黒褐色 | (10YR3/1) | 粘土 褐色粘土の小ブロックを多量に含む。しまり弱い。塑性・粘性あり。 |
| 7 | 黒褐色 | (10YR3/1) | 粘土 炭化物を少量含む。褐色粘土の中ブロックを多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性あり。 |
| 8 | 黒褐色 | (10YR3/1) | 粘土 褐色粘土の大ブロックを多量に含む。しまり弱い。塑性・粘性あり。 |
| 9 | 黒褐色 | (10YR2/2) | 粘土 褐色粘土の中ブロックをやや多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |
| 10 | 黒褐色 | (10YR2/3) | 粘質シルト 褐色粘土の小・中ブロックをやや多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |
| 11 | 黒褐色 | (10YR2/2) | 粘質シルト 褐色粘土の中・大ブロックをやや多量に含む。しまりやや強い。塑性・粘性ややあり。 |

SD10 土層注記

| 層No. | 土色 | 土質 | 備考 |
|------|-----|-----------|---|
| 1 | 黒褐色 | (10YR3/2) | 粘質シルト 褐色粘土粒の中ブロックをやや多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |
| 2 | 黒褐色 | (10YR3/2) | 粘質シルト 褐色粘土の大ブロックを多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |

SD11 土層注記

| 層No. | 土色 | 土質 | 備考 |
|------|----|-----------|---|
| 1 | 黒色 | (10YR2/1) | 粘質シルト 褐色粘土粒を少量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややなし。 |

SD12 土層注記

| 層No. | 土色 | 土質 | 備考 |
|------|----|-----------|---|
| 1 | 黒色 | (10YR2/1) | 粘土 褐色粘土粒を下方にやや少量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性あり。 |

SD13 土層注記

| 層No. | 土色 | 土質 | 備考 |
|------|-----|-----------|---|
| 1 | 黒色 | (10YR2/1) | 粘土 褐色粘土の小・中ブロックをやや多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |
| 2 | 黒色 | (10YR2/1) | 粘土 褐色粘土の中ブロックをやや多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |
| 3 | 黒褐色 | (10YR3/1) | 粘土 褐色粘土の中ブロックを多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |

SD14 土層注記

| 層No. | 土色 | 土質 | 備考 |
|------|----|-----------|--|
| 1 | 黒色 | (10YR2/1) | 粘土 褐色粘土粒を多量に含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |
| 2 | 褐色 | (10YR4/4) | 粘土 黒褐色粘土シルトの小・中ブロックをやや多量含む。しまりやや弱い。塑性・粘性ややあり。 |

北から 89° 西へ傾く。上幅 1.04 m 前後、底面幅は 0.25 m 前後であり、断面形状は南側が 1 段低くなる不定形を呈する。底面は比較的平坦であるが、緩やかに西側へ傾斜している。底面の一部には溝を開削した際の工具痕がみられたことから、SD01 同様に短期間のうちに大部分を埋め戻した可能性がある。堆積土は 3 層に分層でき、すべて人為堆積である。なお、本遺構は第 1 次調査 SD12、第 3 次調査 SD14 の延長線上に存在することから、同一遺構である可能性が高い。

遺物は非ロクロ成形の土師器甕、ロクロ成形の土師器甕が出土しているが、小片のため図示できなかった。しかしながら、ロクロ土師器甕の出土から本遺構は 8 世紀後半以降の年代観が考えられる。

【SD08】(第 6・54 図)

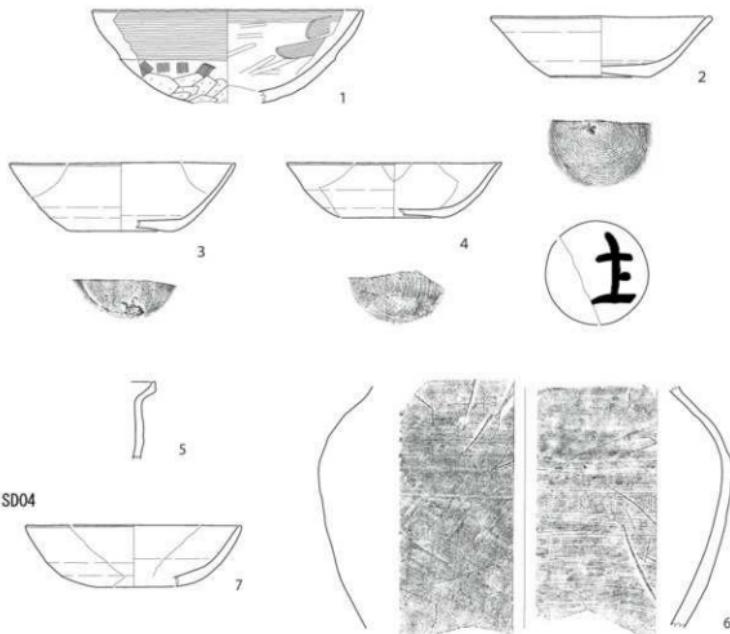
I 区北東部に位置する南北溝である。SI04、SK02、SD07 と重複関係にあり、SK02、SD07 より古く、SI04 より新しい。総検出長は 6.00 m で、主軸方位は真北から 14° 東へ傾く。上幅 0.63 m 前後、底面幅は 0.49 m 前後であり、断面形状は不定形を呈する。底面は比較的平坦であるが、中央付近が窪んでいる。堆積土は 2 層に分層でき、すべて人為堆積である。

遺物は出土していないが SI04、SK01、SD07 との重複関係から 8 世紀前半頃の年代観が考えられる。

【SD09】(第 7・54 図)

II 区中央部に位置する東西溝である。SI19、SD12 と重複関係にあり、これらより新しい。本遺構

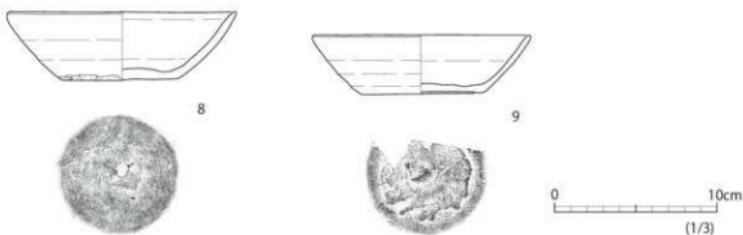
SD01



SD04



SD09



| 番号 | 断面・部位 | 種別 | 器種 | 外 面 | | 種 有 | 法量(cm) | | 写真回数 |
|----|-------------|-----|-----|------------------------------------|----|-----------|---------|--------|--------------|
| | | | | 横径 | 縦径 | | 横径 | 縦径 | |
| 1 | SD01南側・下層埋土 | 土師器 | 环 | 有段、ヨコナダ・ハケメー・ヘラケズリ、ヨコナダ・ヘラナダ・ヘラミガキ | | 全像の1/4 | (16.7) | — | 5,7 |
| 2 | SD01南側・下層埋土 | 瓦芯器 | 环 | ヨクロナダ、追加回転木切り離し後無調整 瓦書 法面「土」 | | 全像の1/2 | 13.6 | 6.0 | 3,7 10-5・6 |
| 3 | SD01南側・埴土 | 瓦芯器 | 环 | ヨクロナダ、追加回転木切り離し後無調整 | | 全像の1/2 | (13.8) | (6.4) | 4,2 |
| 4 | SD01南側・埴土 | 瓦芯器 | 环 | ヨクロナダ、追加回転木切り離し後無調整ナダ調整 | | 全像の1/6 | (13.2) | (6.5) | 3,4 |
| 5 | SD01南側・埴土 | 瓦芯器 | 小型環 | ヨクロナダ | | 口縁部破片 | — | — | — |
| 6 | SD01南側・下層埋土 | 瓦芯器 | 直 | ヨクロナダ、平行切口目、ハケメー・ハケズリ・ハナダ | | ヘラナダ・ハケメー | — | — | — |
| 7 | SD04・埴土 | 瓦芯器 | 环 | ヨクロナダ、追加回転木切り離し後ナダ調整 | | ヨクロナダ | 全像の1/12 | (13.3) | (5.4) 3,9 |
| 8 | SD09西側・埴土 | 瓦芯器 | 环 | ヨクロナダ・ハケメー、追加回転木切り離し後ヘラナダ調整 | | ヨクロナダ | 全像の4/5 | 14.1 | 7.1 4,2 10-4 |
| 9 | SD09西側・埴土 | 瓦芯器 | 环 | ヨクロナダ、追加回転木切り離し後ナダ調整 | | ヨクロナダ | 全像の2/3 | 13.4 | 7.5 3,6 10-7 |

第55図 SD01-04-09出土遺物

の東側、及び西側は調査区外へさらに延びるが、調査区内での総検出長は 11.56 mで、主軸方位は真北から 69° 東へ傾く。上幅 1.02 m前後、底面幅は 0.40 m前後であり、断面形状は南側が 1段低くなる不定形を呈する。底面は比較的平坦であるが、緩やかに西側へ傾斜している。底面の一部には溝を開削した際の工具痕がみられたことから、SD01 同様に短期間のうちに大部分を埋め戻した可能性がある。堆積土は 13 層に分層でき、すべて人為堆積である。

遺物は第 55 図 8・9 に図示した須恵器壺のほか、ロクロ土師器壺、須恵器壺・甕が出土している。8・9 はともに底部へラギリ後にヘラナデ・ナデ調整が施されているが、図示を見送った遺物には回転糸切後に体部下端や底部に手持ちヘラケズリを施したものもみられる。ロクロ土師器壺では底部回転糸切後にヘラケズリが施されるものと未調整のものが含まれる。図示した遺物などの年代観から、本遺構は 8 世紀後半～9 世紀前半頃の年代観が考えられる。

【SD10】(第 7・54 図)

II 区中央部北寄りに位置する東西溝である。SD11 と重複関係にあり、これより新しい。また東側の一部を擾乱により失う。本遺構の西側は調査区外へさらに延びるが、調査区内での総検出長は 8.50 mで、主軸方位は真北から 85° 東へ傾く。上幅 0.48 m前後、底面幅は 0.35 m前後であり、断面形状は U 字状である。底面は比較的平坦であるが、緩やかに西側へ傾斜している。堆積土は 2 層に分層でき、すべて自然堆積である。

遺物は非ロクロ成形の土師器甕が出土しているが、小片のため図示できなかった。本遺構の年代観は、後述する SD11 の年代観から 9 世紀前半以降と考えられる。

【SD11】(第 7・54 図)

II 区東北部から西側中央部に延びる南北溝である。SI19、SD10・13・14 と重複関係にあり、SD10 より古く、SI19、SD13・14 より新しい。本遺構の北側、及び南側は調査区外へさらに延びるが、調査区内での総検出長は 18.00 mで、主軸方位は真北から 21° 西へ傾く。上幅 0.50 m前後、底面幅は 0.28 m前後であり、断面形状は北側では皿形、南側では箱形を呈する。底面では凹凸がみられるが、全体としては緩やかに北側へ傾斜している。なお、底面の凹凸については当初材木塀の可能性を考えたが、調査範囲内では明確な抜取痕跡は確認できていない。堆積土は北側の土層断面図を作成した箇所では 1 層のみであるが、南側の觀察箇所では 3 層に分層でき、すべて人為堆積である。

遺物は非ロクロ成形の土師器壺・甕、ロクロ成形の土師器壺、須恵器壺・短頸壺・甕が出土しているが、いずれも小片のため図示できなかった。なお、図示は見送ったがロクロ土師器壺は内弯気味に立ち上がり、体部下半と底部外縁をヘラケズリしたものであることから、本遺構は 8 世紀末葉～9 世紀前半頃の年代観が考えられる。

【SD12】(第 7・54 図)

II 区中央部南寄りに位置する南北溝である。SD09 と重複関係にあり、これより古い。確認した総検出長は 4.30 mで、主軸方位は真北から 27° 西へ傾く。上幅 0.90 m前後、底面幅は 0.70 m前後であり、断面形状は逆台形である。底面は比較的平坦であるが、中央付近が窪んでいる。堆積土は 2 層に分層でき、すべて自然堆積である。

遺物は出土していない。

【SD13】(第 7・54 図)

II 区中央部北寄りに位置する東西溝である。SI19、SD11 と重複関係にあり、SD11 より古く、SI19

より新しい。本遺構の西側は調査区外へさらに延びるが、調査区内での総検出長は4.20mで、主軸方位は真北から89°東へ傾く。上幅0.60m前後、底面幅は0.44m前後であり、断面形状はU字状である。底面は比較的平坦であるが、緩やかに西側へ傾斜している。堆積土は3層に分層でき、すべて人為的埋土である。

遺物は非ロクロ成形の土師器甕、須恵器甕が出土しているが、いずれも小片のため図示できなかつた。

【SD14】(第7・54図)

II区中央部北寄りに位置する東西溝である。SI19、SD11と重複関係にあり、SD11より古く、SI19より新しい。本遺構の西側は調査区外へさらに延びるが、調査区内での総検出長は3.70mで、主軸方位は真北から75°東へ傾く。上幅0.38m前後、底面幅は0.25m前後であり、断面形状はU字状である。底面は比較的平坦であるが、緩やかに西側へ傾斜している。堆積土は1層で、人為的埋土である。

遺物は非ロクロ成形の土師器甕が出土しているが、小片のため図示できなかつた。

第7表 溝跡属性表

| 遺構名 | 検出長 (m) | 断面形 | 規模(cm) | | | 方向 | 堆積土 | 出土遺物 | 備考 |
|-------------|------------|-----------------|--------|-------|----|-----------|-------|--------------------------------------|--|
| | | | 上幅 | 下幅 | 深さ | | | | |
| SB01 | 14.80 | 西側が緩やかに立ち上がる逆台形 | 134 | 32 | 32 | N-3-W | 人為的埋土 | 非ロクロ土師器坏・窓坏、ロクロ成形土師器坏・甕、須恵器坏・鉢・蓋・甕・甌 | SI01、小溝状遺構群より新底面に掘削時の工具痕 |
| SB02 | 7.20 | 直形 | 42 | 30 | 8 | 私状のため計測不可 | 人為的埋土 | 非ロクロ成形土師器甕、ロクロ成形土師器甕、須恵器坏・甕 | SI02、SD03より新 |
| SB03 ~05 | 22.70 | U字状 | 30~68 | 28~45 | 16 | N-5-W | 自然堆積 | 須恵器坏 | 小溝状遺構群より新 P76より古 |
| SB07 | 5.18 | 南側が1段低くなる不定形 | 104 | 25 | 36 | N-89-W | 人為的埋土 | 非ロクロ成形土師器甕、ロクロ成形土師器甕 | SK09、SD08より新 底面に掘削時の工具痕 |
| SB08 | 6.00 | 不定形 | 63 | 49 | 26 | N-14-E | 人為的埋土 | なし | S104より新 SB01、SD07より古 |
| SB09 | 11.56 | 南側が1段低くなる不定形 | 102 | 40 | 39 | N-69-E | 人為的埋土 | ロクロ成形土師器坏、須恵器坏・甕 | SI19、SD12より新 底面に掘削時の工具痕 |
| SB10 | 8.50 | U字状 | 48 | 35 | 14 | N-85-E | 自然堆積 | 非ロクロ成形土師器甕 | SD11より新 |
| SB11 | 18.00 | 直形 | 50 | 28 | 20 | N-21-W | 人為的埋土 | 非ロクロ成形土師器坏・甕、ロクロ成形土師器坏、須恵器坏・短頸甕・甌 | SI19、SD13・14より新 SD10より古 底面に掘削時の工具痕 |
| SB12 | 4.32 | 逆台形 | 91 | 69 | 22 | N-27-W | 自然堆積 | なし | SD09より古 |
| SB13 | 4.26 | U字状 | 60 | 44 | 16 | N-89-E | 人為的埋土 | 非ロクロ成形土師器甕、須恵器甕 | S119より新 SD11より古 |
| SB14 | 3.70 | U字状 | 38 | 25 | 11 | N-75-E | 人為的埋土 | 非ロクロ成形土師器甕 | S119より新 SD11より古 |

g. 土坑

【SK10】(第 51・56 図)

I 区北部に位置する。SK09 と重複関係にあり、これより新しい。平面形状は梢円形で、規模は長軸 0.98 m、短軸 0.54 m を測る。断面形状は不定形であり、確認面からの深さは 26 cm を測る。本遺構の東・西壁面は強い被熱により赤変し、底面においても被熱が認められる。また堆積土中には大量の焼土粒・炭化物が含まれる。

遺物は第 57 図 1 に図示した土師器壺が出土している。内面黒色処理前のものであることから、本遺構で焼成された可能性も考慮できる。図示した遺物の年代観から、本遺構は 9 世紀前半頃の年代観が考えられる。



SK10 土層注記

| 層番 | 土色 | 土質 | 備考 |
|----|------------------|-------|---------------------------|
| 1 | 黒褐色 (10YR3/2) | 粘質シルト | 炭化物・焼土粒を多量含む。しまり強い。粘性やあり。 |
| 2 | 暗褐色 (10YR3/3) | 砂質シルト | 炭化物・焼土粒を大量に含む。しまり強い。粘性なし。 |

第 56 図 SK10 土層断面図



| 番号 | 断面・層位 | 種別 | 器種 | 外 面 | | 内 面 | | 現 在 | 法量(cm) | | | 写真図版 |
|----|-------|-----|----|-------|----|-----|------------|-------|--------|-----|-----|------|
| | | | | 長軸 | 短軸 | 深さ | 口径 | | 口径 | 器高 | | |
| 1 | 底面直上 | 土師器 | 壺 | ロクロナゲ | | | ロクロナゲヘラミガキ | 全体3/4 | 13.6 | 7.5 | 3.9 | 10-6 |

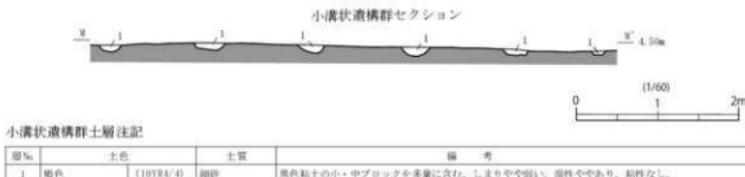
第 57 図 SK10 出土遺物

第 8 表 土坑属性表

| 遺構名 | 平面形 | 断面形 | 規格(cm) | | | 堆積土の状況 | 遺 物 | 備 考 |
|------|-----|-----|--------|----|----|--------|-----------|----------------------|
| | | | 長軸 | 短軸 | 深さ | | | |
| SK10 | 長円形 | 不定形 | 98 | 54 | 26 | 人為 | ロクロ成形土師器壺 | SK09 上り新東・西壁を中心に強く被熱 |
| | | | | | | | | |

h. 小溝状遺構群（第6・58図）

I 区北西部を中心として存在する。重複するすべての遺構より本遺構が古い。東西方向のものが6条あり、その後に南北方向のものが7条みられる。溝幅の規模は、上幅40～25cm、下幅20～15cm、確認面からの深さは10～5cmを測る。東西列の主軸方位は真北から66°東へ、南北列は6°西へ傾く。遺物は非クロロ成形の土師器高杯や甕が出土しているが、図示はできなかった。このうち高杯については脚部の特徴から南小泉式の可能性がある。第3次調査でも同様の遺構群が認められ、そこでも南小泉式の土器が出土していることから、本遺構は古墳時代中期頃に営まれた畑作の痕跡であるとみられる。

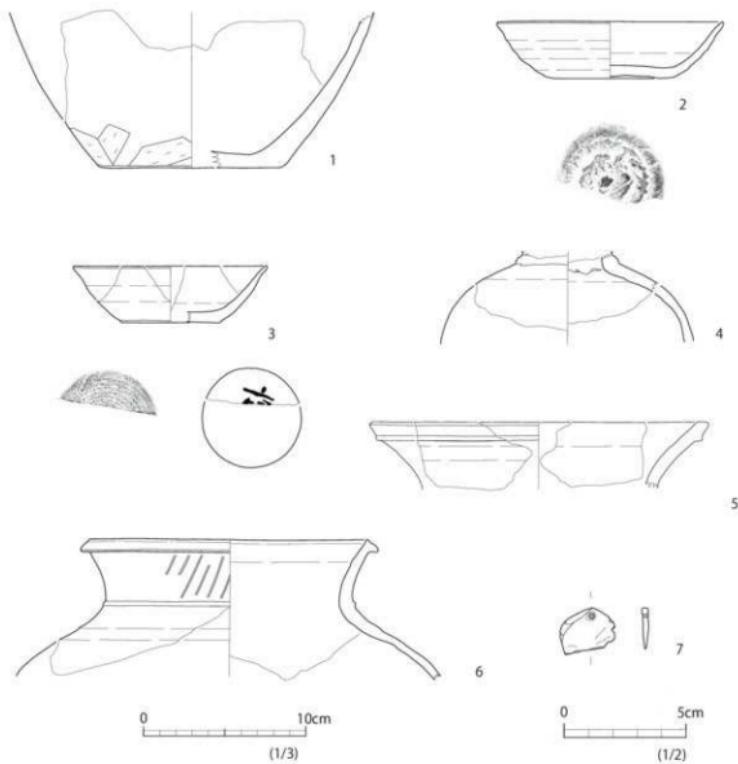


第58図 小溝状遺構群土層断面図

i. その他の遺物

前述の遺構出土遺物のほか、掘削時や精査時、そして遺物包含層の掘り下げ時にも土師器・須恵器が多数出土している。また、図示はしていないが弥生土器や砥石などの石製品も少量出土している。以下に特記すべき点について述べる。

1の土師器の鉢はロクロ成形で作られたものである。内外面とも摩滅しており明確な調整痕跡を看取できる箇所は少ないが、体部下半ではヘラケズリ調整が施される。底部外面は磨滅が著しく、切り離し技法や調整痕跡は確認できない。2の須恵器杯は器高がやや低く、また口径・底径とも比較的大きい。底部は回転ヘラギリ後に無調整である。3の須恵器杯は2と比べて小型であるが、器高が高いものである。底部は回転糸切後無調整である。なお、底部外面には墨書きがみられるが、文字の判読はできなかった。4は須恵器長颈瓶である。頸部と胴部の接合面では補強のためのリング状の突帯が巡り、胎土には溶解した黒雲母がみられることから会津若松市に存在する大戸窯跡の製品であると考えられる。5は中型の甕であり、口唇部では面取りがなされている。また、口縁部下には突帯が1条巡る。6の甕では内外面ともロクロナデが施され、タキヤや当具痕はみられない。口縁部から肩部にかけては降灰による自然釉が付着している。7は石製模造品であり、剣形を呈するとみられる。



| 番号 | 組合・層位 | 種別 | 器種 | 外 面 | 内 面 | 性 有 | 法量(cm) | | | 写真図版 |
|----|--------|-------|-----|---|------------|-------|--------|-------|-----|------|
| | | | | | | | 口径 | 底径 | 高さ | |
| 1 | I区表土層削 | 土器部 | 鉢 | ヘラケズリ | ヘラミガキ・黑色処理 | 追加破片 | — | 11.2 | — | |
| 2 | I区表土層削 | 重然器 | 坪 | ロクロナデ・凹面・へり切り無調整 | ロクロナデ | 全体1/2 | 13.9 | (7.8) | 3.5 | |
| 3 | I区表土 | 重然器 | 坪 | ロクロナデ・凹面未切・無調整 | ロクロナデ | 全体1/4 | 11.9 | 9.6 | 1.5 | |
| 4 | I区表土層削 | 重然器 | 長頸瓶 | ロクロナデ・瓶腹下端にリング | ロクロナデ | 追加破片 | — | — | — | |
| 5 | I区表土層削 | 重然器 | 甕 | ロクロナデ・口縁面下端に突起1箇 | ロクロナデ | 口縁面破片 | (26.7) | — | — | |
| 6 | I区表土層削 | 重然器 | 甕 | ロクロナデ・瓶腹ヘラ止め後ロクロナデ | ロクロナデ | 口縁面破片 | (18.2) | — | — | |
| 7 | I区表土層削 | 石製穀山品 | 削形? | 表面・裏面共に剥離面で、側面東部のみ擦面が残る。厚さ4mm、脊孔径1.4mm。石質粘板岩。穿孔部分のみ | | | | | | |

第59図 その他の遺物

第Ⅳ章 考察

1. 遺物について

・土器について（第60図）

古墳時代後期から奈良時代にかけての土器研究・編年に関しては、辻秀人氏を研究代表者とする広域編年がある（辻編2007）。ここでは主として広域編年の一部として村田晃一氏が行った宮城県中・南部での研究成果（村田2007・以下、「村田A編年」と表記）をもとに見ていく。同様に平安時代については多賀城、及び周辺遺跡も視野に入れた村田晃一氏による編年（村田1994・以下、「村田B編年」と表記）に導かれるながら当遺跡の出土遺物の特徴について述べる。なお、今回の調査における出土遺物についてはI～III期に大別し、I期についてはさらにa・b・cの小期を設定する。

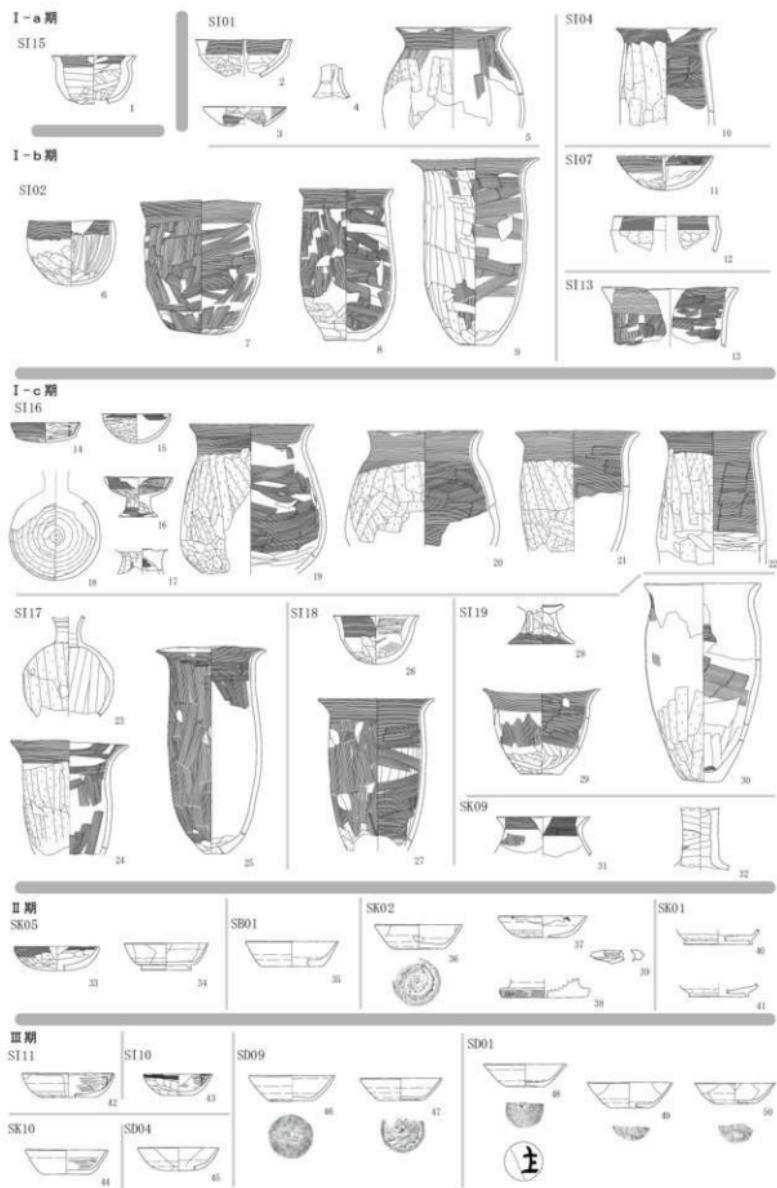
I-a期としてはSI15から出土した1の土師器壺がある。底部は丸底で、口縁が強く外反する器形である。類例は山元町合戦原遺跡などで見られ、村田A編年の1・2段階に位置付けられることから、6世紀前半頃と考えられる。

I-b期ではSI01・02・04・07・13出土資料が相当する。2の土師器壺は口縁部下に強い段を有するが、体部のケズリはこの段まで及ばない。8の土師器壺は胴部下半で最大径を測るものである。これらの特徴は栗廻式期のうちでも古い様相を呈しており、村田A編年の2・3段階に位置付けられ、また4の須恵器高壺はTK209型式期とみられることから、6世紀末葉～7世紀前半頃と考えられる。

I-c期ではSI16・17・18・19とSK09出土資料が相当する。15の土師器壺は関東系土師器であり、仙台市郡山遺跡などで類例が多くみられる（村田2005）。17・28の土師器高壺は透孔をもつものである。17は細長い三角形状の透孔を有するもので、仙台市西台畠遺跡や本遺跡第1次調査SI12などで類例がみられる。また28では長方形の透孔があり、名取市清水遺跡などで類例がみられる（佐藤・大久保2017）。これらの特徴は栗廻式期のうちでもやや新しい様相を呈しており、村田A編年の4・5段階に位置付けられる。18・23はとともに東海地方で生産された須恵器フラスコ形長頸瓶であるが、胎土や器形の特徴から18は湖西窯跡群の製品、23は猿投窯跡群の製品である。18は胴部がやや俵状を呈することから、後藤健一氏による編年（後藤1989・2015）の第III期に位置付けられる。また23は胴部が球形であることから、『愛知県史』に所収されている編年（愛知県史編さん委員会2015）のIII期に位置付けられることにより、7世紀後半～8世紀初頭頃と考えられる。

II期ではSB01、SK01・02・05出土資料が相当するが、遺物量は少ない。33の土師器壺は関東系土師器であり、類例を蔵王町堀の内遺跡でみることができる（鈴木2016）。34の須恵器高台壺や37の須恵器壺は、いずれも利府町硯沢窯跡群などでみられるものである。器形的な特徴から村田A編年の6・7段階に位置付けられ、8世紀前半～後半頃と考えられる。

III期ではSI10・11、SK10、SD01・04・09出土資料が相当する。土師器はロクロ成形が主体となる。41・42の土師器壺は内弯気味に立ち上がるものであり、45・46の須恵器壺はやや器高が高く、底部から口縁部に向かって直線的に開くことから、村田B編年1群の特徴を有し、8世紀末葉～9世紀初頭頃と考えられる。44は口径・底径ともやや大きく、底部から口縁部に向かって直線的に開くものであり、村田B編年2群の特徴を有する。須恵器では、42～43は多賀城市山王遺跡などでみられるもので、村田B編年1群の特徴を有することから、9世紀前半頃と考えられる。一方でSD01から出土した48～50は、口径に比べて底径が小型化するものであり、9世紀後半頃と考えられる。



第60図 5次調査出土の主要な土器

・東海地方産の須恵器について

原遺跡では、第1次調査で発見された美濃須衛窯跡群の製品とみられる円面鏡をはじめとし、これまでに猿投窯跡群のフラスコ形長頸瓶、湖西窯跡群の甕・フラスコ形長頸瓶が出土している。本調査においてもSI16より湖西窯跡群とみられるフラスコ形長頸瓶、SI17より猿投窯跡群のフラスコ形長頸瓶が出土している。

一方、岩沼市域ではこれまで横穴墓群から東海地方で生産された須恵器の出土量が多いことが指摘されている（佐藤・大久保 2007）。これらの横穴墓の被葬者については、市内では当該期の集落遺跡がほとんど見られないことから、本遺跡に居住した人々によって造営された可能性が提示されている（川又 2018）。本調査のSI17より出土したフラスコ形長頸瓶は、二木横穴墓群10号墓に近似した製品が存在する。さらにSI16より出土したフラスコ形長頸瓶は、二木横穴墓群7号墓、丸山横穴墓群10号墓、長谷寺横穴墓群A1号墓、土ヶ崎横穴墓群4号墓で近似した製品が副葬されていることから、その可能性は強まつたと言えよう。

また、本遺跡内に存在を推定している玉前駅家・玉前刻が機能している8世紀以降では、福島県と宮城県南部の太平洋沿岸部を通過する「海道」が存在するが、阿武隈川では架橋はされていないために駅家の周辺には渡河するための船舶が備えられていたとみられる（永田 2018）。言わば陸上交通と水上交通の結節点として本遺跡が機能するわけだが、遠隔地で生産された須恵器の出土状況から、このような状況はおそらく7世紀後半階まで遡る可能性が高い。

律令の規定では駅長は国司によって在地の有力農民層の中から指名されるとあるが、一介の有力農民がこれら当地方では希少な製品を多数入手できるとは考えにくい。史料には現れてこないが、これら遠隔地からもたらされた須恵器の数々は、本遺跡のような要衝地での駅家・駅路の整備段階の当初期には、在地勢力以外の力が大きく介在していたことを示しているかもしれない。



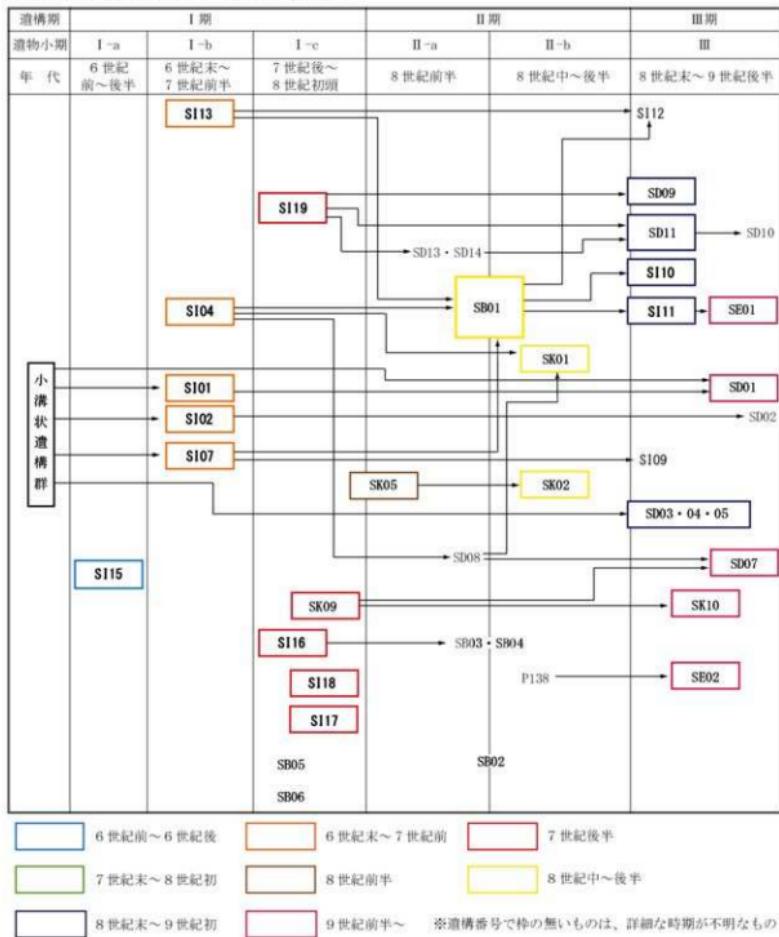
第61図 原遺跡と各横穴墓群の位置関係

2. 遺構について

・遺構の変遷について

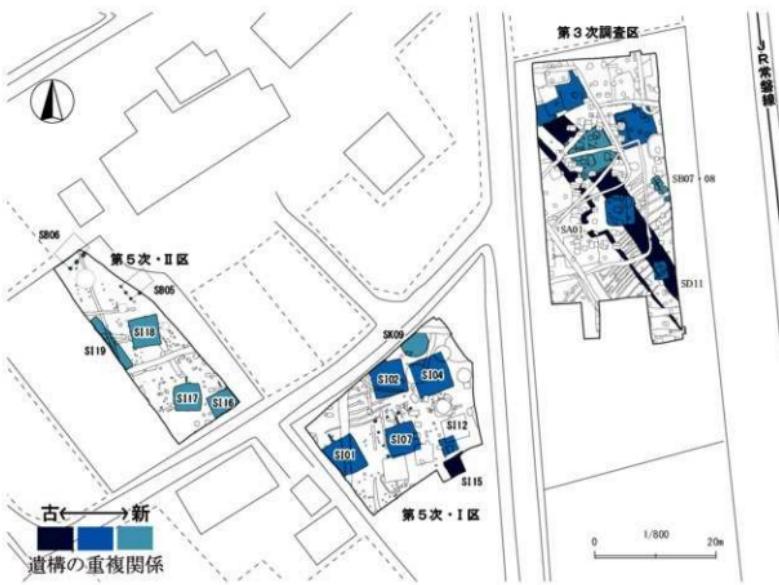
ここでは今回の調査で確認された主要遺構群の変遷と、これまで隣接箇所等で実施した第1・3次調査で関係する遺構について記述する。

前項の出土土器の年代観、そして各遺構の重複関係をもとに整理したものが第62図である。以下に各期の主要遺構の様相についてみていく。

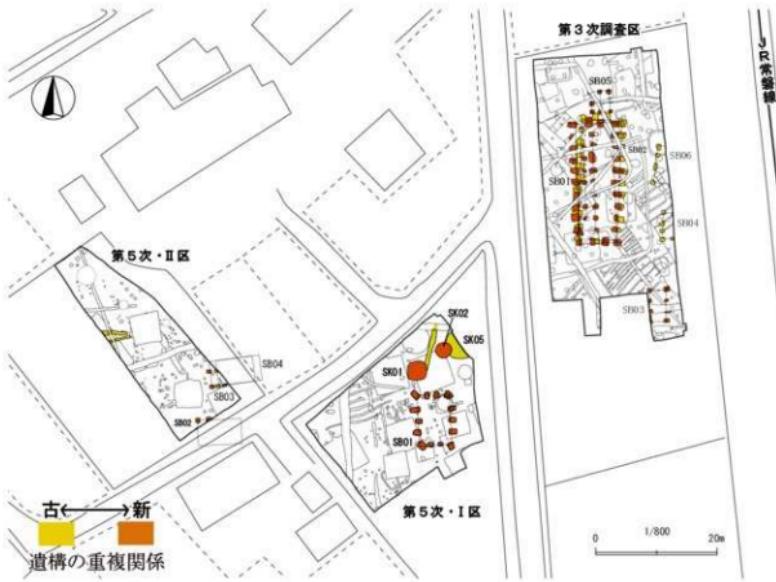


第62図 第5次調査主要遺構の重複関係図

I期の遺構群は、土器の年代観から6世紀前半～後半の時期をa小期（I-a期。以下の各小期も同様に表記）、6世紀末葉～7世紀前半をb小期、7世紀後半～8世紀初頭をc小期とした。I-a期に先行する遺構としては古墳時代中期頃の小溝状遺構群がある。I-a期の遺構はI区SI15が想定される。当該期の遺構についてはこれまで確認されておらず、今後集落の広がりの把握が必要となる。なお、第3次調査ではSD11大溝とSA01材木塀による区画が発見されているが、SA01材木塀の一部では入口とみられる部分がある。この両者の遺構の時期については確実に年代を比定しうる遺物は得られていないが、重複関係から後述するI-b期の遺構群に先行することは明らかである。詳細は今後の調査に委ねられるが、本調査のSI15の発見からこの時期の所産である可能性も考慮しておきたい。I-b期の遺構はI区SI01・02・04・07・13が想定される。この時期の遺構はこれまで堅穴建物のみの発見であるが、III期の遺構群と同様に遺跡内に広く分布していることが確認されている。しかしながら、第1次調査では散発的な分布状態であったのに対し、第3次調査地点、及び本調査I区ではまとまりをもって分布していることから、当該期集落の中心が本調査地点付近である可能性を惹起させる。I-c期の遺構群はI区のSK09のほか、II区でSI16・17・18・19の堅穴建物群が形成される。このうち、SI19は部分的な確認に留まるものの、一辺が10mを超える非常に大型の堅穴建物と考えられる。この遺構の主軸は真北から見た場合に38°西へ傾くが、同様に大きく西に傾く遺構にはII区で確認されたSB05・SB06の2棟の掘立柱建物があり、これらが一体となって存在していた可能性も考慮できる。

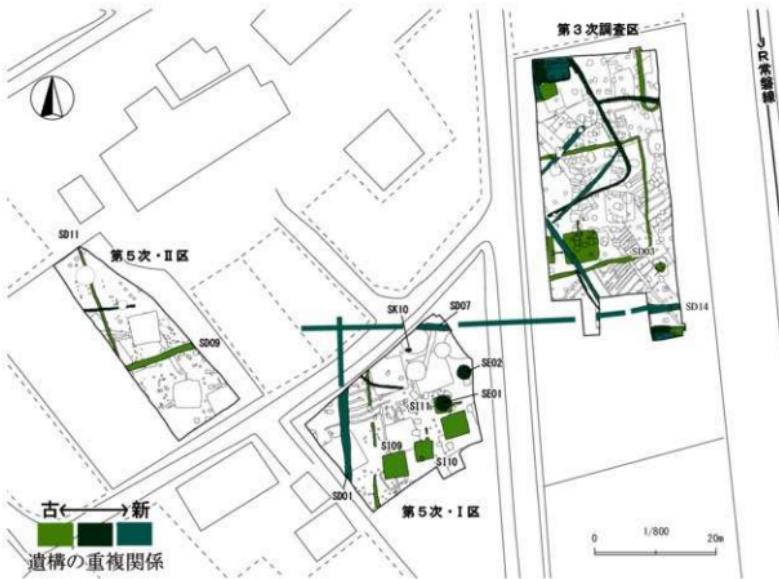


II期の遺構群は、土器の年代観、及び当該期遺構の重複関係から8世紀前半をa小期、8世紀半ばから後半をb小期とした。第3次調査ではI期遺構群が真北から40°前後ほど大きく西側へ傾くのに対し、II期遺構群は真北に近い主軸方位となることが確認されているが、今回の調査でも同様の傾向がうかがえる。II-a期の遺構はI区SK05大型土坑が想定される。大型土坑については後述するが、I-c期としたSK09やII-b期としたSK01・02もともにI区北東部に集中していることは、場の性格を考える上で重要な意味を持つ。II-b期になるとI区中央部で桁行4間、梁行3間のSB01がつぐられる。I区SB01は出土した須恵器坏からは8世紀前半とも考えられるが、第3次調査で確認された桁行10間、梁行3間のSB01大型掘立柱建物と建物の主軸をそろえていることから、同時期に機能していたと考えられる。第3次調査SB01は8世紀前半～後半の時期に、同規模の建物の建て替えが行われているうちの新段階であることから、本調査で確認したSB01についても8世紀半ばを中心とした時期に機能したと推定する。なお、第3次調査SB01と本調査I区SB01の柱穴の掘り方は、建物側が一段低くなるという段掘りとなるものが多いことも共通する特徴である。今回の調査ではこのほか、年代を判断する遺物には恵まれていないが、II区SB02・03・04も真北から4～8°西に振れるものであることから、I区SB01などと一連の官衙的遺構として計画的に配置された可能性もある。なお、本調査ならびに第1・3次調査地でもII期の段階では堅穴建物がほぼ見られないこと、さらには遺物の出土量も他の時期と比べて少ないことを併せ考えると、当該期の官衙中枢域は本調査地周辺に存在している可能性が高いと思われる。今後の調査では建物配置の検討のほか、外郭施設の確認、官衙施設に従事する人々の居住域・生産域の把握が大きな課題となる。



第64図 II期遺構群

Ⅲ期の遺構群は、土器の年代観から8世紀末葉から9世紀後半とした。Ⅲ期の遺構にはI区のSI10・11、SE01、SD01・03～05・07、SK10、II区のSD09・11・10が想定される。この時期になるとⅡ期の官衙的な建物群は調査地周辺では見られず、堅穴建物群が主体となる。このなかで注目されるのは区画溝と考えられるI区 SD01・07の存在である。I区北東部で発見された東西溝のSD07は、第1次調査SD12、第3次調査SD14の延長線上に存在し、規模もほぼ同様であることから同一の溝跡と考えられる。さらにI区西側に位置する南北溝であるSD01は、規模や断面形態が近似することからSD07と同時期の掘削とみられ、その走方向からSD07と直交するとみられる。また、これらの溝は底面に掘削時の工具痕を留めていることから、掘削時からあまり時間を経ずに埋め戻された可能性が考えられる。Ⅲ期の官衙施設の中枢は、令和元年度に調査を実施した第4次調査地周辺（第1図⑤）に展開する可能性があるが、これらの区画溝の存在からⅡ期の官衙遺構の中枢が移動した後の土地利用については、居住域、あるいは生産域の設定などを計画的に行っていったことが推量される。なお、II区の東西溝であるSD09も規模や断面形態がI区 SD07と近似し、出土した須恵器の年代観から機能していた時期についても同様にⅢ期遺構である。このため、現地説明会などではSD09とSD07を一連の遺構であるとの可能性を示していたが、詳細な合成図を作成する中で走方向がやや大きく南へ傾いていることが明らかとなつたことから、一連の遺構としてとらえることは困難と判断した。むしろ第3次調査SD03と走方向は近似していることから、前述のI区 SD01・SD07による区画とは異なる区画を設定するためにつくられた可能性も考慮される。また、SD09はII区 SD11と直交関係になる可能性も浮上しており、次年度以降の調査の中で注視していく必要がある。



第65図 Ⅲ期遺構群

・大型土坑について

第5次調査で発見された注目すべき遺構としては、前述のI-c期とII期遺構としたSK01・SK02・SK05・SK09の4基の大型土坑が挙げられる。これらの土坑はI区北東部の約140m²内という限られた面積の中で集中して存在している。以下に各遺構の機能について推定を試みたい。

SK01の平面形状は隅丸方形で、規模は長軸3.32m、短軸3.20mを測る。断面形状は逆台形であり、確認面からの深さは90cmを測る。底面には褐色粘土を用いた貼床がみられ、そこでは荷重によって変質した幅10~15cmのにぶい黄橙色粘土が東西方向に3列認められており、床板を設置するために根太木を並べた痕跡と考えられる。また、各根太木痕跡の先端には杭が打ち込まれていることから、壁板の設置、あるいは遺構の上部を覆うような簡易的な屋根のような設備が伴っていた可能性がある。このような特徴から、本遺構については温度や湿度などの配慮が若干必要となるような物資の貯蔵施設として利用されていた可能性が考えられる。

SK02の平面形状は円形で、規模は長軸2.68m、短軸2.58mを測る。断面形状は逆台形であり、確認面からの深さは68cmを測る。SK01とほぼ隣接した場所に位置し、断面形状にも近似性がみられる事から、機能としてはSK01同様に貯蔵施設として利用された可能性が考えられる。ただし、底面では貼床、床板などの痕跡は認められなかったことから、SK02で貯蔵された品物については温度・湿度管理をさほど必要としない物資であった可能性も考慮できる。なお、埋土の中層付近には焼土・炭化物が大量に含まれている。

SK05とSK09は調査区外へ広がるために平面形状はやや疑問があるが、円形もしくは梢円形を呈するとみられる。確認した範囲でのSK05の規模は長軸5.06m、短軸2.65m以上で、深さは148cmを測る。SK09の規模は長軸4.66m、短軸3.55m以上を測るが、壁面崩落の危険性があり104cmまでの掘り下げに留めている。この両者はともに断面形状が逆台形とみられ、堆積土は上層の一部を除けばほぼ自然堆積である。遺構の機能としては最上層以外からの遺物は極めて少なく、また有機物を明確に含む土層も認められなかつたため、廐棄土坑としての機能は想定しにくい。同様に底面付近には貼床や床板を設置した痕跡がなく、少なからず湧水もみられることから物資貯蔵としての機能も考えにくい。現時点ではII期の井戸跡が確認されていないことから、本遺構については貯水、あるいは地下水位の調整を機能目的としていた可能性を考えておきたい。なお、長期間開口している状況でありながらも遺物がほとんどみられないことは、大型土坑群が機能している段階のこの一角は管理が行き届いた場であったこと示しているかもしれない（註3）。

【註】

註1 普原洋夫氏からのご教示。なお、本資料は高木遺跡58号住居出土資料よりも短く、また細身である。

註2 小川淳一氏からのご教示。

註3 佐藤憲幸氏からのご意見。大型土坑を含め、調査地周辺に官衙的な建物が存在した時期（II期：8世紀前半～後半）の遺物はこれまででも発見数が少なく、首肯できる見解である。

第V章 総 括

1. 原遺跡は宮城県中央部南寄りの岩沼市南長谷字原・中原・上原・北上・角方地内に所在する。遺跡は南側を東流する阿武隈川によって形成された自然堤防上に立地している。
2. 今回の発掘調査は重要遺跡の範囲・内容確認調査として実施した。調査区は第3次調査区西側であり、発掘調査面積は904 m²（I区538 m²、II区366 m²）である。
3. 遺跡が所在する地域は、古代においては東山道と、茨城県から福島県・宮城県南部の太平洋側に設置された「海道」の合流・分岐地であることから、これまでに発見された官衙関連の遺構・遺物は『延喜式』に記載される玉前駅家、あるいは多賀城跡から出土した木簡によって存在が明らかとなつた玉前刻に関わるものとみられる。
4. 確認した遺構は掘立柱建物跡6棟、竪穴建物跡15棟、柱列跡1列、大型土坑4基、井戸跡2基、溝跡13条、土坑、柱穴多数である。
5. 出土した遺物は弥生時代の土器、古墳時代中期から平安時代にかけての土師器・須恵器・石製品である。このうち主体となるのは6世紀末葉から9世紀前半にかけての土師器・須恵器である。
6. 出土した遺物には在地産の土器と遠隔地から搬入されたものがある。他地域から搬入された土器のうち、SI16 竪穴建物跡から出土した須恵器フラスコ形長頸瓶は湖西窯跡群を中心とした地域の製品、SI17 竪穴建物跡から出土した須恵器フラスコ形長頸瓶は猿投窯跡群の製品と考えられるものである。また会津若松市に存在する大戸窯跡群で生産されたとみられる須恵器長頸瓶なども出土している。
7. 発見された遺構のうち、8世紀半ば頃のSB01掘立柱建物跡の柱穴掘方は1辺が約1mの長方形であり、建物主軸も真北方向に近いことから、官衙の遺構群の主要な施設の一部とみられる。
8. SD01溝跡とSD07溝跡は直交するとみられることから区画溝である可能性が高く、官衙中枢施設が本調査地点周辺から移動した後に居住域の設定などを計画的に行っていいたと考えられる。
9. 遠隔地で生産された須恵器は市内の複数の横穴墓群からも出土しており、横穴墓の被葬者たちの生活母体が本遺跡地であった可能性が高くなつた。

【引用・参考文献】

- 愛知県史編さん委員会 2015 『愛知県史 別編 畜業1 古代 猿投系』
- 今泉隆雄 2005 「古代国家と郡山道路」『宮城県仙台市郡山道路発掘調査報告書 -総括編(1)-』仙台市文化財調査報告書第283集
- 今泉隆雄 2018 「第二部第五章 古代南奥の地域的性格」『古代国家の地方支配と東北』吉川弘文館
- 岩沼市 1992 『岩沼市土地分類調査(細部調査)報告書・現況調査編』
- 岩沼市教育委員会 2017a 『貞山塗掘調査報告書』岩沼市文化財調査報告書第17集
- 岩沼市教育委員会 2018a 『原遺跡第2次調査概要報告書』 岩沼市文化財調査報告書第19集
- 岩沼市教育委員会 2018b 『下野郡館跡』 岩沼市文化財調査報告書第20集
- 岩沼市教育委員会 2019a 『原遺跡第3次調査概要報告書』 岩沼市文化財調査報告書第21集
- 岩沼市教育委員会 2019b 『市内遺跡発掘調査報告書1』 岩沼市文化財調査報告書第22集
- 岩沼市教育委員会 2019c 『熊野遺跡第1・2次調査報告書』 岩沼市文化財調査報告書第23集
- 岩沼市教育委員会 2020a 『原遺跡第4次調査概要報告書』 岩沼市文化財調査報告書第24集
- 岩沼市教育委員会 2020b 『市内遺跡発掘調査報告書2』 岩沼市文化財調査報告書第25集
- 岩沼市教育委員会 2021 『原遺跡第1次調査ほか』 岩沼市文化財調査報告書第26集
- 岩沼市史編纂委員会 2015 『岩沼市史』第4巻 資料編I 考古
- 岩沼市史編纂委員会 2018 『岩沼市史』第1巻 通史編I 原始・古代・中世
- 近江俊秀 2006 『古代国家と道路 考古学からの検証』 青木書店
- 川又隆央 2018 「第五章第三節 横穴墓の築造と分布」『岩沼市史』第1巻 通史編I 原始・古代・中世
- 後藤健一 1989 「湖西窯跡群の須恵器と窓構造」『静岡県の窯業遺跡』静岡県文化財調査報告書第42集
- 後藤健一 2015 『遠江湖南窯跡群の研究』六一書房
- 佐藤敏幸・大久保弥生 2007 『宮城県の湖西窯須恵器』『宮城考古学』第9号 宮城県考古学会
- 佐藤敏幸・大久保弥生 2017 「墳丘における古墳時代後期から奈良時代の高坏(1) -宮城県のスカシ付高坏を中心に-』『宮城考古学』第19号 宮城県考古学会
- 白鳥良一 2015 「特論1 岩沼市の東山道と玉前駅、剣(関)」『岩沼市史』第4巻 資料編I 考古』
- 白鳥良一 2018 「第八章 四東山道・東海道駅場と岩沼」『岩沼市史』第1巻 通史編I 原始・古代・中世』
- 鈴木 雅 2016 「律令国家形成期の陸奥国柴田・刈田地方・藏王町円田盆地の遺跡群の検討を中心に-」『宮城考古学』第18号 宮城県考古学会
- 仙台市教育委員会 1987 『五本松窯跡』仙台市文化財調査報告書第99集
- 館野和己 1998 『日本古代の交通と社会』 塙書房
- 館野和己・出田和久編 2016 『日本古代の交通・交流・情報』1~3 吉川弘文館
- 辻 秀人編 2007 『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』 東北学院大学文学部
- 東北古代土器研究会 2005 『研究報告2 東北古代土器集成-古墳後期～奈良・集落編(陸奥)ー』
- 東北古代土器研究会 2008 『研究報告3 東北古代土器集成-須恵器・窓跡編(陸奥)ー』
- 水田英明 2015 「古代東北の内陸水運 -最上川・阿武隈川流域を中心-」『日本古代の運河と水上交通』 八木書店
- 水田英明 2018 「第八章 三 玉前剣・玉前駅と阿武隈川」『岩沼市史』第1巻 通史編I 原始・古代・中世』
- 福島県教育委員会 2002 「第1編 高木遺跡」『阿武隈川右岸堀堤遺跡発掘調査報告書2』福島県文化財調査報告書第401集
- 古川一明 2018 「東北・関東の古代の大型土坑について」『東北歴史博物館紀要19』 東北歴史博物館
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1979 「第34次調査」『多賀城跡-昭和54年度発掘調査概報』宮城県多賀城跡調査研究所年報 1979
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1979 『多賀城跡 政庁跡 図録編』
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1985 『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1984 多賀城跡』
- 宮城県多賀城跡調査研究所 2013 『多賀城跡木簡II』宮城県多賀城跡調査研究所資料III
- 村田晃一 1994 「土器からみた官衙の終末-東北地方の場合-」『古代官衙の終末をめぐる諸問題 第1分冊問題提起・各地方の概要』東日本埋蔵文化財研究会
- 村田晃一 2005 「7世紀における陸奥北辺の様相 -宮城県域を中心として-」『日本考古学協会2005年度福島大会シンポジウム資料集』 日本考古学協会 2005年度福島大会実行委員会
- 村田晃一 2007 「V. 宮城県中部から南部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』 東北学院大学文学部
- 村田晃一 2018 「陸奥中部における陶瓦の生産と消費(1)」『宮城考古学』第20号 宮城考古学会



1 調査地点遠景（北側上空から）



2 調査地点遠景（南西側上空から）

写真図版2



1 I区全景（上空から）



2 II区全景（上空から）

写真図版3



1 SB01 (南から)



2 SB01 P136 (南から)



3 SB01 P137 (西から)



4 SB01 P140 (南から)



5 SB01 P130 (南西から)

写真図版4



1 SI01・SD01（南から）



2 SI01 カマド（南から）



3 SI02 遺物出土状況（南から）



4 SI04 カマド（南から）



5 SI07・09・10（南から）

写真図版5



1 SI16 カマド（南から）



2 SI17（南から）



3 SI17 遺物出土状況（南から）



4 SI18（南から）



5 SI18 土製品出土状況（南から）

写真図版6



1 SI11・SE01（東から）



2 SE02（南から）



3 SK01（南から）



4 SK02（南から）



5 SK09（南側上空から）



6 SD07（東から）



7 SD09（北から）



8 SD11（北から）

写真図版7



1 須恵器・坏 (第10図1)



2 土師器・壊 (第20図1)



3 土師器・壊 (第20図4)



4 土師器・壊 (第20図3)



5 土師器・壊 (第28図1)



6 土師器・壊 (第32図1)



7 土師器・壊 (第34図1)



8 土師器・壊 (第34図2)

写真図版8



1 土師器・高坏（第34図3）



2 土師器・高坏（第34図4）



3 土師器・壺（第34図6）



4 土師器・壺（第35図8）



5 須恵器・フラスコ形長颈瓶（第35図9）



6 須恵器・フラスコ形長颈瓶（第37図1）



7 土師器・壺（第37図2）



8 土師器・壺（第37図3）



1 土製品・支脚（第39図3）



2 土師器・高坏（第41図1）



3 土師器・壺（第41図2）



4 須恵器・捏鉢（第49図1）



5 須恵器・坏（第49図2）



6 須恵器・坏（第49図3）



7 須恵器・円面硯（第49図4）



8 土製品・羽口（第49図5）

写真図版 10



1 土師器・坏 (第 52 図 1)



2 須恵器・高台坏 (第 52 図 2)



3 須恵器・高盤 (第 53 図 2)



4 須恵器・坏 (第 55 図 8)



5 須恵器・坏 (第 55 図 2)



6 底面の墨書 (第 55 図 2)



7 須恵器・坏 (第 55 図 9)



8 土師器・坏 (第 57 図 1)

報告書抄録

| ふりがな | はらいせきだいごじはつくつちょうさがいようぼうこくしょ | | | | | | |
|--------|--|-----------------|---|-------------------|---|------------------------|---------------|
| 書名 | 原遺跡第5次発掘調査概要報告書 | | | | | | |
| シリーズ名 | 岩沼市文化財調査報告書 | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第 27 集 | | | | | | |
| 編集者名 | 川又隆央・武田裕光・兼田芳宏 | | | | | | |
| 編集機関 | 岩沼市教育委員会 | | | | | | |
| 所在地 | 〒 989-2480 宮城県岩沼市桜 1 丁目 6-20 TEL(0223)-22-1111 | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦 2021 年 3 月 31 日 | | | | | | |
| 所取遺跡 | 所在地 | コード 市町村 | 北緯 道 緯 | 東経 度 緯 | 調査期間 | 調査面積 m ² | 調査原因 |
| 原遺跡 | 岩沼市南長谷字原 | 42111 | 15053 | 38.05.03 | 2020.07.14 ～ 2020.11.30 | 906 m ² | 範囲・内容 確認調査 |
| 所取遺跡 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 | | |
| 原遺跡 | 官衙関連施設 集落跡 | 古墳時代 奈良・平安時代 | 掘立柱建物跡 柱列跡 堅穴建物跡 井戸跡 大型土坑 構跡 土坑 | 須恵器 土師器 石製品 | 官衙関連施設の一端と考えられる 掘立柱建物跡を確認した。また、 7世紀後半の堅穴建物群や9世紀 代の区画溝跡、堅穴建物群などを 発見した。 | | |
| 要約 | <p>原遺跡が所在する岩沼市南西部の玉崎地区は、『延喜式』に記載される「玉前駅家」、多賀城跡出土木簡にみられる「玉前刻」の比定地とされてきた。平成 28 年度の圃場整備事業に伴う第 1 次調査では、掘方規模の大きい柱穴跡、美濃地方で生産されたと考えられる須恵器円面鏡が発見され、また翌 29 年度に実施した第2次調査では墨書き土器や材木痕が発見されたことから、官衙関連施設の可能性が考えられるようになった。さらに平成 30 年度に実施した第3次調査では、主軸が真北方向となる桁行 10 間、梁行 3 間の長舎が同位置で建て替えが行われていることが判明し、建物の機能した時期は8世紀前半から後半と考えられるなどの成果が得られ、第4次調査では8世紀代～9世紀代の掘立柱建物跡を確認し、官衙中枢施設が移動している可能性が得られるなど、これまでの調査によってさらに遺跡の重要性が高まった。</p> <p>第5次調査は、第3次調査区の西側で実施した。調査で発見された遺構は掘立柱建物跡 6 棟、堅穴堤防跡 15 棟、柱列跡 1 列、大型土坑 4 基、井戸跡 2 基、溝跡 13 条などであり、出土した遺物から7世紀後半から9世紀半ば頃を主体とする。これら遺構群の変遷は、6世紀半ば頃～8世紀初頭頃の I 期遺構群では多数の堅穴建物と 2 棟の掘立柱建物、8世紀前半～後半頃の II 期遺構群では掘立柱建物と大型土坑で形成され、8世紀末葉～9世紀半ば頃の III 期遺構群は溝で囲まれた区画内で堅穴建物や井戸がつぐらされている。このうち II 期の SB01 は、建物の主軸方向がほぼ真北方向に近いことから、第3次調査で発見された長舎と一連の施設と考えられる。出土した遺物の中には猿投窓跡群や湖西窓跡群を以て生産されたプラスコ形長頸瓶、会津若松市の大戸窓跡群で生産された長頸瓶がみられる。特に7世紀後半段階での東海地方で生産された須恵器については、これまで市内に点在する横穴墓群からも発見されているものであるが、今回の発見によってこれら横穴墓群の被葬者たちの生活母体が当遺跡地であった可能性がさらに高まった。</p> | | | | | | |

岩沼市文化財調査報告書第 27 集
原遺跡第 5 次発掘調査概要報告書

令和 3 年（2021）3 月
発行 岩沼市教育委員会

岩沼市桜 1 丁目 6 番 20 号
生涯学習課 TEL0223(22)1111 内線 573
印刷 株式会社 国井印刷

岩沼市藤浪一丁目 4 番 35 号
TEL0223(22)2221